機動戦艦ナデシコ 異端録

秋永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦艦ナデシコ　異端録

【Ｎコード】
Ｎ４３３０Ｌ

【作者名】
秋永

【あらすじ】
それは、小さな事だった……

気にしなければ気が付かない、そんな些細な事……

だけど、そんな些細な事は、確実に人を侵蝕し出す……宇宙を舞台に広がる戦火に『死神』は口を開けて目が覚める

『機動戦艦ナデシコ　異端録』

それは、小さな始まりだった……

プロローグ　彼の翼（前書き）

正直、ちゃんとやっていけるか不安……とりあえず、どっちが上とか細かいの気にせず読んでくれると嬉しいです。
なんとなく、『これ混じっていても不思議じゃないな』程度で考えたんで。
後、この小説の主人公は使いまわす基、ドンドン飛んでいく予定です。
ロボットはカッコいいよね。

プロローグ　彼の翼

レイヴンズ・アーク……各国の傭兵を管理に監視、仕事の紹介をする組織だ
『レイヴンズ・ネスト』と呼ばれるコンピュータにより、その仕事は管理されており、世界中の戦争が現状の戦力で最速で終了する演算結果を元に傭兵達……『レイヴン』に仕事を任せている
そんな組織に、『異端の鷹』なんて物騒極まりない二つ名を持つレイヴンが帰還した
彼は、組織の代表である『ジャック・O』の部屋に来ていた
彼が請け負っていた仕事……『某企業の裏切り者の抹殺』に関して報告書を提出する為だ

「ただ今帰還しました。これがミッションレポート……んじゃ、失礼します。」

「まあ待て、ドクター・コジマがお前に今度受ける依頼で乗る機体に関して話があるようだ。」

「お、親父っすか……わかりましたよ、行きますから、ジト目はやめてくださいっ！！」

別に、親子仲が悪い訳では無いが、円満でも無かった
研究の為に、ストイック過ぎる父が苦手なのだ……彼は頭こそ良いが、父と違い『まだ』、『人道的』な思考を持ち合わせている……無用な殺しはしない……が、前回みたいに皆殺しにするのはあれが初めてなのだ……あの時に自身に何が起こったのかわからない、出来ればそれがわかるまで働くのは遠慮したいが
専属のオペレーターの話によると、帰還した際には、既に次の仕

事が決まっていたそうだ
現実逃避をしながら、彼は地下にある父親の研究室に向かった

――――――――
――――――
――――

「来たか……思ったより早かったな。」

「釘を刺されたしね……で、今度はなんの実験？」

以下にもマッドサイエンティストが居そうな部屋で、普通を着飾ったような男性が居た
彼の名前は、『孤島（こじま）　雄一郎（ゆういちろう）』……疾風の父であり、世界の技術の大半をブレイクスルーしかねない技術者である
彼のパソコンには、様々なウィンドウが乱列し、様々な作業を同時進行しているようだ

「さて、疾風に少し早い誕生日プレゼントだ……受け取ってくれ。」

「またなんかの実験かよ……わかったよ、んな子犬みたいな目をしなくても行くよ、やるよっ！！」

白い鍵みたいなデバイスをこちらに差し出しながら、疾風父は、まるで

（，・ω・、）つ

と言った雰囲気で疾風を見ている

彼は、この雰囲気が堪らなく苦手で、何故か逆らえないのだ
そういえば、母もあの雰囲気に愛嬌を感じて結婚したらしいが……俺もああなるのだろうか？
デバイスと一緒に渡された地図のメモを元に、彼は地下を歩き出す

「疾風……あれは、まだ序章だ。あれを乗りこなせないようじゃ道はないぞ……ククク…クハハハハハ……」

疾風父は、穏やかな笑みを一変させ、狂ったような笑みを浮かべ、高笑いをする……弟子達は、またかよと各々の作業を続行していた

地下第三試作機ハンガー……赤い悪魔とか紅い鬼神……ようするに、裏切り者を粛正用ＡＣ（アーマード・コア）
『ナインボール』や、
赤いザリガニと言う不名誉極まりない二つ名を持つ『ファンタズマ』が鎮座している個人的に入る度に合掌したくなる場所だ
ここに、一際異彩を放つ白い機体が居た

「お袋、こいつが……」

「そう、『ビッグバイパー』よ……現在、連合軍に配備されているＬＥＶの系譜になるけど、性能はダンチよ。」

疾風の母が、側に来て説明を始める
彼女は、根っからの職人のようで、父がプログラムなどのソフトウェアが得意なら、彼女は機体自体のハードウェアを作るのが得意なのだ……まあ、バカップルでもあるのだが

「お袋が作った割に、大分スマートみたいだけど？」

「いいじゃない……興が乗っただけよ。それに、可変機って『燃え』ない？」

見た目こそ、可憐な乙女な我が母は、根っからのスーパーロボットファンでもある……ナインボールや、ファンタズマも、敵の機体みたいだから、と作り出したらしい……頼むから、三連バースト機構持ちは止めてくれ、精神的に来ると言ったら、狙い通りといっていた気がする

「確かにわかるよ……死んだはずの友人が可変機に乗って主人公のピンチに颯爽と駆け付けるなんて浪漫の一つだと思うね。」

母の影響で、彼はロボットアニメをよく見ていた……勧善懲悪の熱血系から、主人公の周りの人間が、主人公に様々な影響を受けていく成長ドラマ系など、様々な物を網羅している

「あら、言うようになったじゃない……まあ、このビックバイパーはどちらかと言うと、かませ犬的キャラが中の人の機体を元にチューンしたんだけどね。」

「いいよ……メタトロン的発言に突っ込む気も失せてしまったよ。」

とりあえず、もう突っ込みを入れる気も失せたようで、高機動形態に可変テストを終えたビックバイパーに乗り込み、動作確認をしようとする

「えっと、ＡＣ（アーマード・コア）と勝手が違いすぎるな……何が何だがさっぱりだ。」

すると、突如赤いディスプレイが表れ、そこには『ＤＥＬＰＨＩ』と記されていた

『おはようございます、私は独立型戦闘支援ユニットＤＥＬＰＨＩです。』

「おはようと言いたいが、時間的にはこんにちはだな。」

冷静に、だが何処かずれた会話をしだす二人？であった……この時、『疾風』は無二の相棒を得た瞬間だが、本人にまだ自覚は無い

『そうですか……では、改めてこんにちは、独立型戦闘支援ユニットＤＥＬＰＨＩです。』

「そっか、よろしくデルフィ。」

プロローグ　彼の翼（後書き）

一次元萌えはメジャー……異論は許さん。
君達、『ＡＤＡ（エイダ）』という『ＤＥＬＰＨＩ（デルフィ）』の姉妹ＡＩの反応を見たら大分毒されるから……作者は、メタトロンやコジマ粒子より、ＡＩに汚染（萌え的意味合いで）されています。

第一羽　白い閃光と白い百合（前書き）

さて……早くナデシコを見直す作業に戻るかな

■7／3：一部誤字修正＋α

第一羽　白い閃光と白い百合

結局、なんやかんや（汚い大人の取引）でネリガル社の最新鋭機動戦艦『ナデシコ』の火星行きを護衛の依頼で来た俺と新しい愛機の『ビックバイパー』とそのサポートＡＩ『ＤＥＬＰＨＩ（デルフィ）』は、ネリガル社の格納ドックに来ていた

「おぉ……あれが『エステバリス』か、噂に聞いていたけど、凄い柔軟だな。」

『間接部の柔軟性、作戦への適応力に関しては、エステバリスはビックバイパーを上回ります……が、継続活動時間に貴方が乗る場合の機動力では、ビックバイパーはエステバリスを遥かに上回ります。』

「理論値ではね……張り合わなくていいから、さて挨拶周りしないと。」

すいませーんっと、疾風は青いエステバリスを弄っている人々に近づく

疾風はまだ、制服を貰っていない為（ネルガル社自体、ビックバイパーの慣熟訓練の為に今日来たのだ）、目立たない私服だ……疾風は傭兵として、目立たないように行動しないと……ケツがムズムズするのだ

「どうした、坊主っ！！ネルガルの関係者で迷い込んだか？」

「いえ、ビックバイパーのパイロットの『疾風』です。今回、ナデシコの護衛で来たので挨拶をと。」

名前……いや、明らかにビックバイパーの部分に反応する眼鏡の男、ウリバタケは、急に疾風に近づき、両手を取る

「俺はウリバタケって言って、ナデシコの整備クルーの頭を担当してるだが……ビックバイパーって坊主の機体か？」

「は、はい……母が機体を、父が制御プログラムと動力源を開発したんですが……えっと、手痛いです。」

「おっと、悪い悪い、で、物は相談なんだが……俺達にビックバイパーの整備をさせてくれないか？　若い連中に『コジマの芸術』について説いてやりたいんだが、実物があった方が楽だし……」

「楽だし？」

柄にもなく、相手のペースに乗る疾風……普段は歳相応の男だが、依頼中はキリッとしています

だから『前回（前作を見よう）』であんなややこしい事になったのを思い出し、長期なんだし素で行こうと思ったのだが、早くも泣きそうだ

「世界のコジマ作品に直に触れられるなんざ、『アーク』の連中か『企業連』の連中ぐらいだからなっ！！　しかも、夫妻の作品と来たら興奮しない方が変だぜっ！！　良い親持ったな、おい。」

「ど、どうも……（親父達、崇拝してる人達居るんだな。）」

その後、自分の親の武勇伝？を延々と聞かされる疾風

世界で最初にナデシコの動力にも使われている『相転位炉』やそ

れらの大出力から得られるエネルギーを効率よく使うことで得た技術『ディストーションフィールド』と『グラビティブラスト』の開発にも関わっていたらしい……あの人達、なんやかんやで適当な人達だから今更驚かないぞ

「って訳で、通称『コジマ技術』により、木星蜥蜴みたいな突然の襲撃に地球は対応できるほど、地球の機械工学は発達したのだっ！！」

「おお……」

どうやら、ウリバタケさんの話は終わったようだ
作業を終えた若い衆と青いエステバリスのパイロットも一緒に正座をして拍手していた

「さっき、エステバリスの中で聞いたぜっ！！　お前、あの戦闘機のパイロットなんだろ？　俺はダイゴウジ・ガイっ！　気軽にガイとでも呼んでくれ。」

「ビックバイパーの『ランナー』の疾風です……よろしくな、えっと……ガイ？」

熱い握手を交わす二人……だが、疾風は明らかに引き攣っている
別に、ガイやウリバタケ達に不満があるわけじゃ無い……問題は

「そういえば、艦長さんは見ませんでしか？　俺、艦長にだけ挨拶してないんですよ。」

「俺も見てないなぁ～……まあ、どうせ戦争に行く訳じゃ無いし、気長にやろうや、若いのっ！！」

疾風の疑問に、ウリバタケが答える……所謂遅刻だろう
状況的には木星蜥蜴みたいな面倒ｎ

ドゥゥウオオン……

突然、ナデシコを格納しているドックを振動が襲う
木星蜥蜴と呼ばれる無人兵器郡が攻めて来たようだ……奴らは『ＢＥＴＡ』かと一人ごちる疾風
デルフィに緊急ハッチを弄らせ、ビックバイパーに乗り込み、計器を弄り準備をする
パイロットスーツは着ていないが、ビックバイパーには今は衰退した『メタトロン技術』が少し使われ、発生した１２Ｇまでの慣性を殺す機構が存在する
艦長が来て、ナデシコを動かす為の『鍵』を持って来るまでの囮をすれば良いだろう
ガイが何やら五月蝿いが、ビックバイパーは大空に飛び上がった

――――――――――――――――――――――――――――――――

「おのれっ！！抜け駆けとは卑怯なっ！！」

「まあ、雇われだし、報酬は歩合性らしいから張り切る気持ちは分からなくはないがな……お前らっ！！　レイヴン様が時間稼ぎをしている内に広げたモンを片して、ナデシコに乗り込むぞっ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「うすっ！！」」」」」」」」」」」」」」」

悔しがるガイに、臨機応変に動き出すウリバタケ達整備クルーの

面々
ナデシコは着実に動き出す為の準備を整える……後は『役者』が来るのを待つばかりだ
　青い髪に白い制服の女性が意気揚々とナデシコに入っていた暫くした後、黄色いシャツの青年が入ってくる
　格納ドックには、ピンク色のエステバリスが一機残され、仕舞おうかと言うタイミングで、黄色いシャツの青年がやって来たのだ
ウリバタケは、彼に乗るように言うと是非も聞かずにアサルトピット（エステバリスのコクピットブロック）に押し込み、陽動を頼む
　ウリバタケは疾風を信用して居た訳では無く、単にエステバリスの機動データが欲しいと言う打算的考えだったが

「3番エレベーター上げろっ！！　囮その二が行くぞっ！！」

『ちょっと待ってくれっ！　俺はパイロット j……』

　この時、ウリバタケは通信を打ち切り、ピンクのエステバリス……テンカワ・アキトの初陣に送り出した
　途中、惚気た話があったらしいが、ネリガル関係者により、通信ログが削除されてしまったが

『ふ、ふざけんなぁ〜〜っ！！』

　エレベーターには、青年の嘆きが木魂した……まあ、少なくても死にかける事はないだろうが

――――――――――――――――――――――――

『残敵、推定73……敵第二波、来ます。』

「ちっ、サブウェポンのリップルレーザーをマルチミサイルにっ！！」

『了解、マルチミサイル……レディ』

自ら囮の人をかって出た疾風……ビックバイパーの大気圏内での戦闘機動の感触を確かめながら木星蜥蜴の無人兵器郡を撃ち落としていく

ビックバイパーの『最大全長』は約２１ｍ、だが可変時はやや小さくなるため羽を畳んでいる状態では機体の高さと横な幅がそれぞれが約５ｍ程まで小型化する……ただし、縦幅は１０ｍを越えるが故に、皆ビックバイパーは『戦闘機』と勘違いしているが、実際は違う

ビックバイパーの戦闘機形態はあくまでも仮の姿……疾風は使うべきタイミングを眈眈と狙っていた

『第三ハッチの解放を確認……味方増援のようです。』

「マジかっ！！　助かった……のか？」

流石に、アーマード・コア恒例の『騙して悪いが……』を疑い出す疾風

過去に蜂の巣にされた経験が鎌首もたげてやって来たようだ

『ちくしょおっ！！　こうなりゃ自棄だっ！！』

「あらら……味方は味方でも囮の増援なのね。」

青いエステバリスの隣に居たピンク色のエステバリスが、武装無

しでやって来た……どうやら、囮の増援のようだ

『疾風、彼の援護をしましょう。エステバリスを失うのは、今後の仕事に差し支えると思います。』

「言われんでも……マルチミサイル、ファイアっ！！」

ピンク色のエステバリスに群がる無人兵器郡……『バッタ』をマルチミサイルによりまとめて消し去る

ビックバイパーのマルチミサイルは、物理的な物では無く、圧縮されたエネルギーをターゲットに向かってホーミングさせるシンプルな物だ

マルチミサイルにより、バッタは次々と灰燼へと消えていく

「アンタっ！　バッタ共が市外地に行かないように誘導するの手伝ってくれっ！」

『んな事言っても、俺は素人なんだよっ！！』

その割に良い動きするよな……白銀と同類の生き物（自分はある意味強化人間なので除外）なのではと勘繰りつつ、レーザーやリップルレーザー（輪状のレーザー）で撃ち落としていく

『疾風、彼には地上のバッタ達を頼みましょう。彼のエステバリスは陸戦フレーム言う地上戦に特化したフレームです。』

「そうだな、すまない……えっと、俺は疾風って言うんだけど。」

『俺はテンカワ、テンカワ・アキトぉっ？！』

バッタの爆発に巻き込まれて、のけ反るテンカワ機……それに群がるバッタを撃ち落とすビックバイパー
どうやら、当初の『囮』と言う目的は達しているようだ

「大丈夫かっ！？」

『なんとか……こなくそっ！！』

なんとか、出港したナデシコと合流したいが、群がる無人兵器郡が邪魔して行けない……テンカワ機はワイヤードフィストと言った白兵戦で、ビックバイパーは高機動でレーザーを乱射して撃ち落とす

『ナデシコより、高エネルギー収束を確認、疾風、テンカワ機を回収して戦線を離脱してください。』

「んなっ？！　逃げるぞテンカワァっ！！」

『へ、うわっ？！』

バッタ相手に四苦八苦しているテンカワ機をビックバイパーの二股の機首で拾い上げ、フルスピードで離脱する

『グラビティブラスト……てぇっ！！』

『「ばかぁーーーーーっ！！！」』

『敵機９０％消失、敵撤退を開始しました……お疲れ様です。』

男二人の叫び声……虚しく蒼穹に木霊した
最近、叫んだり嘆くばかりだと思う疾風……きっと、もっと叫んだ

り、嘆く事が増えると、この時まだ知らない

第一羽　白い閃光と白い百合（後書き）

主人公が早くもシリアスからシリアルキャラに……ナデシコは恐ろしい

第二羽　俺とお前で熱血だ、いや、俺は後ろで良いや（前書き）

ナデシコを書くのが楽しすぎて困る……しばらく、これ一本に絞るべきかな？

同時に二つ進行とかおかしいんだ、うん

第二羽　俺とお前で熱血だ、いや、俺は後ろで良いや

ズンズンと格納庫からのしのしと歩く二人の人影があった
片方は黄色いシャツを来た至って普通の青年『テンカワ・アキト』
、そしてもう片方は地味な服装の少年『コジマ　ハヤテ』だ
戦略的に、グラビティブラストのタイミングは最高だったろう…
…だが、二人共、こちらに一声あっても良いと思うんだ、おじさん
って言う気持ちなのだ

「さっきの主砲をぶっぱして下さった糞は何処のどいつだっ！！」

「お、落ち着けってっ？！」

怒り心頭のハヤテを、アキトは羽交い締めにして止める……じた
じたと暴れているが、身長約１６５ｃｍのハヤテは、身長約１７５
ｃｍのアキトに全力で止められては、成す術はなかった

「あれ？　まさかアキト？」

「……まさか、ユリカか？」

急に雰囲気が変わるブリッチ、こう、花畑が咲き誇るような感じ
なのだ
無駄と悟ったのか、ハヤテは首を捻りながらブリッチを歩く

「もし、よろしければ解説しますが？」

「ん？　あ、君は……」

ハヤテに話しかけてきたのは、白い髪に金の瞳を持つ少女である
『ホシノ・ルリ』……変なところがリアリストな不思議な女の子だ

「私の名前は、ホシノ・ルリ……先程、挨拶しましたよね？」
「ああ、確かにしたね。」

【ホシノさん、説明をお願いします。】

デルフィが、ルリを急かす……あんまり引き延ばすと大変だものね

「おっほん、それでは説明を。」

【「ワーワー、パチパチ。」】

「茶化さないでください。」

【「すいません。」】

ルリは、本当にＡＩなのかと疑いたくなるくらい柔軟かつ人間くさいデルフィに興味を示しつつ、解説を始めた

「今回は、明らかに敵のせいです。敵の状況やナデシコの状況を考えても、最高のタイミングでの主砲攻撃でした……しかし、友軍の位置データなどがジャミングによって把握できなかった為、強行されました。」

「（ジャミング……？　デルフィ、ビックバイパーって確か、装甲に俺の義足と同じ素子が埋め込まれてるよな？）」

【（そうです、ビックバイパーは特定の機器以外によるジャミング

が可能です。先程、ナデシコの統括ＡＩ『オモイカネ』さんに接触し、ビックバイパーに対するアンチジャミングをインストールしました。これにより、ビックバイパーはナデシコとの連携した作戦展開が可能です。）】

ようは、ビックバイパーのせいのようだ……ビックバイパーはステルス性の実験な際、装甲の内側に、対衝撃性素材とは別に、変なシートを挟んでいた

それは、ビックバイパーの姿を『電気的』に視覚するカメラやレーダーをジャミングする能力がある

だが、友軍にまで効果があるとは……だれが予測できたろうか

暫くルリ以外（オモイカネ経由でバレるし）黙っているが……しかし、それでもぶっ放した艦長も艦長だと思う

「とりあえず、艦長に名言吐いてくるよ……はぁ」

「？？　それでは、お気を付けて……それから、デルフィさんにはオモイカネに定期的に接触して貰って構いませんか？」

ハヤテが痴話喧嘩をしているアキトと艦長を止め、艦長に『おまえ馬鹿か、馬鹿だろうっ！　もしくはアホかっ！！』と叱責（八つ当たり）するなか、ルリとデルフィは話していた……デルフィの本体であるユニットは、ビックバイパーにあるが、ハッキングであらゆる端末からハヤテに意見が出来る

オモイカネには、既に話を通してあり、航行に支障をきたさなければ、構わないそうで、ナデシコはどたばたとしながら、順調に航行していた

―――――――――――――――――――――――――

ナデシコは、ある場所を目指していた……少し前に『チューリップ』と呼ばれる巨大な岩のような構造物で、チューリップは目的地地表に到達、ないし目的地につくと前半分が花の花弁のように開き、そこから無人兵器郡がワラワラと沸いて来るのだ
前にチューリップの調査護衛の為に実体ブレード……別名『とっつき（パイルバンカーとも）』を装備して行ったのだが、四発しかない『仁王』と呼ばれるブレードを三撃当てなければ崩壊しないほど固かったのは驚いた

「まさか……テンカワ、悪いお知らせかもしんない。」

「なんでよ……あ。」

残念なお知らせ……先程の戦闘の際、ナデシコに配属された正式なパイロット四名の内の一名『（ダイゴウジ・ガイこと）ヤマダ・ジロウ』は足を負傷してまともな戦闘が出来ないそうだ……この艦にまともに戦闘できるのは二名『コジマ　ハヤテ』と『テンカワ　アキト』のみだ
しかも、ビックバイパーはテンカワ機を庇うような、無理な回避が祟り、主翼の左半分がグラビティブラストに持って行かれていた
幸い、自動修復が効く範囲だが、時間がかかりすぎる……ビックバイパーの修復を待っていたら、ナデシコに既に向いているチューリップから出る無人兵器郡でタコ殴りだろう

「つまり、俺一人でやれってかっ？！」

「幸い、ガイ機が使える……一応、ＩＦＳ（イメージ・フィードバック・システム）はあるけど、まだ使い慣れてないんだ……」

ゴメン、支援射撃しか出来ないわとうなだれるハヤテに、アキト

はさらに落ち込んだ……何故か先程の痴話喧嘩で発覚した『テンカワとミスマル艦長は幼なじみ説』で炎上（ネタ的意味合いで）していたナデシコを、冷たい空気が包む……何せ、ミスマル艦長がどんな作戦を立案したとしても、エステバリスはナデシコの主力機動兵器だ

つまり、どんな作戦でも『テンカワは戦う』のだ……ついでにハヤテも

――――――――――――

――――――

――

「作戦は簡単っ！　アキトとハヤテさんのエステバリスでチューリップから出るバッタ達を陽動、ナデシコがチューリップに至近距離からグラビティブラストで吹き飛ばしちゃいますっ！！」

「（うわぁ……テンカワにはご愁傷様だな。）」

「ちょ、ちょっと待ってくれっ！　なんで俺まで戦うんだよっ！！」

「それに関しては私から一つ。」

いきなり、眼鏡を輝かせながら現れたのは『プロスペクター』と名乗るホントに謎の人物……プロデュースから会計まで計算関係はなんでもな謎の人物である

「ハヤテさんは、今後も重要な場面で神経を擦り減らすポディションに立たれる方です。今ここで慣れない機体で撃墜なんて……元を取れないじゃないですか（ボソッ」

「何だよそれっ！　そもそも、俺はソイツ（ユリカを指差しながら）が間違って持って行った親父の形見を取り返しに来ただけだっ！！」

「（なんだそれ……あかん、目から汗が溢れて来た……）」

なんか、不憫を通り越して、完全な巻き込まれ型主人公の典型過ぎる

自分も経験（記憶だけ）しただけに、無駄に共感出来る

見兼ねたのか、ヤマd……ゲフンゲフン、ダイゴウジ・ガイが大声で言う

「テンカワっ！　お前、ゲキガンガーは知っているかっ！！」

「お、おう……だからなんだよっ！」

ガイのいきなりな発言にたじろぐアキト……うん、俺もたじろぐなと思いながら眺めていた

「エステバリスはな……ゲキガンフレアが出来るんだよっ！！」

「「な、なんだってーーっ！！」」

アキトは素で驚愕し、ハヤテはよく分からなくて驚愕した……『ゲキガンフレア』とはスーパーロボット系アニメーション『ゲキガンガー3』の主人公機『ゲキガンガー』の必殺技である

それを開幕パージよろしくぶっ放しとは、洋式美も糞もないなと思うハヤテであった

「よく考えてみろ……ゲキガンガー3は、ゲキガンフレアを放つ際、

ボディ全体をエネルギーでコーティングして突撃していた……つまりっ！　ディストーションフィールドと言うエネルギーでコーティングされているエステバリスにゲキガンフレアが使えない筈が無いっ！！」

「す……すっげえっ！！　アンタスゲェよっ！！　俺の名前は、アキト…テンカワ　アキトだ、ソウルブラザーっ！」

「フハハっ！　俺の名前はガイ…ダイゴウジ　ガイだっ！！」

まるで、そこだけ空間が違うみたいに暑っ苦しい……ちなみに、俺は勇者王の方が好みだと心の中で呟きつつ、肩をガクンと落し

「「バカばっか……？」」

ふと、隣で全く台詞を呟いた銀髪の少女と軽く握手し、ブリッジを出ていくハヤテ……その背中は、かつてないくらいに淋しげだった

――――――――――――――――――――――――――――――――

『作戦は簡単っ♪　前にも言ったかもしれないけど、アキトが前衛で、ハヤテさんがアキトをカバーして下さい。ナデシコはその間にグラビティブラストのチャージをします。チャージが完了次第、警告するので注意して下さい。』

『「了解っ！！」』

双眼のピンクのエステバリスと、単眼の青いエステバリスが空戦フレームに換装を済ませていた

空戦フレームとは、エステバリスが重力圏内での活動を前提に設計されたエステバリス専用のフレームである
さらにフレームとは、エステバリスのコクピットである『アサルトピット』を換装して素早く状況に対応できるように構想され、開発された機構だ……説明疲れた

「さて、無難にバッタを撃ち落として行きますかね。」

ハヤテが今乗るエステバリスに携行されている共通火器『ラピッドライフル』が火を噴く
ラピッドライフルから発射された弾丸は、ディストーションフィールド（以下、ＤＦと略す）の持つ『斥力』によりさらに加速されてバッタ達……木星トカゲと総称されている無人兵器郡を撃ち落として行く

【敵勢力推定残数３０％……ナデシコのグラビティブラストのチャージ率８５％……そろそろ、急いでください。】

「テンカワっ！　そろそろ締めにするぞ……クライマックスだっ！！」

『よぉし……行くぞ、げ、ゲキガン…フレアァーーーっ！！』

テンカワ機に通信を繋ぎ、アキトのケツに火を付ける……テンカワは典型的なヘタレた熱血キャラだ
武……『白銀（シロガネ）　武（タケル）』と呼ばれる少年に火を付け、世界を救わせた身勝手な自分を思い出し、軽く落ち込むハヤテ……自分が助かる為に、目先の楽に飛び込んだようで気分が悪いのだ

『グラビティブラストのチャージ完了が完了しました……テンカワ

さん、ハヤテさん、一度戦域から離れて下さい。』

『「了解っ！」』

何故か、艦長からでは無く、オペレーターの一人であるホシノ・ルリから通信が入る……デルフィの警告で分かっていたハヤテは、テンカワ機に離脱を合図して離脱をした……その瞬間、ナデシコがいきなりチューリップ内部に侵入し、主砲発射……物の見事に破壊し尽くした

『敵の破壊を確認……二人共、帰還して下さい。』

無茶苦茶やる戦艦だなとハヤテは思いながら、ハヤテは帰還して行った

第二羽　俺とお前で熱血だ、いや、俺は後ろで良いや（後書き）

このＳＳのテンカワさんは、テンションが比較的に高いです。

そして、主人公は涙目になります。

ただし、ヒロイン（デルフィ）によしよしと慰められます。

第三羽　もう、どうにでもなるがいい（前書き）

皆さんは、『バナナ型神話』という言葉はご存知ですか？
私も、最近知りました……詳しい話を置いて説明すると

「バナナ型神話」とは、だいたい以下のような説話である。
神が人間に対して石とバナナを示し、どちらかを一つを選ぶように命ずる。
人間は食べられない石よりも、食べることのできるバナナを選ぶ。
変質しない石は不老不死の象徴であり、ここで石を選んでいれば人間は不死（または長命）になることができたが、バナナを選んでしまったために、バナナが子ができると親が枯れて（死んで）しまうように、またはバナナのように腐りやすく脆い体になって、人間は死ぬように（または短命に）なったのである。

だそうです。おもいっきり詳しいですね、サーセン。

第三羽　もう、どうにでもなるがいい

ある種、宣伝に似た『実験』を行ったナデシコ……今までの実戦経験者が少ない事も加味し、その存在は連合軍の脅威であり、希望でもあった

脅威とは『その力が自分達に向けられたら』と言う、疑心暗鬼めいた考え、希望とは『この力があれば木星トカゲも恐くない』と言う普通の希望

そんな鮮度が良い肉を腹を空かせた猛獣に与えるような行為をネリガル重工はしたのだ……まあ、今ナデシコを盧獲せんでも、ネルガルは高い金を軍にせびってナデシコ級戦艦をいくつか出す算段だと思うが

そんな事を考えながら、パイロット組（アキト、ガイ、ハヤテの三名）は、宛がわれたの私室で反省会をしていた

アキトはご苦労様、ガイは早くに怪我治ってよかったな、ハヤテはこれからも頑張れで終わってしまった

どうしようかと話し合っていたら、艦内放送が入った

『これより、大気圏からの離脱を開始します。乗員は、衝撃等に注意して下さい。』

「大気圏の離脱って、この船は何処に行こうとしてるんだ？」

「それに関しては、私から説明しましょう。」

いつの間にか入って来たプロスペクターことプロスさんにひっくり返るハヤテ達……普通のリアクションである

「おっほん……それでは、ネルガル重工開発の本艦『ナデシコ』の目的について説明しましょう。」

「あ、俺は一応聞いたわ。」

「貴方に関しては、扱いが危険ですからな……特例です。説明しますよっ！」

プロスさんの長い説明を要約すると、ナデシコはネルガル重工が社運を賭けた一大計画『スキャパレリプロジェクト』の一環で建造された戦艦である

そもそも、スキャパレリプロジェクトとは、かつて木星トカゲが火星を襲撃し、その際に取り残された人々を救出と言う『お題目』があるらしい

裏では、火星にあるネルガル重工の研究所の無事なデータをサルベージ、地球まで持ち帰るのが目的だそうだ（ここは俺しか聞いていない為、二人は知らない）

「このように、複雑な事情がございまして、プロジェクトに関しては公に出来なかったのです。世間に露見すれば、クリムゾンのよう

に、ライバル企業に妨害されるのがオチですからな。」

「まあ、俺から見たら、ドングリの背くらべみたいなもんだけどな（ボソッ）」

話は変わり、テンカワ・アキトの処遇についてだが、食堂のコック兼パイロットらしい

それにしても、流石守銭奴ネルガル……アキトに支払われる給与は、ガイよりも少ないみたいだ

プロスさんは、イレギュラーですので、申し訳ないとの事……うわぁ、顔が引き攣ってますよプロスさん

こうして、影がやたら多い目的の為、やたらと灰汁の強いメンツが動き出した

【まあ、戦い以外に個性の薄い貴方には辛いでしょうけど。】

「うるさいやいっ！！」

しかし、このマイペースなＡＩに翻弄されるパイロットとは如何なものだろうか？

――――――――――――――――――――――――――――――

ナデシコに搭載されている相転移エンジンは、『インフレーション理論』で説明される『真空の相転移を利用』し、真空の空間をエネルギー準位の高い状態から、低い状態へ相転移させる事でエネルギーを取り出す

明らかなオーバーテクノロジーで、歴史的発明だが、ハヤテの父曰く『酷い欠陥品で失敗作』らしい……そもそも、真空状態での運用が前提の為、大気圏内では著しく出力が低下するらしい

それのせいで、父は開発を『放棄』し、新たにビックバイパーに搭載されている『アンチプロトンリアクター』通称、『反陽子生成炉』を作り上げた

特殊な合金鉱石である『メタトロン』製のリアクターによって反陽子を生成、これを陽子と衝突させることで対消滅を起こし、それによって発生したエネルギーを動力や電気エネルギーに変換するという半永久機関……らしい

使用環境を選ばず、正に本人も納得のものなんだとか

まあ、何が言いたいかというと……

「宇宙で無いと、ナデシコって残念な戦艦なんだよな……」

もはや見慣れて来た（注：ハヤテは、宇宙での活動を何度かしています……詳しくは前作で）のか、つまらなそうに見るハヤテ……その姿は、赤い制服ではなく、なぜか整備員の着る作業用のツナギだった

何の感慨も無いのか、つまらなそうな瞳は、地球を見ていた……地球は彼にとって良い思い出が無い……なぜなら、裏切られるは振られるは、疑心暗鬼になるような状況（7割ほど幼馴染のせい、残

りは自業自得）になるは、散々な目に合ってばかりだ、いっその事

「死ねたら……今ある記憶の断片すら消え果るほど死ねたら良いのに。」

「思ったより、欝キャラなんですね……ハヤテさんって。」

「……は？」

ゆっくりと宇宙へと航路をとるナデシコにとって、『ここに居たらマズイ』人がいる……なんでいるんだい、ホシノ　ルリちゃん？

「君が居なくて、ナデシコは大丈夫なのかい？」

「ええ、かつて連合軍を単機で半壊させ、確とした差を思い知らせた人がいますから、手を出すに出せないみたいですよ？　後、ナデシコの火星に着くまでの間、オモイカネが大体の事をやってくれますから。」

「う〝っ……人が荒れている時期の話を振るとは……」

まだ傭兵を始めた頃、連合軍に喧嘩を売られ、若気の至り（約二年前の木星トカゲの侵攻の時に）で『半壊（部隊では無く軍全体を）』させてしまった悲しい事件である

連合軍は、たった一人の『若造』に潰されたのだ……え？　根に

持ってるんじゃないかって？　持ってるに決まっているでしょうよ

「まあ、居てくれた方が『今』は助かるかな？」

「え？」

突如鳴り出すアラーム、艦内に非常警報が鳴り響く

『この戦艦、ナデシコは私がジャックしたわっ！　抵抗する者に容赦しないわよっ！！』

「やっぱりやるか……連合軍の犬が居る時点で変だと思ったんだよね。」

【ハッキングに関するジャミング、及び対抗プログラムの存在はありません。】

「まさか、わかっていたんですか？　えっと、ムネタ……誰でしたっけ？」

登場のとの字もないもんね……

ハヤテは、やれやれと拳銃のセーフティーを解除し、敵の襲撃に備える

幸い、ナデシコを官制しているＡＩ『オモイカネ』は掌握されていないようで、デルフィ経由でハヤテとルリのダミーの位置データ

を流している

「奴はムネタケ・サダアキ……連合軍の奴だが、我が強く、出世欲がある若手の中でも悪どいと有名だ、まだ痛め付けられないらしいな。」

「ようは、噛ませ犬ですね。」

「ハハハ、熾烈だね。ルリちゃんは……まあ事実だろうけど。」

ニヤリと凶暴な笑みを浮かべるハヤテは、冥府に連れ去られた姫を亡者から守るケルベロスのようであった……いや、比喩ですが

とりあえず、行動の方針が出来た……

第一は、『ムネタケ・サダアキが呼び寄せたデルフェニィウム部隊が到着する前にナデシコのシステムの奪還』である

その為には、ナデシコのシステムを復旧出来るホシノ　ルリの護衛と人質状態であるナデシコクルーの救出を最優先とし、尚且つナデシコ内に潜伏している連合軍の兵を『教育』しなければならないハードスケジュールである

「（もうさ、ジャンル違うよね？　ダンボールが欲しくなってきた。

）」

「（何故、ダンボールなんですか？）」

廊下の影で小声で会話する二人……兵士達の巡回ルートはデルフィが大体調べ上げてくれた……ちなみに、今のハヤテの状況を考えると、彼の苗字を貰ったお方が監督を務める蛇の名を持つスパイが活躍する某潜入ゲームのようである

「しゃあない、面倒だが一人絞めて制服パチるか。」

「制服なんて、一体何に使うんです？」

【大方、敵を騙すには味方から、相手の兵に変装し、相手の隙を付くんでしょう。】

流石デルフィ……もう、コイツはジェ〇ンニか何かかと思ってしまう

デルフィ情報（デルフィが入手した情報の略）で、皆は食堂で監視されているらしい

中々美味しいぞ……遮蔽物も多いし、何よりブリッジからは監視カメラでしか確認できないからな

「こんな茶番、さっさと終わらせて火星に行こうか。」

「そうですね、連合軍もこんな回りくどい真似をしないで居れば良

いのに。」

【それが、人間の『原罪』たる行為が戦争なんでしょうね……ハヤテ、貴方はある意味その原罪を色濃く受け継いだ存在なのかもしれませんね。まあ、貴方は、食料となるバナナではなく、武器となる石を選ぶような気質が原因なんでしょうが。】

いきなりシリアスになるなよ、スイマセン、性(さが)なんですよね、バカばっか……

ハイジャックされても、ナデシコは元気です

第三羽　もう、どうにでもなるがいい（後書き）

デルフィの指摘通り、ハヤテに関してはバナナより石を取って肉を焼く子です。

てか、主人公とルリルリの絡みが思ったより自然で困る。

どうしてこうなった？

第四羽　その翼、白き刃なり（前書き）

若干シリアス、かと思ったらそんな事なかったでござるの巻

第四羽　その翼、白き刃なり

スニーキングミッションは見事に成功……皆、ホシノ　ルリを見つけ、捕らえた者程度の認識しか持たず、あっさりと意識を刈り取らせてくれる

「案外なんとかなるもんだな……てか、こんなとこまでくるから、特殊部隊か何かかと思ったんだけどな。」

「彼ら、どうやら凄腕の暗殺部隊みたいですね。」

「マジかよ……やる気あんのか、連合軍さんよ？」

ルリちゃんが、ハッキングで敵さんの情報を掘り返す……敵を知り、己を知れば百戦危うからず

気分は子供連れの狼だが、いかんせん相手が弱すぎる気がする……あれか？　一度解体ショーをしたから、人体の構造に詳しくでもなったのだろうか？

「さて……ようやく、食堂前に到着したんだが。」

「……突入しますか？」

【いえ、今回に限り突入は愚策でしょう……出来れば、相手に発砲を許したくはないですからね。】

全く持ってその通り……敵の数は約三人、アサルトライフルで武装し、必要ならいくらでも命を奪う連中だろう

お前もだろうって？　止してくれ、俺は命は『平等に奪う』んだからさ

【わかりました、私が一人ずつ誘導しましょう。】

「頼めるか？」

【それこそ愚問ですよ、ハヤテ？】

ああ、任せたとハヤテが一言言うと、デルフィは敵の無線回線に割り込みを開始
問題無く、一人出て来た

「かも～ん。」

「しまっ、ぐふっ……」

鳩尾に一撃、防弾防刃ジャケットを貫通する程の蹴りが男に突き刺さる
流石、メタトロン製の義足だ……何とも無いぜ

「さて、後二人の訳だが……はれ？」

【どうやら、皆さんアグレッシブみたいですね。】

「馬鹿ばっか……フフッ」

食堂を覗くと、中に居るはずの連合軍の兵が二人、頭を殴られたのか倒れている……流石に、中華鍋は辛いようだ

そして、殴ったのはテンカワと料理長の『ホウメイ』さんのようだ……ナデシコパネェ

【やはりハヤテにも、あれくらいのアグレッシブさも欲しいですね。】

「それは、天然ハーレム男に甲斐性を求めるくらい無理じゃないですか？」

ナデシコパネェってなってんのに、二人して俺を弄るのやめれ、ムリムリハヤテは弄られるくらいで良いんです、そうですよ……なぜか皆を助けた筈なのに、落ち込むハヤテであった

【明日がある】

「やめてくれ……オモイカネ、同情は時に最強のトドメだ。」

漫才をしていた数分……どうやら、ナデシコは再び皆の手に戻ったようだ

―――――――――――――――――――――――――――――――

『全艦内に通達……本艦はこれより、我々の目的を妨害をする連合軍を迎撃します。』

『ラピッドライフルの弾丸を全て特殊スタン弾に変更完了っ！　こいつなら敵さんを無駄に殺さずに済むぞっ！！』

パイロット各員はそれぞれの機体で待機していた……今回ばかりは、トサカに来たのか二人共マジモードみたいだ

【オモイカネより通達、敵機はデルフェニウム３５機、ファントマ１５機の混合部隊のようです。】

「ファントマか……面倒な奴が来たな。ナデシコにファントマの携行しているであろう火器のデータを送ってくれ、ディストーションフィールドがあっても油断は出来ない。」

【了解しました。】

戦闘中は真面目なんですね、デルフィさんとか考えつつ、ハヤテはウェポン選択を最初はマルチミサイルを選択する

ビックバイパーの回りに、光の塊が八つ纏わり付き、その光は示された敵を追って飛んでいく

ホーミングレーザー以上の火力にホーミングレーザー以下の誘導性……それがホーミングミサイルの特性……なのに、それは何かによって軽減される

「シールド持ちか……」

【サブウェポン『ガントレット』の使用を提案。】

「……ガントレット？」

【ガントレットとは、メタトロンにスピンとエネルギーを与え、空間を圧縮固定する『ベクタートラップ』を応用し、着弾方向の延長線上にベクトルを発生させる弾丸を生成するサブウェポンです。】

「……つまり？」

【相手は、バリアがあってもそのまま押し切れます。】

バリアを生成し、身を防御している機体は、そのバリアごと弾き出されると、意外と脆いもんだとデルフィ談

【ガントレットは、白兵戦形態でしか使用出来ません。】

「了解、敵の眼前で変形しよう。」

しる人は知る、ビックバイパーの白兵戦形態……本邦初公開である
ビックバイパーは、レーザーやリップルレーザーで目くらましをし、近付いてく

【ビックバイパー……トランス・レディ】

「ビックバイパーの第二の姿……拝めるのを幸運に思うんだなっ！！」

高速機動で移動していたビックバイパーの左右双頭の機首が９０度回り、足のようになる
船体は起き上がり、ショルダーパーツが起き上がる
左右に突き出たウィングは後ろにしまわれ、頼りなさそうな両手が姿を表す
そして、頭に当たる部分が現れ、ビックバイパーは白兵戦形態に変形を終えた

【ガントレット…レディ】

「部の悪い賭けは……嫌いじゃ無いっ！！」

変形を終えたビックバイパーは、右腕を振りかぶり、そのまま突き出す……ガントレットは射出され、バリアは貫通してファントマは中破する

『すげぇっ？！　白い戦闘機が変形してロボットになりやがったっ！！』

『中々に王道じゃ無いか……親が作ったロボットに乗り、悪と戦う青年とか絵になるねぇ。』

【よかったですね、皆さんの評価が高いですよ。】

二機目のファントマの頭を吹き飛ばした後に、不意に通信でガイとウリバタケの感想が聞こえる……ウリバタケさんはともかく、ガイは働けと呟きつつ、ガントレットでバリア持ちの機体をビリヤードの球のように弾いて行く

「このバリア……クリムゾングループの奴かっ！！」

『ナデシコより各機に入電、ファントマやデルフェニウムを覆うバリアは、地球を覆うビックバリアと構成が似ているようです。』

ナデシコのルリ嬢よりの通信……どうやら、敵さんはバリアを一括官制しているらしい

【ハヤテ、敵機の中にバリア官制システムへのパスコードを持った機体がいる筈です。　急いで探してください。】

「了解……ファントマはラス１っ！」

半壊させたファントマからデルフィが手早くパスコードを抜き取る、一応母艦であろう戦艦に向けて、押してやる

【バリア官制システムのパスコードを入手しました。　ナデシコに転送を完了、直に敵のバリアとビックバリアは無力化するでしょう。】

「バリアの中に敵がいて、尚且つソイツが敵を吐き出しているのに、バリアの意味とか無いと思うんだよね。」

それは言いっこなしです、さいですか……その後、ビックバイパー組はたいした破損も無く、任務を遂行した

ナデシコも航行に支障は無く、パイロットと物資補充の為、コロニー・サツキミドリに向かうことになった

この頃、軍では何故『アレ』に喧嘩を売ったと責任をなすり付けあっていた

ナデシコの艦長『ミスマル　ユリカ』の父であるミスマル提督は、一人こめかみを抑えていた

結局、味方以外は『平等に殺す』主義の傭兵には誰がなんだろうと変わらないだろうと思いながら

第四羽　その翼、白き刃なり（後書き）

だから　ルリルリと　デルフィと　ハヤテの絡みが自然すぎんだよっ！

あれか、デルフィとハヤテはともかく、ルリルリは一万年と二千年前から云々かんたらなのかっ？！

＊秋永作品でよくある現象その１＊

『作者も想像していない絡みやら因果』

そういえば、ＺＯＥの機体その二は『ファントマ』先輩でしたね。ファントマとは、実際にＺＯＥの連合軍が使っているファントマ？の前機であり、造形的にも中々悪くない機体ですが、ＺＯＥの花形である『ＯＦ（オービタルフレーム）』と比べたら、可哀相な子です。

わかりにくい人は、マブラヴの激震先生とゲッタードラゴンを比べてみよう。

後、どうでもいいけどオリジナルのオービタルフレームとか考察しています。

今作中に出るかは知りませんが……

あ、オリジナルオービタルフレームは募集してません……頭が沸騰しちゃうのさ

今回から、このＺＯＥのこの機体だけは出してというのを募集しています。

選択肢は下から選択してください。

Ａ：ラプたんこと、『ラプター』

Ｂ：物量はパワー、『ザカート』

C：はいだらー『アージェイト』
D：苛電粒子砲『ネビュラ』
E：第三の萌え『テスタメント』

個人的には、ラプターとアヌビスが好みです……無印の首を傾げるラプたんの可愛さは異常……ＡＤＡほどじゃ無いけど、それでもぐっと来る物があります。

テスタメントを知らない奴は、にわかエンダー……とか意地悪は置いといて
テスタメントとはＧＢＡでの作品である
『ＺＯＥ２１７３‐ＴＥＳＴＡＭＥＮＴ』と呼ばれるアヌビスの一年くらい前を画く作品です。
私もプレイ動画でしか見た事無いですが、幼少期にパッケージを見た事ある気がして、当時の自分にデンプシーをしたいです。
マジどっかで売ってないかな……ＡＩと三次の彼女がモデルとかリア充過ぎる……さらに、そのＡＩがモデルに宣戦布告とか萌えるし燃える。
まあ、その分鬱要素もデカイですがね……（ーωー；）ｙ－・‐

第五羽　空白は気にせずいこう（前書き）

評価より感想がほしい作者……秋永です。
ＡＣＥ：Ｒでナデシコが参戦メンバーから落ちたのが意外と辛いです……黒百合は体当たり機……異論は認めるが撤回はしない。

それでは、異端録……はじまります。
電子の妖精は、終末を飛ぶ鷹をどう見るのか……

第五羽　空白は気にせずいこう

ナデシコハイジャック事件（ハヤテ個人的には、『ＭＳＧ事件』と呼びたい）から数刻……パイロット組の三名は食堂で結果報告やら被害報告のまとめをしていた
本来は、各個人の内の誰かの部屋でやりたいのだが、生憎アキトがコックも兼業の為、お昼もかねての場所とりだ

「んじゃ、二人でさびしく状況報告しますか。」

「おうよ、テンカワもいねぇししょうがないだろ。」

元々パイロットじゃないしな、それもそうかと完結する二人……
ガイは、ハヤテと二三話し合う中、ある事に気が付く

「ハヤテ、お前が今回の撃墜王なのに、自分のカウント数間違えてんじゃねえか？」

「いや、正直な話あんまし覚えてないんだよね……お恥ずかしい。」

急に凍るガイ、その表情はとても可哀相な者を見る目だった

「なんつうか、自分でカウントしていたファントマ２体しか覚えてないんだよね。」

「そうか……いや、覚えていないからあんな事が出来たとう考え方もありか。」

ガイは、鎮痛な、葬儀に参列する者ような表情でハヤテを見る…

…それは侮蔑のような表情ではなく、仲間を思う、純粋な同情な表情だった

――――――――――――――――――――――――

『死屍累々（ししるいるい）』……この戦場に特に意味は無いが、四字熟語で例えるならこれがピッタリとなるだろう
辺りには、デルフィニウムの無残は亡骸と脱出ポッドが漂っていた
……まだ、不完全ながらＡＩ制御により操られるデルフィニウムの大群に圧倒されているエステバリス達に支援射撃（レーザー類）を飛ばしながら、バリアで守られているファントマ達をサブウェポン『ガントレット』の物理衝撃で吹き飛ばしていた

【敵機、ファントマのバリアの解析が終了しました。　敵機のバリア、どうやら地球を覆うバリアと同様の構成のようです。　ファントマは破壊、もしくは中破し、パスコードを取得してください。】

「了解、破壊してパスコード取得だな？……破壊？」

『破壊』……その単語を聞いただけで胸の奥底でうごめくものを感じる
それはどす黒く、総てを壊してしまいかねない意志を感じる

《そうだ、破壊だ……全てを破壊してしまえっ！！》

「ぐ、くぅっ？！」

【ランナーに対し、神経パルスの反転を確認……ハヤテ、しっかりして下さい。】

突如、『左足』のほうから朱い光の筋が幾つか走る……それは、左目に入り込むと、ハヤテは苦しそうに呻き、縮こまる

【ランナーの精神が不安定……α波が増大……ハヤテ……っ？！】

それは、明らかに遠くを見る目だった……ここにはいない何かに憎悪し、ここにはいない誰かに涙を流していた

「ＢＥＴＡを確認……作戦行動を続行する……」

平淡な、冷たく、人間性をかなぐり捨てた声色が聞こえる……『ハヤテ』は突如、機体制御をＡＩから奪取、過剰防衛とも取れる戦闘が始まった

『や、やめてくれ……ぐ、ぐあぁぁぁぁあああ？！』

『く、くるなっ！　あ、あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っ』

『糞っ！　気をつけろ……白い機体、動きが変わったっ！！』

ガントレットで敵を集め、バリア干渉を起こさせ、バリア発生部が過負荷に耐えられずに破壊し、無力化……

そこにコクピットを外して『オプション』も使用してのレーザー弾幕で破壊

そこには一切の慈悲は無く、迷いも無かった

脳波はいやに安定しており、先ほどのようなα波の異常検知のシグナルはない……かわりにあるのは死んだような『静寂』……完全でこそ無いが、無我であった

【敵機ファントマ残り一機……中破させ、パスコードを入手して下さい。】

「……ちっ、まだこんなに」

明らかに意識はこの場に居ない……辺りのミサイルや敵機を敵と認識しているから問題無いが、徐々に体力を消耗しているようで、息が荒い

目は血走り、独り言が多い……なのに戦闘には一切の支障は無い、濁り無く、純粋に敵を落とすのみの動きをしているように端からは見える

「ぐ、ぐがあぁぁぁぁああ〝あ〝あ〝」

【ランナーの脳波の崩れを確認……ハヤテ、ハヤテ、応答願います。

】

「このバリア……クリムゾングループの奴かっ！！」

【……ランナーの脳波安定、意識レベルは正常値に復帰……】

『ナデシコより各機に入電、ファントマやデルフェニウムを覆うバリアは、地球を覆うビックバリアと構成が似ているようです。』

――――――――――――――――――――――――

「これは酷い……」

「自分で言うなっての……お、そうだっ！！」

ガイは、アキトの仕込みが終わったら俺の部屋に来いって言っておいてくれと言うと、ダッシュで自分の部屋に駆けていく

「……元気だなぁ。」

【ハヤテ、一つよろしいですか？】

デルフィは、戦闘中にあった脳波の乱れを記録、映像化した物……ようするにハヤテが見ていた『夢』を映像を再生して見せる

【この映像で、貴方が戦っている敵をまとめたら、貴方が搭乗して

いた機体『不知火』はどこの企業も作っていません……さらに言うと既存のどの機動兵器にも当て嵌まりません。】

「ああ、夢だからな。」

【ですが、人型機動兵器としてのスペック、あなたの脳の微妙な反応、どれを見ても本物のようです、なにより。】

デルフィは、映像データを引っ込めるとなんらかの『生命体のデータ』を出す……

【あなたの夢に出て来た生体兵器『ＢＥＴＡ』は、火星で見つかった謎の化石に骨格が酷似しています。……さあ、洗いざらい吐いてください、相棒……でしょう？】

「む……ぐにぃ……」

ここじゃまずいから自室に戻ろう、ではテンカワさんにメールを送っておきますとデルフィ言う……こうして、デルフィとハヤテの暴露会は始まった

―――――――――――――――――――――――――

ハヤテの自室……アキトには、既にガイの伝言は伝えてある
俺は、体調が優れないから行けないとアキトに頼むとお大事にと言われた……なんか気まずいな

【私が貴方の表層意識……脳波を測定していると、たいてい貴方は、

普段のとは他に微弱ながら全く違う脳波が検出されます……それは、貴方が暴走状態に陥った時には通常の脳波と入れ代わるように増大しています。】

「ああ……なんつうか、順を追って説明させてくれ……俺にとっても信じがたいんだ。」

ハヤテは、デルフィに打ち明けることにした……自分には前世のような記憶があり、それは確かに自分の見聞きした体験であり、糧である

しかし、それは最近ある人物により踏みにじられ、利用された事を

【自分の平行存在（パラレルレゾン）……確かに、貴方がろくな訓練を受けていないのに、常人にはありえない反応速度や、それに追随できる反射行動は納得できます。しかし、何故パラレルレゾンは貴方を必要としたのでしょうか？】

「『ナニカ』の楔を解き放つ為と言っていた……なんだったけかな……ナ、ナイ……ナイア……ああ、思い出せないっ？！」

さらに、デルフィに打ち明けることにより、ハヤテは自分の記憶に虫喰いがある事に気が付く……思い出さねば、大変な事になりそうな気がするのだが、何故か思い出せない

【追い打ちになるようで悪いのですが、貴方は今深刻な事になっています……ハヤテ、貴方の左足は元々何だったか知っていますか？】

「メタトロン合金……で出来ているとしか知らないんだけど。」

やはり、何も知らされていないのかとデルフィは呟く？と、ハヤテにあることを話す……彼女のプログラムの根底には、ハヤテの母にプログラムされた『ハヤテを護る』と言うルールが生きついている

【貴方の左足のメタトロンは元々、オービタルフレーム『ＡＮＵＢＩＳ（ビス）』と呼ばれる、かつて世界を、太陽系に終末をもたらそうとした男の機体の残骸で出来ています……貴方の精神が安定しないのは、その男の遺志がメタトロンに焼き付けられ、貴方に影響を及ぼしているのでしょう……『全てを破壊しろ』と】

「……っ？！」

ハヤテは突如、頭を抱えてのたうちまわる……彼の頭にはＩＦＳ（イメージフィードバックシステム）の補助脳がある……三年間、男の、『リドリー・ハーディマン』の狂気に犯され、どす黒く染められているだろう

【去りなさいノウマン……彼は貴方以上の破錠者……貴方に押し切れないわ。】

「クフフ、ＡＩ風情が……まあ、私は別に小僧をどうするつもりはないさ……ただ、抑圧された『憎悪』を刺激するだけで良い、小僧はどういう訳か人間が持ち得ないほどの憎悪を持っているからな。」

ハヤテにとって、仕事は苦痛と悲しみの時間……戦場では人間の命が引き金を少し引けばたやすく散る……そんな時間を彼は気の遠くなるほど生きていた
最後には、１０億人もの人間を殺すテロリストに身を落とす『世界』すらあった程に、『転生』は苦痛でしかないのだ

「私の仕事は終わった……後はコイツが勝手に堕ちていく……破壊と終末を呼ぶ獣へとな。」

【彼は……ハヤテはそこまで弱くはないわ……ノウマン、誰の差し金かは知らないけど、彼は自分の為にしか戦わない連中とは訳が違うわ。】

「ククク……痛く、醜くなるほど、この小僧を買っているようだな。まあ、全ては小僧次第だな。」

そこまで言ったノウマン……リドリー・ハーディマンは、静かに目を閉じ、ハヤテに体を返す……その寝顔は、先程の狂気と暴力しかない表情とは違い、穏やかで、歳相応の寝顔だった

【ごめんなさい……今は、静かに眠っていてください。貴方はいずれ、真実を手にするから。】

そういうと、デルフィは、部屋の電灯を消し、ロックを……

【しばらくしたら、ルリ嬢が来る筈……お母様の命故、容赦はしませんよ……フフフ。】

ロックをかけないでそのままにした……このＡＩ、実に外道である

――――――――――――――――――――――――

ダイゴウジ・ガイとテンカワ　アキトが、『ゲキガンガー３』なる熱血ロボアニメで涙を流している中、仕事をほぼ終えた『ホシノ　ルリ』はハヤテの部屋の前に来ていた……地球を覆うバリアは、ナデシコが近づくとハッキングをするまでも無く、一人出に開いた
抜けると同時にメールが来ており、懇切丁寧な謝罪文に、連合軍の高官……老人達が土下座をしている写真が添付されていた

「ほんと、分かっていたならやらなきゃ良いのに……バカばっか。」

【ルリさん、ハヤテは寝ましたよ。】

デルフィからのゴーサインを貰うと、意を決して中に入るルリ……照明がついていない部屋の中には、普段の作り笑いも、仏頂面もない素のハヤテの寝顔が居た……ナデシコに乗ってから、何故か気になる青年
ぶっ飛んだ経歴持つナデシコクルーの中でさらに異彩を放つ経歴の彼
何処までも純粋の瞳をしていて、まるで見るだけ全てを見透かしているようであった

【それでは、ルリさん……お願いします。貴女の……ＩＦＳが強化されたマシンチャイルドの力でハヤテの補助脳のバグを診てください。】

「治せるかは分かりません……でも。」

彼の内面が見れるのらと、ＩＦＳの刻印がされた左手に触れると、ルリの意識はブラックアウトした

――――――――――――

――――――

――

ふかふかのベット……綺麗な朝日にも関わらず、絶望しか沸き上がらなかった

「また、『また』戻って来たのか……武の馬鹿がクールだったら……いや、無理か。」

その肉体は、引き締まった筋肉をしており、軍隊で本格的な訓練を積み、実戦を何度もしたような感じだ

ルリは、第三者視点で彼が予定調和のようにテキパキと身仕度を整える姿を眺めていた

「行くかな……今度は何年持つやら。」

頭をかき、色々詰まった鞄を持って、彼は部屋の扉から出ていく……二階から階段をおり、行ってきますも言わずに玄関の扉を蹴り開ける

「これは……ロボット？」

１５ｍ程の起動兵器が、ハヤテが出て来た家の向かいに居た……もう、動く事は無いのか、その姿からは力を感じない……ロボットが倒れたせいで崩れただろう家の隣からは、ハヤテと同じくらいの男子が出て来る……彼は上から落ちて来た瓦礫に咄嗟に反応をして避けるが、動きには素人のような荒がある

「成る程、この世界にも救いは無いのか……んじゃ、行くかな。」

ハヤテは、出て来た男子……多分『武（たける）』なる人物に近づくと、キャーキャー騒いでんじゃねえとゲンコツを振り下ろし、黙らせる……かなり痛そうだ

ハヤテは踵を返すと、かったるいと言わんばかりの態度で歩き出す

「「なあ（あの）、何処に行くんだよ（行くんですか？）」」

「決まってるだろ？　地獄の一丁目さ……」

唐突に、ルリの意識は飛んだ……気が付くと、紫の髪に放漫な胸を持つ女性が、呆気を取られた表情でこちらを見ていた

「はじめましてと、久しぶりのどちらが良いかな……夕呼姉（ゆうこねえ）。」

「アンタ……いや、そんな……」

女性……『夕呼』なる人物は、親しげに話している……呆気を取られ、ポカーンとしている間に一方的話し出すハヤテ……

この世界は計算通り十年持たずに……１０回しか検証していないが、平均７年くらいで滅ぼされる

世界を救うには、『英雄の覚醒』が必要だが、まだしていない……だから

「覚醒の為に、俺が今度こそ『死ぬ』為に力を貸してくれ……頼む。」

「……」

そこには、何故彼が英雄と呼ばれないのか不思議なくらいな光景があった

最強の事故犠牲をし、鍛え上げられた血肉は鋼のようなのに……世界は何故彼を拒むのか

こんな、虚しいやり取りがしばらく続くと、ルリは自然と起きて

いた

――

――――

――――――――

気が付くと、元のハヤテの部屋に戻っていた……先程と違うのは、左足から『赤い光の筋』が伸びているのだ

まるで、ハヤテを蝕む呪いのように脈動し、不気味な光を放っていた

「これは……」

【ハヤテを蝕む呪いです……治すには、火星にある『アルモノ』と接触するしかありません……今ただ、彼の傍に居てあげてください。】

「分かりました……ふぁ……おやすみなさい。」

デルフィはこの時戦慄した……いくらそのように誘導をしたとはいえ、まさか『添い寝』を自然とするとは

デルフィはただ、ハヤテがルリをそっと抱き寄せ、温かく包む様を観察していた……ハヤテは、意外？な事に抱き枕派である

故に、抱き枕が無いナデシコ内で添い寝をした対象を『枕を抱くように抱く』のは自然な事なのだっ！！（意味不

【まあ、やはり少し妬ましいですね……】

しかし、その様子をデルフィはあんまりよく思わないのあった……ハヤテは自分の物だけとか勝手な式が出来ているからだ……後日、補充のパイロットがやって来た時、一緒に来たハヤテとルリに一騒動あったのは、言うまでもないだろう

第五羽　空白は気にせずいこう（後書き）

今回から、ちくちく前作からのマブラヴ要素が絡みます……ハヤテが何を見聞きしたのか、もしかしたらよくわかるかもしれませんね。

さて、明日は大部会だから寝るかね……では皆さん、よい夢を。

第六羽　航海日誌と彼の記憶

ナデシコのブリッジ……ホシノ　ルリは一人、端末に向かっていた
彼女は、『航海日誌』を書いており、本来は艦長のミスマル　ユリカが書かねばいけないのだが、訳あって彼女が書いている……ユリカ氏の沽券に関わるため、今回も伏せておこう

―――――――――――――――――――――――――――――

・□月〇日

本日も、木星蜥蜴の襲撃あり……しかし、艦を覆うディストーションフィールドにより、被害無し

本日は、新しくやって来たパイロットの三人……『スバル　リョーコ』さんと『アマノ　ヒカル』さん、『マキ　イズミ』さんの三名と『テンカワ　アキト』さんに『ヤマダ　ジロウ』さんに『コジマ　ハヤテ』さん（本人は、苗字は捨てる予定らしいです。）の三名が親睦会も兼ねて模擬戦をしましたが、結果はハヤテさんの一人勝ち

テンカワさんとヤマダさんが前衛でハヤテさんが二人をカバー。
対して、新任の女性パイロットお三方は見事な連携でテンカワさんとヤマダさんをなんとか倒すと
ボロボロの三人をハヤテさんが様変わりした動きで三人を圧倒、最強の名を欲しいままにしてきただけの実力はあるようです。

ハヤテさんの噂はスバルさん達も知っているようで、そういった

関係者達からは、『最強の個』やら『ドミナント』と呼ばれているようです。
後でハヤテさんに聞いたら、ドミナントの意味を教えてくれました。
ドミナントとは、『卓越した』の意であり、『先天的に戦闘適正の高い者』を指すんだそうです。
三年前から始まったハヤテさんの傭兵としての活動により、後ろ暗い企業のいくつかは潰され、戦争主義な『レイレナード・グループ』や、その傘下の『アクアビット』は実質的に倒産
クリムゾン・グループは、連合軍の一部高官との癒着があったらしいが、連合軍の半壊事件の際に大きな煽りを受け、ハヤテさんにいくつか研究施設を破壊されたようです。
ネルガルさんも、表層だけでも清く正しくやるべきみたいですよ？

・□月△日
本日も、木星蜥蜴の小規模な襲撃あり……艦に被害なし

今日は、エステバリスに何故スラッグガンが実装されなかったかの話になった。
銃撃より面攻撃がどうだとか、費用対効果が薄いとか、ヒーローは銃をあまり撃たないとか、不毛な会議をしていた。
議題を出したハヤテさんは、うなされながら寝ていた。
そして、私は彼の手を握ったら夢に引きずり込まれました

――――――――――
――――――
――

『た、タケルちゃんの……ヴァカァァアアア！！！』

『ががあぁぁぁあああ……りいぃぃ……ん』

毎朝、二分の一の確率で起こる珍妙なイベント『人体大気圏突破』をさも関係ないように頭の中からスルーさせる少年……いや、顔付きは既に働きすぎのオッサンだが

彼の名は『香月疾風（こうつきはやて）』……彼が通う高校の物理の教師、『香月夕呼（こうつきゆうこ）』の関係者で、彼女の姉と疾風の父が結婚し、その愛の結晶が、疾風だ

問題としては、その両親はとある実験で亡くなっており、自身の部屋にさりげなくその実験のデータがあるから質悪い

疾風は既に、実験で発生した欠点を理解し、完成した答えをしかるべき場所にぶん投げた……激しくどうでもいいが、疾風は普通と少し違う、ちょっと変わった能力がある

それは、問題に対し、瞬時に答えが出ると言った、一見なんでも無いような能力だが、この能力で疾風は、両親の遺産の問題点を全て解決し、先程もいったがぶん投げた

昨日は昨日で、叔母にあたる夕呼に頼まれた物を作っていて、寝るのが遅くなってしまった……論文やら設計図が散乱する作業机は、目も当てられないほど汚く、よっこらしょういち（死語）と起き上がるためにベットにてをついた筈だった

ふにゅ

「はぁん……」

「っ？！」

ふに、むにゅ

「ん、あぁん……」

「っ？！？！？！」

朝起きたら　となりに　見覚えの無い女が　バスローブ姿で寝ていた……

驚いた拍子に女の胸から手が離れたのは、初な疾風にとってはラッキーだったろう……下手したら、セクハラで訴えられるからね

疾風の思考は、とんでもない方向に展開していた……

朝起きたら、隣に見慣れたくない女が寝ていた……なんで、御剣財閥の令嬢が寝ていて、俺は胸を揉んだかわからない……フラグ立てなんざ、財閥の令嬢に出来るはずねぇ……超スピードや、催眠術だとか、そんなちゃちなもんじゃねぇ……もっと、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ

この間、約一秒足らず……彼の答えを出す能力はまともな思考が出来ずに役立たずだった

「ん、はぁぁ～……おはよう疾風。」

「お、おはよう……？（え、えぇぇぇえ……）」

そういえば、何故同居人の女性二人……『香月夕呼』と『神宮寺まりも』がブロック……いや、明らかに夕呼姉（疾風の夕呼に対する愛称）がまりも姉（以下略）を洗脳し、楽しんだろうな……きっと、『きのうは　おたのしみ　でしたね』とかいうに違いない

「……あかん、頭冷やしてくる。」

「うむ、私は学校に行く為の身仕度を整えてくるぞ。」

「あいあい、はぁ……こんなイベントはフツーはタケルが受け持つ奴だろうが……俺は一山いくらかのモブだといくら言えばわかってくれるんだ……ブツブツ」

こうして、疾風の奇妙な物語は始まった……断じて、石で出来た仮面があったり、吸血鬼が出たり、Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｍｅな物なんかは出ないが……

――

――――

――――――

「ハヤテさん、不潔です。」

「何故にだい、ルリ嬢っ？！」

それからしばらく、ルリはハヤテに口を聞かなかったとさ

ついでに、ウリバタケ率いる整備班内でハヤテを『ラッキースケベ型』なのか、単なる『巻き込まれ型』に組み込むべきかで大論争になったそうだ

―――――――――――――――――――――――――――――

◇月☆日

ナデシコは、いよいよ火星圏に近づいた……木星蜥蜴達の襲撃も悪化して来て、ハヤテさん達の消耗が激しいようで、テンカワさに至っては、コックの仕事も兼任している為、疲労も余計に貯まるようです。

ただ、火星に近づくほど、ハヤテさんが『ここからいなくなる』ような気がして怖いです。

皆さん、その事に気がついているのかハヤテさんによく話しかけています。

夢をよく覗きますが、内容がドンドン暗く、生命の生き死にの強い夢を見ています

私個人としても、こんな世界があるとは知りませんでした……あ

る日突然やって来た宇宙人により、人類が滅びかけている世界

人間が生み出した欲により、逃げ道の無い、絶望しかない砂漠と青空しか無い世界

どれもこれも、ホラだと断じようと思えば、出来る世界……なのに、それらは全て明確な世界で、彼が殺したり、目の前で殺されていた人々は、確かにそこで皆生きていました

ハヤテさんだけが何故、これほど悲しみを背負っているのかわかりません……今更ハヤテさんが生まれ変わっても戦わなければいけないような世界を渡り歩いていようが、１０億人もの人を殺していようが、それらは全て貴方ではあるけれど、同時に貴方では無い事に気がついてください

ビックバイパーの消耗が異常に激しい……それは整備班以上にハヤテに痛感していた

この数ヶ月……何故か王族の紅をされた気がするけど、そんな事さえ気に止まらない位わかっている事が一つだけあった……それは

【ビックバイパー……いや、既存の機動兵器ではハヤテのフルスペックについていけない】

のだ、全力機動を３０秒しただけでビックバイパーの機体は軋み、悲鳴を上げる……フレームは歪み、ビックバイパーは今や白かった装甲は黒くなり、真っ直ぐだった足は逆間接のようになっていた

「後一回……いや、ビックバイパーは次の戦闘中に空中分解の可能性があるな。」

「お前さんが自重すれば……いや、今のは失言だった、すまんな。」

整備班の長たるウリバタケは、ハヤテに簡単かつ安易な解決方法を提示しようと思ったが、気がついてやめる

その解決案を実行に移せば間違いなくナデシコは『落ちる』……何故なら、木星蜥蜴に新種が現れたのだ

地球では蟷螂（かまきり）と呼ばれているが、デルフィはその正体を知っていた……名前はラプター

かつて、今の人類より前の文明が作り上げた機動兵器『オービタルフレーム』の一種で、その力は現在の連合軍の主力であるファントマで換算したら、ファントマが５０機束になっても敵わない程

ビックバイパーは本来、ラプターが稼働していた文明に作られたもので、その圧倒的なキルレシオを誇るオービタルフレームに対抗して作られた機体なのだ

しかし、ラプターは束になってやってくる……機体は既に限界に肩足突っ込んでいるのだ

「ウリバタケさん、悪いけど……俺の骨を拾ってくださいね。」

「何を演技悪いことをいってｙ」

『ナデシコ艦内に通達、ラプターの大群が接近。　パイロットは至急各機で待機して下さい。』

そう、それは運命なのだ……そして、ルリ達は未だに運命の奴隷……ハヤテは運命にひそかに反逆せし戦士である

『ビックバイパー、ビックバイパー応答してくださいっ！！　ビックバイパーっ！！』

【ランナーのバイタル危険域に突入……】

『ハヤテさん、ハヤテさんっ！！』

運命の女神とは、最も尊いように言われているが、実際は残虐で、傲慢で、己の欲に忠実な生き物なのだ

「おんどれ……気安く死亡フラグなんざ立てるべきじゃねぇな……だがっ！！」

『ハヤテさんっ！！』

「しなばもろとも……ってなっ！！」

ビックバイパーは、オプション（ビックバイパーの後を追う砲台）を駆使し、ラプターを撃墜していく……エステバリス隊も頑張っているが、機体性能の差でじわじわと押し返されている

このままでは全滅……ならいっその事……とハヤテはデルフィを有無を言わせずにナデシコに強制転送

機体に搭載されたバニッシュメントモード（リアクターを暴走させる事による自爆する機能、本来は機密保持の為に付けられている）を起動し、ラプターを巻き込んで火星に突入……

火星大気圏にて大爆発、ハヤテの機体シグナルは、完全にロストした……カケラ一つも残さずに

『ハヤテさん、応答してください……ハヤテさんっ！！』

【対象のボゾ……ジャ……プを確認　計画を第二段階に移行します。】

そう、全ては予定調和なのかもしれない……ハヤテに『狂気』が宿ったのも、ハヤテの両親が『生きている』事さえも……

――――――――――――――――――――――――

機動戦艦ナデシコ　異端録

――――――――――――――――――――――――

それは、歪んだ物語だった……狂気は力を、力は狂気を呼ぶ世界

……狂気に呑まれた彼は、その時に自分に向き合う

「ぐ……なぁ……」

【当機体外部に生存者を確認……確保します。】

本来なら、出会わない筈だった者達は出会っていく……狂気を乗り越えた先には、なにがあるのだろうか？

第六羽　航海日誌と彼の記憶（後書き）

次回から、だいぶ飛びます……いろんな意味で

第七羽　田舎者でいこう（前書き）

これを二日で書き終わるとか……馬鹿なの？死ぬの？

今回から用語が無駄に増えたから用語を後書きに書くよっ！！

＼（＇Ａ｀）ノ

第七羽　田舎者でいこう

青い光のラインが照らすコックピットの中……ふとした弾み、まるで爆撃でもされたような痛みで起きるハヤテ

「む、ぐぅ……」

【おはようございます。私の名前は、独立戦闘支援ユニットＤＥＬＰＨＩです。】

「え？　あ、ああ……おはよう？　ハヤテだけど。」

ブルーのディスプレイのメーターがせわしなく動きを見せながら、どこか抑揚が無いが聞き慣れた声が聞こえた

なんとかなく拭い切れない違和感を抱きつつ、話を進める

【ランナーの生命維持の為、ランナーの左足の義足を介して電気ショックをしましたが、成功したようでなによりです。】

「そうだな、お前はそんな奴だよな……」

淡泊というか、いくら俺の生命保護の為とはいえ、普通電気ショックをするかねこいつはと思いつつ、あることを思い出す……それは

「あれ……俺死んだんじゃ……」

【ランナーの心拍、脳波共に停止していましたが、駄目元で緊急措置を施しましたら、現在のようになりましたが。ですが……】

「……ですが？」

嫌な予感がする、両手で耳を塞いで聞くなと騒ぎ立てる自分がいるだが、好奇心は猫をも殺すという諺があるくらいに人間は好奇心という欲求に従順な為、興味の対象に意識が集まってしまう

【ランナーの心臓は、現在自発的活動を停止してしまっている為、この機体……『アヌビス』から降りたら、心臓を動かす為の電気信号が遅れなくなる為、ランナーの生命が危ぶまれます。】

「……／（＾ｑ＾）／」

とりあえず、思考をぶん投げる事にしたハヤテ……右も左もおろか、自身の生き死にもわからないとか初体験である

強化人間やリンクスなった反動で、言語中枢に異常をきたした事はあるが、命があやふやなのは本当に初体験である……大事なので二回言いました

「ま、待てっ！！　思いっきりアウトラインからリバースしてんじ

ゃねえかっ！」

【ですが、ランナーの思考レベルと脳波は正常、心拍に関しては私の補助がありますが簡単な措置で蘇生できたのでたいしたこと無いですよ。】

「……／（＾ｐ＾）／」

しらねえ、いくらデルフィさんでも此処まで奇天烈で愉快な反応はしなかったぞ思うハヤテ……ハヤテの中でのデルフィ像は、仕事は出来て、性格が歪んでるが、人間の命までぞんざいに扱うほど機械地味てなかった筈だ

しかし、ハヤテは受難が似合うと筆者に言わしめた男だ……漫才だけで受難が終わる筈が無いっ！！

【アンノウンを検知……真っすぐこちらに向かっています。】

「（まさか、木星蜥蜴の追撃かっ？！）……よし、どんな状況かわからないから、その説明から頼む。」

頭を戦う者の物に切り替える……自分は生きていて、自分を狙うものがいる……なら、戦うか逃げるかして『生き残らねばならない』のだ

認めたくないが、『平行存在』の自分と融合し、混ざり合った後の方が何と無く強い気がする

生き残らねば、自分は評価されないと言う脅迫概念で戦っていた頃より、仲間の為に、戦友(とも)の為に戦い、互いに庇い合う今の方が格段に強いと思う……なんとなく、今はそう思うのだ

【それでは、まずはこの機体について説明します。】

「頼む。」

デルフィさんいわく、今俺の殺生与脱を握っている機体の名は『ＡＮＵＢＩＳ(アヌビス)』と呼ばれているそうだ

星に大きなクレーターを穿つ程の火力にベクタートラップを応用した防御システム……しかし、システムに穴抜けがあるらしく、本来の半分しかスペックを発揮出来ないらしい

そして、今俺達がいる場所は火星の衛星であるフォボスのアーマーンなる施設の跡地らしい

アンノウンの目的は、アーマーンに残留しているエネルギーかもしれないとデルフィさん談

「俺が言うのも難だが、まるで火事場泥棒みたいだな。」

【はい、ランナーに良心があるようでほっとしました。】

「なあ、さっきからランナーランナーってむず痒いから普段みたい

にハヤテでいいよ。」

【普段も何も、貴方と私は初対面ですが、ランナーの希望なら吝かではないですが。】

は？　冷静沈着冷酷無比……上げればキリのないくらい上がるハヤテの戦闘モードの冷静っぷりとは言え、デルフィにデルフィと自分が初対面と言われて冷静で居られる程人間出来てはいなかった

一瞬の虚を突くように、見慣れた兵器郡がワラワラと雪崩込んでくる……ハヤテは、半ば反射と化した行動で牽制のレーザーを撃とうと思考を切り替えると、アヌビスから放たれた青い光弾が、最近バッタに付くようになったバリアをいともたやすく貫通して破壊したことに驚く

ビックバイパーのレーザーでさえ、貫通することが出来ないバリアをたやすく砕く……よくわからないが、普段のバッタよりなんか『完成』されたイメージがあるのは気のせいだろうか？

【敵は群生のようです……ホーミングレーザー『ハウンドスピア』の使用を提案。】

「分かったっ！！」

アーマーン跡地に入り込んだバッタ達にマルチロックをする……そして、アヌビスの右手に青い光が収束し、一気に解放する

放たれた光は、バッタ達を縫う止めるようにレーザーが屈折しながら破壊を振り撒く……あからさまに物理法則に喧嘩売っている現象に、ハヤテは何も考えない事にした

【アンノウンの全滅を確認、一度外に出ましょう……幸い、アンノウンが開けた穴から今のアヌビスなら出られるでしょう。】

「あいあい、もうツッコミとかしないぞ……うん、しないぞ。」

死んだはずの自分、デルフィとの認識の齟齬、そして『明らかなまでに違う空気』に不安を覚えつつ、現状をより詳しく知る為に飛び立った

宇宙空間に出たら、バッタとカトンボの大群と、ラプターとか見たことの無い機動兵器達が戦っていた

バッタとカトンボ達は、数によるローラー作戦を展開するが、もはら誰得な火力でローラー作戦を真っ向から叩き潰すラプター達

中でも、白い機体が飛び抜けていた……いち早く敵群に飛び込み、ブレードらしきもので切り裂いたり、ホーミングするように歪曲するレーザーで吹き飛ばす……さらに時折、消えるように見える

「とりあえず、お係わり合いになりたくないでござるよ。」

【ランナーの言語中枢に一時的な異常を検知……蘇生をする加減を間違えたのでしょうか？】

「いや、大丈夫だから……ネタにマジレスすんなし。」

あまりの壮絶な光景に、閉口できないでいるハヤテがいる……主に自分の中での『とっつき（パイルバンカー）最強説』が危ぶまれているのに嘆かざるえない

あれだ、大火力のインフレが起こって世界滅んだなこれとか、もはや他人事である

【前方より、黒い機体が接近……アヌビスと同系統の機体なようです。】

『こちら、バフラム軍第１３独立遊撃部隊のディンゴ・イーグリット……ああ、当機体に警告する。　大人しくしていてくれ、その機体は友人が造った遺産なんだ。　むやみに壊したくねぇ。』

【相手は、アヌビスのレプリカのようですが、相手が悪過ぎます。素直に従った方が懸命かと。】

「わかった……こちら、アヌビスのランナーのハヤテだ。貴官の指示に従う。」

アヌビスを相手さんに機体に近づけようと動かすと、エステバリス？が間に割って入る

エステバリスより四肢が一回り太く、マッシブなイメージを受ける……背中に重力波送受信アンテナを見ない辺り、バッタ同様に『完成』されたイメージを身に受ける

『誰だ、お前？』

『異邦人よ……死ね。』

「ちっ？！　開幕ぶっぱとは良い度胸だっ！！」

【敵機と設定、敵は強力な広範囲を攻撃出来る光学兵器を携行しているようです。ハウンドスピアで牽制し、スラッシュで隙を突くのが妥当な策でしょう。】

寝起きに本格的な戦闘なんてさせんじゃねえよ、ちくせうと心で叫びつつ、頭を切り替えると敵……エステバリス？に向き合う

ベクタートラップから収納していた杖状白兵武装『ウヌスロッド』を構え、二機のアヌビスが敵を見定める

『ついて来れるか、坊主？』

「上等だっ！！」

かつて、太陽系を狂気から救った英雄と、平行世界を理不尽から救う為に戦った男が同じような機体で共闘する

二人を分かつのは、機体の色だけであった……ディンゴのアヌビスは、赤い光のラインに黒い装甲

対して、ハヤテのアヌビスは青い光のラインにダークブルーの装甲であった

――――――――――――――――――――――――

今回の任務は、俺の今は亡き友人……ロイドが造ったアヌビスと対等となるアヌビスの『完全』なコピーの回収である

最近、現れるようになった『ホイシュレッケ』共は無人兵器や無防備な有人兵器に取り付き、操る能力があるようで、こちらの物量の大半を占めるラプターなどの無人ＯＦ（オーブタルフレーム）に取り付かれててんやわんやしているのが現状た

それに加え、今回回収する機体は、ロイドが作り上げた出力、制御系が全くの同等のフルコピーらしい

今俺が乗っている『ノウマン』の造った劣化コピーとは訳が違うようで、ノウマンが乗っていたオリジナルのアヌビスには無かった『独立戦闘支援ユニット』が搭載されていて、取り憑かれたら目も当てられない大惨事になるだろう

『ディンゴ、そろそろ目標地点よ。』

「りょ～かい。」

『幸い、敵のホイシュレッケも見当たらないは……待って、内部で敵の機体がワープした反応が出たわ。』

「わかった、俺が回収に行くから、万年新婚さんにはそう伝えといてくれ。」

『はいはい、わかりましたよディンゴ隊長？』

「やめんかケン、恥ずかしい。」

そういえば、自分も新婚だったなと思い出す……相手は、通信の相手である『ケン・マリネリス』……いや、今はケン・イーグリットかと苦笑いする

アーマーン跡地に近づくと、青い屈折しながら進むレーザーが外壁を壊して現れる……そして、『奴』が居た……遅かったかと思ったが、中に弱いが生命反応がある

そして、性根が腐っていて、頭のネジが吹き飛んだ奴が乗っていたら、機体から凶々しい雰囲気が漂ってくる筈……それなのに、機体からは清々しいまでの『力』しか感じない

多分、あそこまでオービタルフレームと向き合える人間は、この世に二人といないだろう

「どうやら、誰かがアヌビスに乗っているようだ。」

『気をつけて、相手は何者かわからないわ。』

「りょ～かい。」

気が抜けた返答をするディンゴだが、表情は固い……相手は間違いなくトップクラスのランナー……戦えば間違いなくこちらもただでは済まないだろう

一戦を辞さない覚悟だった……そう『だった』のだ

「こちら、バフラム軍第１３独立遊撃部隊のディンゴ・イーグリット……ああ、当機体に警告する。　大人しくしていてくれ、その機体は友人が造った遺産なんだ。　むやみに壊したくねぇ。」

『わかった……こちら、アヌビスのランナーのハヤテだ。貴官の指示に従う。』

「ものわかりの良い奴で助かったな……ちっ？！」

自分の機体と相手の機体をリンクさせ、相手と通信しやすいようにしようとしたら、目の前に見た事も無い機体が現れた……オービタルフレームよりは小さいが、マッシブなフォルム故に見劣りなんて感じない

そいつは、いきなり『何か』でハヤテの奴を攻撃する……合ってまだ数分だが、挨拶して自分を信用してくれた相手を見捨てる真似なんて、ディンゴには端から無かった

「誰だ、お前？」

『異邦人よ……死ね。』

『ちっ？！　開幕ぶっぱとは良い度胸だっ！！』

それを何かを知っているのか、回避して見せるアヌビス……反応速度に申し分はなし

オービタルフレームの異常なスペックに振り回されない辺り、一戦を引ける奴か、余程戦い慣れした奴かの二択だろう……共闘するのが得策だと考えたディンゴは、ハヤテに提案する

「ついて来れるか、坊主？」

『上等だっ！！』

こうして、アヌビス・レプリカ×2とエステバリス？の戦いが始まった……方や界渡りの渡り鳥、方や太陽系を救った英雄……出会う要素が薄い二人は、戦場で肩を並べて戦うことになった

――――――――――――――――――――――――――――――――

二機と一機の実力は互角……それは偏に機体スペックが関係しているだろう

二機のアヌビスが連携攻撃をしても、エステバリス？が突如消えてしまう為にリズムが分断されてしまうのだ

仮定の話だが、もしアヌビスが二機共本来の……オリジナルと同等のスペックを扱えたら、逆にエステバリス？は5分と持たずに墜ちていただろう

「はえぇ……無駄にはえぇ……」

『そんな粗末な機体に、このエクサバイトに追いつけ訳無いだろう。』

「ぬかせ……へぇ、成る程ね。」

まだ乗って数分だが、これほど充実した機体は他に類を見ないと思うハヤテ……それように作られた訳でも無いのに、自分の自発的活動を止めたニート心臓を動かしたり、自分の人外じみた反応速度に難無くついて来てくれる機体に戦慄と感動を禁じえない

エクサバイトに何回かアタックを仕掛ける内に、何かに気がつくハヤテ……ハンドサインで自分がアタックを仕掛ける旨を伝えると、勢いよく突っ込んでいく

『無駄だと何故わからない。』

「後ろだ、ディンゴさんっ！」

『そこかぁっ！！』

『な、がぁあ？！？！』

消えたエクサバイトの行方を予測していたようにディンゴに伝えるハヤテ

ディンゴのアヌビスが持つ杖でエクサバイトを突き刺し、機能を停止させた

『何故、俺のジャンプアウトした地点を正確に……ぐぅ。』

「戦闘がパターン化しない奴なんていない。　お前のワープは消えたら、俺らの内の後ろにいる奴の背後にワープしたがるみたいだな。」

背後とは、相手の死角である……確かに、ワープ出来るなら選択肢の内の一つに入るだろうが、そこばかりに行くとかえって隙を見せる要因になる

隙を狙うはずが、逆に付け入る隙になり、欺くはずの敵に欺かれる

よくある話だ、渡り鳥として……レイヴンとして生きる事を経験してからは得にであるが

『コイツを連れていこう……何か話が聞けるかもな。』

「手伝います。」

『く、無念……負けたんだ、素直に捕まる。』

とりあえず、中破したエクサバイトを盧確する事にした二人……エクサバイトをドナドナすることにした二機のアヌビスと言うシュールな光景が生まれた

第七羽　田舎者でいこう（後書き）

主人公が死んだ……あれ？
意識がハッキリしてるのに、心臓が動かないってまさか……まさか、
頭の中がミンｔ《検閲に削除されました》……ぐすん（；ω；、）

-用語-

◇オービタルフレーム
今作では、古代火星文明の時代に現役だった惑星間戦争決戦兵器
特殊な鉱石合金『メタトロン』を大量に集中使用する事により、
まるで魔法のようなトンデモスペックを発揮する
しかし代償はでかく、メタトロンの『感情を増幅する』特性故に、
まともな精神状態で扱えるものは少ない

◇ランナー
正式には『フレームランナー』
上記のオービタルフレームの乗り手の事を指す

◇古代火星文明
古代火星文明……ぶっちゃけた話がＺＯＥの時代＝旧文明という
扱いね

◇アヌビス
旧文明の時、太陽系が滅ぶ寸前までいった計画があり、アヌビス
はそれの中核を担う機体
馬鹿げた空間圧縮能力を持ち、『アーマーン』と呼ばれる施設を
制御する力を持っていた
現在は、レプリカが二機存在するだけだが、片方の様子がおかし

い……何かおかしい

◇ホイシュレッケ
『蝗』(いなご)って意味だった気がする
木星蜥蜴の無人兵器群＝ホイシュレッケという扱いです。

今回はこんな感じ、しばらくＺＯＥのターン、しばらくナデシコはお休み名訳が無い
ルリルリのその後とか書かないと筆者がしぬる
また、伏線を確認する作業が俺を待っている……Φ（＞〇＜＞〇＜；）

第八羽　変わる体と心（前書き）

漫画版ナデシコとか、ＺＯＥとかやりたい放題のです。

だが、これは二次創作……そう二次創作なのだ（言い切りかやがった

第八羽　変わる体と心

彼が自爆した……爆発は異質なまでに弱かったが、それは勘定に入れている場合じゃない

彼の自爆……ようするに、ナデシコ内で初めての犠牲者が出たのだ

「ナデシコはこれより火星に降下し、ハヤテ機の捜索とハヤテさんの捜索を開始します。」

「遺体の確認ではなく……か？」

ユリカの指示に、訂正を求めるフクベ提督……ユリカは首を横に振り、あくまでも『遺体捜索』ではなく、『捜索』である事を主張する

事前に聞いていたことだが、何故ハヤテが『イレギュラー』なんて物騒な通り名を持っているかと思い、本人に聞いたら渇いた笑いをしながら教えてくれた

彼は、企業を壊滅した、国を転覆したとか悪名高いだけではなく、生き残ることに長けているのだ

二十五万もの軍勢が相手の時、迷わずに逃げ、瞬間火力（一度の攻撃で叩き出せる火力を指す）を重視し、相手を度肝う抜かせたのはいい思い出らしい

「殺しても死ぬ人とは思えません……それに、特攻後の反応が明らかに不自然です。　どんなトリックがあるかわかりませんが、ナデシコとみんななら大丈夫、ブイ♪」

「ほほほ、そうじゃな……共に航海をした仲じゃ、彼を信じずに何が味方か。　私が間違っていましたよ、艦長。」

火星に下りる準備を始めるナデシコ……どこがで、不気味な影がうごめき出す

――――――――――――――――――――――――――――――――

ホシノルリは、落ち込んでいた……ただ、普段と変わらぬ効率で作業をしているが、始めの頃のように無表情・無感動の状態である

「火星地表に生体反応確認……なし、引き続き、探索を続行。」

【大丈夫大丈夫、死んでも死ななさそう、やれば出来るって、彼を信じようって、弱気になったらそこで負けである。】

おいまてオモイカネ、お前はどこの火の精霊だし……これは、G（ゲーム）M（マスター）的にストップを……え？　下手人はデルフィ……ちっ（何その反応

妄言は置いて置き、オモイカネはあるデータをルリに提示する……それは、ハヤテの機体が自爆した筈の地点の画像であった

それらは、『アンチプロトンリアクター』なんて規格外な動力を持つビックバイパーが自爆したとは思えない程に被害は少なく、ビックバイパーの破片の一つでもある筈なのに、ひとつも白い金属片は見つからなかった

本人が言えなかったの激しく悔やまれるだろうが、『こんなこともあろうかとっ！』とウリＰ（あえて、伏せ字で）が企画し、ナデシコ整備班が作り上げた小型自立探査装置（見た目はボール）が、オモイカネにより制御され、それらを介してナデシコにこれらの画像を齎したのだ

「オモイカネ……これは……」

【五分五分なら彼は生きている、それにデルフィは『第一段階』と言っていた……まだ、なにかある筈。】

オモイカネは、今度はデルフィの発言ログを出して言う……彼は、ハヤテは５０％も生存確率もあれば、ゴキブリの如くしぶとく生き残っている

彼の機体は無く、死体も見ていない……だから、彼の生存確率は５０％であり、それくらいあれば過去の三年間のデータでは、楽勝で生きている……たまに野性化仕掛かっていたらしいが、この不毛な大地である火星で野性化はあんまりないだろう

【信じよう、結構大丈夫。】

「そうよね、生きてるよね……うん、もう大丈夫。」

ナデシコの縁の下の力持ちであるオモイカネ……とんでもＡＩのデルフィさんに中々教育されているようだ

ナデシコは、こうして順調に火星に降りていた……ハヤテがフラグを立てていたにも関わらず……

『宇宙でないと……ナデシコって残念な戦艦なんだよな……』

さて、実はゴキブリなんじゃないかというか、ハヤテの意地汚さと言うか、生への執着心と言うか……いやひどい

彼は今、褐色肌の男性の前に居て、隣に友人に良く似た男性と一緒に気まずい雰囲気を醸し出しながら正座していた

「俺は、バフラム軍、第１３独立遊撃部隊の隊長を勤めているディンゴ・イーグリットだ。ディンゴと呼んでくれ。」

「オレは、大和宇宙軍、第二機動隊のスサノオだ。」

「自分は、世界傭兵統括機関『レイヴンズ・アーク』のランクイレギュラー、ハヤテっす……（気まずい……ギャグに慣れすぎてシリアスが辛いっ！）」

軍属二人に傭兵が一匹……気まずいなんてもんじゃない

傭兵なんて罪深い職業なんて早々やりたがる奴なんていないし、収入は不安定だからだ

それに、傭兵は戦争屋なんて比喩されほどに戦争を食い物をする連中というのが世の常だ……18歳程のガキが傭兵をやって生き残るなんて滅多に無い

元々才能に恵まれているか、頭のネジが既に吹き飛んだか、逆に納まったか……前者か後者は知らないが、戦い方は前者であると信じたい

「まず、始めにスサノオさんとやら……あんたの身柄は暫くはうちが預かる事になった。　事情聴取した後は、普通に過ごしてて構わないが、監視は付く。」

「当然か……殺されないだけマシと考えよう。」

スサノオと名乗る青年……見た目は、鋭くなったテンカワアキトその人だ
強そうでは無くて、思春期に尖んがる青年の極端な例のようなイメージである

「それでは、あんたの身柄も同じくうちの部隊で預からせてもらう……疑うわけじゃないが、二人の言う組織はこちらが把握出来て無

いからなぁ……」

「いや、同じく身柄が宙ぶらりんなんで……せいぜい、腕を売らせてもらいますよ。」

苦笑しながら、ハヤテは二の腕の力こぶを作り、手を乗せて任せろとアピールする

ディンゴは、正直感心していた……スサノオはともかく、ハヤテは数年前の自分のように、バイタルをこちらが切れば死んでしまうような、殺生与脱を握られた状況だ……なのに、彼は腐る事なくこちらを見据え『自分を使いこなせるなら、使って見せろ』言わんばかりの態度でいる

恐怖すら、彼の手の平に納めてある……なる程、確かに凄腕の戦士という評価は間違っていないようだ……だが

「ハヤテ……お前はバイタルの手術を終えた後は筋トレと訓練を徹底的にやってもらう。　バイタルのせいでお前の体はかなり変わるからな。」

「うぐぅ……了解。」

「情けない返答だな……オレを負かした男か？」

「ふ、そうだが？」

スサノオの挑発に華麗に挑発仕返すハヤテ……ダメだコイツ、やっぱり黒光りして、カサカサ早いG並に図太い……

――――――――――――――――――――――――

大変心苦しいが、あれから三日立った……ハヤテのニートと化した心臓の代わりに人工の臓器が入れられた……実は、全身の内蔵がメタクソになっていて、結局殆どの臓器を入れ替える羽目になったそのくせ、体の重さとかあんまり変わったように感じないから凄い……それから、最近知ったがこの世界は俺の知る世界じゃない……おかしい、まだ界渡りの予定は《メタ発言過ぎた為、作者が自主規制をかけました》

最近は、失った体を取り戻す為に筋トレの毎日だ
それらプラス、機動兵器を乗る為の訓練とかを受けている

この世界の機動兵器『オービタルフレーム』は民間人が始めて乗ったとしてもある程度は動かせる程簡略化された操縦のようだが、精神が強くないと『力に呑まれる』らしい

「どうした？　もうへばったのか？」

「上等っ！！」

精神鑑定で、狂気を内包しているらしく……どんな事を言っていたか聞いても全く答えてくれない

しかし、訓練次第では乗り越えられる狂気故にこうして精神鍛練兼ねた組み手をスサノオ……さんとやっているCQCなどに自信はあったが、全く歯がたたない……最近の目標は彼を膝を付かせる事がひそかな目標だ

【訓練お疲れ様です。　ディンゴ隊長が二人を呼んでいますので、お急ぎを。】

「そうか、ありがとうデルフィ。」

【いえ、ハヤテも精神鍛練も良いですが程々にして下さい。】

二三事言い合うと、デルフィは通信を切ってしまった……彼女？は今、姉というか、生まれでは妹に当たるＡＤＡ（エイダ）の元で調整を受けているらしい

過去の事件で封印されたも同然だった彼女は、ろくに外の世界を知らずに居たようで、知識はあっても経験が無いようだ……なんか、『俺達』に似てるな

「今日はこれくらいにしておこう……さて、早くイーグリットの所に行かないと大目玉だぞ？」

「ぐぬぬぬぅ……全身メタクソにしたくせに何を言いやがりますかこの人は……よし、復活っ！！」

全身打撲で痛い筈なのにシュタッと跳び起きるハヤテ……スサノオは奇妙な生物(なまもの)を見る目でハヤテを見るが、軽く柔軟をしたハヤテは、シャワールームに直行して汗を流していた

―――――――――――――――――――――――――――――――

明らかにかったるそうな表情こそしているが、眼光が彼の……ディンゴ・イーグリットとしての人としての威厳を保っていた

「スサノオは相変わらず現状維持、問題はお前だ、ハヤテ。」

「お、俺っすかっ？！」

「そうだ、お前は敵でも味方でも無い、所謂宙ぶらりんな状態だ、わかるな？」

言われんでも大体わかる……今までは客のような扱いだったが、そろそろ『見極め』をしたいのだろう

「そこで、今度お前が乗っていたアヌビスである奴と戦ってほしい。」

「ある奴？」

「そうだ、うちのエースのレオ・ステンバックだ。」

彼は、この時はまだ、『圧倒的違い』と言うのを知らなかった……

第八羽　変わる体と心（後書き）

早くも……いや、止めときましょう。
援ｇ……ゲフン、ディンゴさんは隊長で苦悩しながら頑張る図がずっと書きたかったとです。

主人公は火力インフレなこの世界で生き残れるのか、そして元の世界に帰れるのか……作者も不安だ

第九羽　生きあがく力

拝啓、アークで日夜ロボットの研究をしている合法ロリの母さん……お元気ですか？

私は、心臓がやる気無くしてご臨終したり、臓器がみんな生きるのをやめてしまいましたが元気です

今度帰ったら、お土産に写真とか持っていこうと思いますが、母さんには私の改造された体のメタトロン技術のが気になるでしょう

そう、いくら生きる価値の無い愚図とはいえ、生きている以上寿命まで最低限生きる権利と義務がある……だから

「死ぬ訳にはいかんのじゃあっ！！」

【機体のスペックが違いすぎます……現在持っているのが不思議な位です。】

試験という名の公開処刑で死ぬ訳にはいかんのだっ！！

――――――――――――――――――――――――

事の始まりは二日前……俺が世話になっているディンゴさん率いる、第十三独立遊撃部隊にバフラム軍上層部からご達しが来たらし

い……それは

［ネイキッドジェフティと担当ランナーに彼の見極めをさせろ］

ネイキッドジェフティとは何ぞやと聞いたら、異口同音に『最強かつ最凶』の機体だそうな……あれぇ？　俺死んだ？

「失礼しますっ！」

「おお、来たかレオ。」

「いっ？！」

ネイキッドジェフティ……聞くところによると乗り手……ランナーはかなり怖い奴で、ストイックな性格らしいが

「ディンゴさん、彼が……アヌビスを？」

「そうだ、新たなアヌビスのランナーだ。」

「……」

見た目は……うん、鉢巻きをした青年で、こちらに哀れむというか、嫌疑までは行かないが、疑いの目で見ている

「まあ、なんだ……自己紹介から始めたらどうだ？」

「あ、ああ……悪い、俺はジェフティのランナーの『レオ・ステンバック』だ、レオって呼んでくれ、よろしく。」

「俺はアヌビスのランナー……ハヤテです……よろしく。」

握手して、ディンゴの士官室にあるソファに腰掛ける二人……ハヤテからは冷や汗が流れる

現状最強のオービタルフレーム『ネイキッドジェフティ』……『白い賢神』なんて呼ばれるって事は、前の戦場で見た頭一つ飛び抜けた白い奴がそうだったのだろう

時折消えたりする奴にどうすれば勝てるのか検討つかないし、そもそも火力で焼き殺されそうだ……あれだ、レイヴンには、地下駐車場でガチタンと言えばわかってもらえるだろう

適当にはぐらかして良い戦いでしたなんｔ

「それから、レオにはハヤテの殺害許可が出ている……軍としては、敵さんの勢力であるスサノオならともかく、『アヌビス』のランナーであるハヤテを生かしておく理由が無いんだろう……ハヤテ、お前が生き残るには、ジェフティに一撃を入れて認めさせるしかない。」

「待ってくださいっ！　いくら、アヌビスのランナーとは言え、あんまりですっ！！」

「レオ……軍はそれだけアヌビスを警戒しているだ……ハヤテ、済まないがこれから話す内容には口を挟まないでくれるか？」

「……わかりました。」

ディンゴは、話し出した……ある計画を巡る壮大な物語を

ディンゴさんのいた部隊は、軍の命で『コロニーアンティリア』と言う施設に大量のメタトロンを運搬したらしい……だが、突如連合軍の新型（レヴ）ＬＥＶ隊に遭遇……交戦し、ディンゴさんの部隊は壊滅、生き残ったディンゴさんは、衛星の一つ『カリスト』に渡り、採掘工して生きていく事にしたらしい

だが、まだ物語は終わらなかった……今度は、ディンゴさんの元上司『ノウマン』の部隊が突如コロニー・アンティリアを襲撃、開発されたばかりの新型オービタルフレーム『アヌビス』を奪取し、コロニーを破壊し出したそうだ

レオは、その時偶然遭遇した開発中のアヌビスの姉妹機『ジェフティ』に乗り込み、辛くも脱出した……そして、話は進む

この時、カリストで採掘工として働いていたディンゴさんは、ある時以上なまでのメタトロン反応（メタトロン自体がエネルギーを帯びている場合がある）を感知し、反応があった場所で何故かジェフティを発見、カリストの仲間を助ける為に敵戦艦に乗り込み、そこで因縁の相手……ノウマンに再開

ノウマンの誘いを断ったディンゴさんは、ノウマンの手により心

臓と肺に計三発の弾丸を受けた……その後、ディンゴさんの今の妻、『ケン・マリネリス』により心臓と肺を人工の物に移植、加えてそれの原動力をジェフティから引用する事で、ディンゴさんと無理矢理、協力関係を取り付け、ディンゴさんは再び戦火に身を投じたらしい

アヌビスと度重なる交戦により、当時のジェフティでは敵わないと思ったディンゴさんは、友人……俺が乗っていたアヌビスの完全なるレプリカを作り上げた人物『ロイド』なる人物の手により、ジェフティは真の覚醒をし、紆余曲折してなんとか、太陽系の終焉は免れたんだとか

「か、勝てる気が微塵もしない……」

「いや、お前スサノオの意味不明な戦闘ロジックを解明したんだ。なんとかなるだろう……多分。」

俺は、この時ほど自分の巻き込まれ体質を呪った事は無かった……家族死ぬは、友人死ぬはで既に俺のハートは死んでるし……あ、死んでるんだった

『両者、指定ポイントまで移動してください。』

模擬戦……いや、公開処刑は始まった
処刑相手は火星全土を恐怖に陥れた悪魔『アヌビス』、対して執行者は火星を救った英雄『ジェフティ』……なんとも、なんとも出来過ぎたシナリオだ

『悪い、最低限手加減はする。』

「なんつうか、俺ごとき瞬殺してなんぼのジェフティとあんたでしょうし、この際スパーっとお願いしますよ。」

【ハヤテの言動にやる気を感じられません……死ぬつもりですか？】

「バッカ、下手に手加減されたら、見切り辛くなるからに決まってんだろ……言わせんな。」

思考はあくまで生き残るのを優先で……そう、シンプルで良い
生き残るには『勝つ』しかない、それが相手か己かは知らんが
生き残る為には、勝てば良い……『いつものように』ただ相手を打ち負かし、卑怯と罵られようと『勝てば官軍』なのだ

『模擬戦開始まで後１５秒……』

「（あんまり、興奮しないな……修業の成果って奴か？）」

【ハヤテ……今回のこちらとあちらの戦力差は絶望的です。】

何があったかは知らないが、デルフィさんがデレたように……不安げにしている……彼女？の中で何があったかは知らないが、微笑してハヤテは答える

「デルフィ……一つ言い忘れていたがな……」

『十秒前。』

カウントを聞いた途端、顔からは優しさを感じさせない、鉄仮面のような不動のものへと変わる……しかし、以前のような狂気は感じられない

「俺はな……」

【ハヤテは？】

『五秒前……四…三…二…一』

「最強の傭兵だよ。」

互いの機体が、身を屈め、すぐに動けるように構える……白い賢神と黒い死神は、ただ戦う為に、己を上位の存在である事を誇示する為に、己を更に上位の存在へと昇華する為に身構える

『戦闘開始（オープンコンバット）』

『「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」』

ジェフティとアヌビスは激突……しなかった、パワー・スピードでは話にならないのは接近した瞬間に痛いほどわかった……だから、ドッチロールの要領で激突を中断し、事前に溜めてあったハウンドスピアを当てて相手の体勢を崩して緊急回避した……ジェフティの空振りしたブレードはクレーターを作り、軽く大地を割っていた

明らかに規格から違う……こちらせいぜい大地をひび割れ入れられれば凄いくらいなのに、あちらはたやすくやってのけた

まともにやり合えば勝ち目はない……すぐに対策かパターンを考えなければと考えていたハヤテは、アヌビスをいきなりバク転の要領で宙に舞う

【これは……】

「あぶねぇ……嫌な予感がしたから回避してみたら案の定か。」

『今のを避けただとっ？！』

突然、先程までアヌビスが居た場所にジェフティが『現れて』虚しく腕が空を切ったが……奴は今、アヌビスを『掴もう』としたのか？　掴まれていたら何をされていたのかと恐怖しているハヤテ

多分、散々振り回された後に地表に叩き付けられていただろう……何故かそんな気がする

【第二波……来ます。】

「ホーミングレーザーか……厄介な。」

『あれも避けるのか……』

ハヤテ本人はなんとなしにケロッとしているが、官制室は戦慄していた……ここ数日、ハヤテのアヌビスを調べたが特記すべき点は見当たらず、背部のジェネレーターウィスプ（アヌビスの大出力を支える五つのウィスプ……早い話が防護壁や大火力兵装の使用時にそのエネルギーを補助する）を合わせても通常運用されているオービタルフレームと変わらないと言う事実に胸を撫で下ろしたばかりじゃないか……なのに何故、何故彼は『生きている』のか

「奴の……奴の生きようという願望が……」

「人の執念……いや、もはや別物か。」

官制室で見た皆、圧巻されていた……どんなにジェフティが差を付けようと、じわじわと差を詰めるアヌビス

特定のオービタルフレームのシステム全体を最適化する為のプログラムがないにも関わらず、まるでそれを感じさせない動きで対応

するアヌビスは、まるで生きるのに必死な、生きる為にあがく人間のように見えた

冥府に罪人の魂を運ぶ化身は、何かが変わっているのかも知れない……しかし、圧倒的火力、速力の前に既にアヌビスは五本あったジェネレーターウィスプは一本となり、満身創痍……

『悪いが、どとめだっ！！』

「デルフィっ！」

【緊急旋回プログラム起動】

瞬間移動で間合いを詰め、空間ごと切り裂いて来そうなブレードをダッシュとターンを併用して回避し、杖というか槍のような白兵武器『ウヌスロッド』を容赦無く叩き付ける

『ぐぉっ？！』

「い、一撃入った……」

『模擬線を終了します……ジェフティ、アヌビス共に帰還してください。』

勝利条件は不明瞭だが、勝つには勝ったらしい……ハヤテの意識はうっすらと消えていき、顔色は悪く青白い

目は徐々に閉じて行き、あっさりと意識を手放したようだ

【お疲れ様です。　戦闘行動、終了します……ハヤテ？】

ＡＩであっても、彼の異常には気がつかなかった……緩やかに、緩やかに彼は変わっていっている

良くも……悪くも……

第十羽　繭と夢と渡り鳥（前書き）

感想ないと、人気ないっぽいよね……あ、前作もそうだったな。
感想無いと死ねます。

第十羽　繭と夢と渡り鳥

小さな子供には、不釣り合いな大きなスコップを脇の地面に刺した少年と、明らかに眠そうな少年が二人、公園に居た

「穴をほるぞ、たけるっ！！」

「いきなりなんだよ……ふぁ、まだテックメンもはじってもねぇぞ、はやて。」

明らかに今から悪戯をする気満々の少年は、『たける』なる少年の話を華麗にスルーしていた

見た目は、小学校には上がれないが……『はやて』なる少年は中々に将来有望だろう、主にトラブルメーカー的意味合いで

「るせぇ……あさ、きゅーにすな場の『底』をみたくなったんだっ！」

「はいはい、いつものびょうきびょうき……」

たける少年が言っている、『いつもの病気』とは、はやて少年が普段暴走する周りの幼児を抑えている分、反動的におこる現象である

何故か、昔から面倒見が良いハヤテ少年は、つい周りをフォローしたりしてストレスを溜めてしまう

溜まりに溜まった彼の熱苦しいパトスは、主に『どうでも良い事を全力でする』事で解消される

今回のような体を動かす事……山をいきなり駆け出したり、川にダイブしたり等、健康的な事ならまだ良いのだが、たまに両親が残した本棚の本を漁っては、寝ずに読み耽るような明らかに健康に悪い事をするのだってざらじゃない

まあ、大体は理解できずに寝てしまうのが多いが……

「たく、まずはどうするんだよ？」

「バケツに水を貯めて、たけるのシャベルで作ったくぼみに水入れて、砂をだいたい固めたら、でっかいので一気にいくぜっ！！」

「だいたいわかった、やれやれ……」

意気揚々と水を組んで来たはやては、たけるがつくった小さなくぼみにバケツの水を半分入れ、おおきなスコップを濡れた砂地に突き立てる……よく見たら、スコップにはロープが結び付けられていた

「指したは良いがどうするんだよ？」

「こうするのだっ！！」

何処ぞのマッドサイエンティストのように高笑いしながら、はやて少年はロープを引っ張りシャベルを勢いよく倒す……すると、地面を大きくえぐった

「す、すげぇっ？！」

「へへん、『てこのげんり』ってんだってさ。」

彼等は、そのまま楽しげに砂場を掘り進んでいた……時には、二人で体重をかけたりして、とても楽しそうであった

ハヤテが気絶して数刻……昨日を停止したアヌビスは、突如白い繭に包まれていた

繭は辺りのメタトロン……例えオービタルフレームだろうと関係なく引き寄せて『喰べ始めた』

『いけない、追い詰めすぎたんだっ！』

「たく、『生存本能』も大概にしとけよな……ダメージがでかくなり過ぎたから、辺りのメタトロンを吸収って諸に『アイツ』じゃないか……」

官制室にはディンゴはある人物を思い出していた……その名は『ノウマン』……本名はリドリー・ハーディマン

かつて、火星域……いや、太陽系全土を破滅に追い込みかけた計画『アーマーン計画』を率い、世界を狂気に陥れた男である

そして、彼の遺志が詰まったメタトロンは、ハヤテの左足の義手に使われている……ハヤテの中には、錯乱する程の記憶が沢山あるだが、それらは普段はなりを潜めており、滅多な事では出てこない些細な病気程度であった

だが……

『繭が……ひび割れていく？』

『なんだ……あれはっ？！』

白い繭の中から現れたのは、純白の機体……夜叉を彷彿とさせる頭部
背中には大小様々な六角形のプレートが翼の様に浮遊している

その名は、『アーマーン・アヌビス』……ある者はこう言った、
『これこそが、メタトロンとの完全なる結合』だと

「最悪だな……俺もでる、現場の指揮は頼むぞ、ケンっ！！」

「わかったわ……気をつけてね。」

ディンゴは、戦場に向けて走りだした……たとえ、眼前に冥界の口が迫っていようと、彼は仲間の為に止まらないだろう

戦場では、白い閃光が二つ、激突していた……二体の白い夜叉は、地形を変え、もはや地図を書き換えなければならない程の破壊を振りまいていた

『いいねぇ……こんなに強い奴は久々だっ！！』

「（コイツ、楽しんでいる……なにものなんだ？）」

圧倒的スピードと、圧倒的火力……自分の数年の努力が霞んで見えるほどの力
狂気じみた機動と攻撃がジェフティとレオを襲い、じりじりと追い詰めていく

「アンタ、何もんだっ！！」

『夜鷹……首輪付きとか呼ばれてるっ！！』

アーマーンアヌビスの中に居た男は、予想していた爬虫類のような男では無く、髪がボサボサモサモサしており、耳のような癖っ毛もある

夜鷹……かつて、１０億人もの人類を虐殺した悪魔であり、自分が大嫌いな自己否定の塊のような男……もとい、ショタである

―――――――――――――――――――――

『えっぐ……ひっぐ……』

「いかん、オチが見えて来た……」

穴を掘り、底を確認したらなんて事なかった……せいぜい、子供一人がすっぽり入るか入らない程度の深さ……ちょっと前に駄菓子を買いに行って帰って来たら、紫の耳と尻尾がひょこんと出ている犯人であるハヤテ少年達は、気まずいなんてレベルじゃないだろう

「たける、なんか助k……いねぇ？！」

親友に置いて逃げられ、泣きたくなったハヤテ……やれやれとスコップに括り付けていたロープを解き、自身の体に巻き付ける

巻き付けたロープの両端を穴の下に垂らし、足を踏ん張る

「これに捕まれ……落ち着いて握るんだぞ、いいな？」

「「……（コクン）」」

どうやら脱出用の梯状の穴は、二人が穴の中に落ちた時に崩れてなくなってしまったようだ……なんというか、涙目で見上げてくる女の子を見るのって本当に罪悪感に苛まれる

「握ったな……ふんぬっ！！」

「「っ？！」」

ハヤテ少年の足が砂場に沈み出す……ハヤテ少年は構わず引き上げる

彼は、同年代の子より少しばかり力があるようだ……それが、彼をストッパーとして動くように向けてしまっているようだ

決して、誰に言われてとかではない……ただ、幼い心が忙しい両親に負担をかけまいするばかりになってしまったみたいだ

「ぐぬぬ……ふん、は……ハラッショーーーっ！！」

「「うわぁ〜〜っ？！」」

気合一声、どこかで聞いたような掛け声と共に美少女？二人を穴の中から引き上げる

少女達は宙を舞い、そのまま……

「みぎゃ〜〜っ？！」

「ぬ、だ、だいじょうぶか？」

「あらあら……だいじょうぶですか？」

美少女二人が、ハヤテ少年の上に落ちてくる……下敷きにされたハヤテ少年の髪の毛は、まるで『けものみみ』のように逆立ち、いまはしょぼーんとみみが垂れ下がっているように見える

「大丈夫、それより二人共、まずごめんなさい。」

身なりをきっちりとし直し、ゆっくりと頭を下げる……突然の事で、相手はついていけないようだが、次の一言で変わる

「あの穴を掘ったのは、俺なんだ……だから、ごめん。」

「ほほう、ぬしがか？」

いつの間にか正座をし、黒髪の寝癖なのかくせっ毛かは知らないが、みみがしょんぼりと垂れ下がる様子はまさに怒られている犬みたいだ

「あらあら、ならせきにんをとってもらわないと……」
「せ、せきにん……っすか？」
「いや、とはいわせないぞ？」
「もふぅ……」

話がどんどん、おかしぃな方向に行っていく……ハヤテ少年に至っては完全に犬科の生き物と化している

「わたしのなまえは、『めーや』というっ！！」
「わたしのなまえは、『ゆーひ』といいます、よろしくね？」
「へ？」

二人の黒い表情に、てっきりダブルビンタでもされるのかとビクビクしていたハヤテ少年はポカンとした表情で二人を見る

「ええい、じこしょうかいするのか『れーぎ』であろうがっ！！」
「わータンマタンマっ？！　俺のなまえはハヤテだよっ！！」
「めいや、刀をひとにつきつけてはいけませんよ？」

涙目のハヤテ少年に、ムキーっと怒っているめーやちゃん、それを宥めるゆーひちゃん……後から謝りに来たたける少年とでなかよく遊んだそうな

――――――――――――――――――――――――

戦場は壊滅的であった……無人機は既に全滅、有人機は多少残っている程度
バフラム軍は実質、壊滅的であった

ディンゴのアヌビス・レプカと、レオのネイキッドジェフティは、ボロボロであった

「やばいな……どんなにやっても、紙一重でかわしやがる。」

『ディンゴさん、アイツ……なんか、泣きながら笑ってるみたいなんですけど。』

「はぁ？！」

傍から見たらただの戦闘狂……だが、まるで子供が泣きわめいているようにも見えなくはない

ここには居ない何かを求めてないているような……そんな感じがするのである

だが、危険には変わり無い……だから、せめて羽交い締めにしようと動こうとした途端、青い光球がアーマーン・アヌビスを吹き飛ばし、片翼と片腕を吹き飛ばす

気がつけば、白い繭の残骸から右手のようなものが出ていた……それは、どういうことか自分達より頼もしく見えた

―――――――――――――――――――――――――

「そうか、お前ら、たんじょーびをたのしんだことないのか……」

「べつに、あねうえがいるからさびしくはないぞ？」

泥だらけの二人の顔をハヤテ少年がハンカチで吹いてやり、ハヤテ少年とたける少年が買ってきた駄菓子をつまみに話が弾む

やれ、たける少年の両親は自由人過ぎるだの……
やれ、めーやとゆーひの両親は仕事で忙しくて構ってくれず、習い事も辛いだの……
やれ、はやて少年の両親はいないだの……

地味に暗くなる話題故に、子供心ながらそうそうに打ち切る……話題は、誕生日になった

「ゆーひとめーやは、おれらとたんじょーびはいっしょなのかぁ……」

「じゃあ、皆で祝えばよくね？　まりもネーちゃん達も喜ぶって。」

まりもネーちゃん達とは、両親が不在がち（つか帰ってこない）に変わり、かつて大学の教授をしていたはやて少年の父の教え子で、父は恩師だというので、保護者を名乗り出たのだ

達というだけあって二人おり、二人とも綺麗であり、はやて少年はすんなり受け入れたが

「けっこんしたら、もんだいなくいけんじゃね？」

「け、けっこん……ですか（／／／」

「ふうふになったらむしろ祝うのがふつーだろ、ＪＫ。」

ちょっと待て、はやて少年はなんでこんなに将来有望なんだ……まあいい、話を戻そう

「ふ、ふうふ……（／／／」

「そうだな、ちょうど四人だし……？」

「どうしたんだ？」

「いや、にくしょくじゅーに狙われているようなしせんを感じる……」

「いつものびょーきか。」

後にわかるが、彼の感受性というか、はやて少年の発言は正しかった

めーやとゆーひの二人の護衛していたメイド長が、はやて少年とたける少年の圧倒的ショタ力（意味不）にメロンメロンだったのだ……ショタコンは怖いね

「はやてはびょーきなのか？」

「いや、べつにどうとかなる訳じゃないから気にすんな。」

はやて少年の病気は遺伝性なので、必然的に父親か母親からなのだが……完全な余談な為、割愛させていただく

「でも、みんなでいっしょにたんじょーびを祝ったらたのしいだろうな。」

「たしかにな……いつもは、はやてんとこのまりもネーちゃん達と一緒にだけど、やっぱりたくさんいたらたのしいだろうさ。」

「うむ、あねうえ……」

「ははうえと、ちちうえはいつもいませんからね……おじいさまがゆるしてくれれば、くろうしませんが」

なんでこのジャリ共は、こんなにませてんだと作者は言いたいが、自分で言い出したので口が裂けても文句は言えない

うんうん唸りながら、サイダー餅などをぱくつく四人の耳にある声が聞こえる

「どこなんだぁ～っ！！　めーやタンっ！　ゆーひタンっ！！」

「……まさか、早くも同志と闘う日が来るとはな……父さん、やはり僕らの道は、茨の道なのかい？」

頭というか髪型がラ〇デ。ーンのようになっている老人が犯罪者のように二人の名前を連呼している……きめぇ

はやて少年は、ロープを握り締めて身構える……風体こそ普通だが、呼び方が明らかに変態という名の紳士である

「「お、おじいさまっ？！」」

「「（ああ、やっかいなやつのともだちになったな……）」」

結局、御祖父様……雷電なる紳士とはやて少年が一悶着あった以外、特に何も無く、雷蔵さんが二人を連れて帰って行った……明らかにフラグ臭い台詞を残して

「はやてっ！　そなたに相応しいおんなになったら必ず……必ずっ！！」

「は～や～て～さ～まぁ～……」

「ほらほら、はやて君も困っているだろう二人共……そんなに会えないわけでもないんだ（ニヤリ」

「……はやて、おれかえるわ。」

「……そうか、じゃ。」

とりあえず、ここ数分の非日常な下りを無かった事にしようする二人……賢明といえば賢明だが、現実逃避に懸命に見えなくもない

「さて、穴埋めて帰るか……」

「ぼうや、貴方一人？」

「お姉さん……年齢差はともかく、逆ナンに引っ掛かるほど、成長してないんすけど？」

はやて少年が、砂場に開いた大穴を埋めようとしていると、後ろから一人の女性が話しかけてくる……黒髪に眼鏡、すらりとしているが出ている所の自己主張は凄い女性である

「あら、中々ませてるわね……まあ、良いわ。　この本が貴方の元に行きたがっているからあげるわ。」

「（うは、すっげ～怪しい……）貰えるもんは貰う主義だけど、高そうだし、いらｎ……？　いない？」

凶々しい雰囲気の本で、タイトルが無いし……なにより

「なんか、見ただけで気が狂いそうだな……っ？！」

本が光り、目の前が白けていく……光が視界を遮り、彼は……意識を失った

はやて少年に本を渡した女性は、木陰から出て来て、気絶したはやて少年をベンチに横たえる

「強くなりなさい、ぼうや……そして、魂を輝かせるの……私の為にね……フフフ」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「なんなんだ……あれは……」

『わかりません……ただ、味方……だと思います。』

白い繭のかけらがばらばらと落ち、姿が現れる……左手と右足を失い、背中にあった筈の六基のジェネレーター・ウィスプは無くなっている

確かにボロボロだが、その姿には力強さを感じる……残されしアヌビス
もしかしたら、パンドラの箱の片隅に残る、最後の希望なのかもしれない

「よう……中々はしゃいでんじゃねぇか。」

『よう、会いたかったぜ……俺。』

「ああ、だが終わりにしよう。」

『そうだ、俺たちには……』

『「言葉は不要だっ！！」』

二体の死神は戦場で会い、そして互いの杖を叩きつけあった

第十羽　繭と夢と渡り鳥（後書き）

主人公の敵というか、何かが現れましたね（笑）
ネタバレとそんなに深くクロスするわけではないので、あえて乗せていない作品名がありますｗｗ↑
まあ、よく訓練されている方々には直に分かってしまいそうですが（汗）
次回、首輪付き対渡り鳥……君はその時、彼の答えを知る。
さて、感想は勿論、指摘やら、アドバイスをお待ちしております。
（´・ω・）ノシ

第十一羽　首輪付きと渡り鳥と這い寄る混沌（前書き）

何故か、５回も書き直したのに、出る予定がカケラもなかった『彼女』が出ます……ああ、主人公は受難なんてレベルじゃねぇ

第十一羽　首輪付きと渡り鳥と這い寄る混沌

アーマーン・アヌビス（便宜上ＡＡと略す）とダメージド・アヌビス（同じくＤＡと略す）の戦いはもはや次元が違った

二体の軌道は、まるで『舞』のように美しく見えるが、互いに少しずつ削りあうような……まさに薄皮一枚で戦っている

「やりやがるな……『答え』は見えるのに一撃もまともに入りやしねぇ。」

《ざけんな……てめぇみたいな甘ちゃんに負けるわけにはいかないんだよっ！》

ＡＡの一撃をバク転をするような機動で避け、泣け無しのショットを叩き込む……火力で勝るＡＡに、機動で勝るＤＡ……一進一退の戦いである

「ほざけっ！　復讐と言う我が儘で１０億人を殺す奴に甘ちゃんとか言われたくねぇっ！！」

《んだとっ！！》

高機動戦闘をしていると思えば、次は杖による白兵戦闘をしている……力と力、技と技、知恵と知恵がぶつかり合っている

ＡＡの杖がＤＡの左足を穿ったと思えば、ＤＡの杖がＡＡの右足を引きちぎる……機体性能は、ＤＡが明らかに劣っているのに、ＡＡが徐々に押され出す

《じゃあ、じゃあどうしろって言うんだよ……あの閉鎖された世界でどうしろってっ！！》

「道は無くてもな……抜け道は幾らでもあるんだよっ！！」

《がぁっ？！》

ＤＡの左足の回し蹴りがＡＡの胴体を捕らえ、吹き飛ばす……凄まじい白兵戦闘に、インターバルが生まれる

「俺達は、真っ直ぐに……真っ直ぐに物事を考えすぎたんだ。　簡単だったんだ……道が無いなら『作れば良い』。　違うか？」

《ハハハ……まさか、セレンの言葉をここで聞くなんてな。》

「本当、俺達はあの人に……いや、色んな人に支えられて生きていたんだな。　俺さ……ナデシコの皆と関わって実感したよ。」

ＤＡは、ＡＡが立ち直すのを待っていた……周りの皆も、固唾を飲んで見守っている

ＤＡが立ち直すと杖を捨て、右手の拳を握る……ＡＡも、同様に左の拳を握る

「これで……最後だ……」

《抜き打ちか……上等っ！！》

二機の姿がぶれると、次の瞬間強烈なクロスカウンターが互いに決まる……ＤＡの頭部は右目部が潰れるだけに留まったが、ＡＡの頭部は吹き飛ぶ

《てめぇ……頭にチミチミとショットを決めていたのはこれが目的か……くそ》

「勝てば官軍ってな……俺の勝ちだ。」

《そうだな……ちぇ、なんか……未練とか……どう……でも、よく……なった……な……》

アーマーン・アヌビスは、頭部から亀裂が入り、そして石のように色を失い、粉々に砕け散っていく……ダメージド・アヌビスは、ただその姿を見守っていた

「終わったな……」

《ああ、これで本当に終わりだ。》

「っ？！」

突如、石化した筈のアーマーン・アヌビスの中から、杖が現れる、ダメージド・アヌビスを貫く

《俺がお前を置いていくとでも？　『ナンセンスだよ、渡り鳥』。》

「く……そ、『首輪付き』……」

《悪いが、俺はもう止められない……例えお前であってもだ。》

【コックピットのベイルアウト開始、自爆プログラム起動。】

《な……なんだとっ？！》

今までだんまりをしていたデルフィが動き出す……残った右腕と首で器用にアーマーン・アヌビスを捕まえる

【ランナーの生命を優先、これ以上……アヌビスに誰かを傷つかせる訳には行きません。】

《ほざけっ！！　くそ……かてぇ……放しやがれっ！！》

【やっと……私が何をしたいかわかった気がします。】

ダメージド・アヌビスのコックピットが切り離され、地表にたたき付けられる
その弾みで、ハヤテは目を覚める

「なんだこれ……どうなってやがる？」

《このメンヘラっ！！　放しやがれっ！！》

【断固拒否します、あなたはこれ以上生かしておける存在じゃない。】

「ひでぇな……それだって、一応俺なんだぜ？」

【え？】

ハヤテは、ボロボロの体でコックピットのキャノピーを蹴破って外に出る
重力が弱い火星だからなのか、ジャンプして羽交い締めにされているアーマーン・アヌビスを尋ねる

コックピット脇の強制開閉レバーを引き、キャノピーは開く

「よぇ……」

「よぉ、俺。」

こうして、アーマード・コア・ネクストと呼ばれる地上最強の機動兵器を駆る『リンクス（Ｌｉｎｘ）』と呼ばれる存在……『首輪付き』と最後の『レイヴン（Ｒａｖｅｎ）』と呼ばれた男……『渡り鳥』は出会った

―――――――――――――――――――――――――――――

ナデシコを制御しているホシノルリは、ナデシコに搭載されているＡＩのオモイカネとあらゆる想定でシュミレートをしていた

ビックバイパーの爆発地点から、万が一に生き残った場合の捜索すべき範囲

ビックバイパーの破片はあるのに、何故有機体の物が無いのか……

上げたらキリがない

「ルリちゃん、あんまり無理したら倒れちゃうよ？」

「はい……」

約三日間……ルリは、あまり食事を取らずに作業に没頭していたのだ

ナデシコの艦長であるミスマル　ユリカが推測する通り、目の前で親しい人が亡くなったのが相当効いているようだ……実は生きているけど

「明日から、ネルガルの研究施設を巡って物資の回収、コロニー・ユートピアの人々を救助した後、地球に帰還……ルリちゃんとオモイカネがどれも成功できないの。」

「はい……」

「身勝手な大人で……ごめんね、ごめんね……」

ただ、ユリカはルリを後ろから抱きしめる……その時、彼女は一人の人間だった

―――――――――――――――――――――

黒髪の青年と白髪の少年は向き合っていた……白髪の少年の顔は、黒髪の青年の面影を感じた

「あんた……ハヤテって名乗ってるだっけ？」

「ああ、夜鷹は余程の事がない限り名乗らないと決めたからな……」

「そうか、そうなんか。」

黒髪の青年……疾風と白髪の少年……夜鷹は、色々話し合った

何故、戦っているのか

戦って出来た血の海に何故自分達は平然としていられるのか
何故、自分達は『イレギュラー』と呼ばれ、迫害され続けられるのか
そして何故……

「「なんで、俺の愛した女って敵として立ち塞がるんだろうな……はぁ」」

疾風と夜鷹……全く同じと言うより、過去(むかし)と現在(いま)の自分が話し合うって中々稀有な事だが、彼等の専らな話題は、自分達の愛した女達は例外を除いて『芯が強い』奴ばかりなのか

フィオナ・イェルネフェルトしかり、セレン・ヘイズ……霞スミカしかり

昔は、奥ゆかしいのか好みだったのになと馬鹿みたいな話をしていた中、突如機体が揺れる

「限界か……ほれ、さっさと逃げな。」

「さっさと逃げさせてもらう……ああ、お前の尊厳に免じてこのまま朽ちて逝け……それが互いの為だ。」

「い・や・だ・♪」

夜鷹は、疾風の手首を握ると赤い細い光の筋が何本か走り、疾風

の中に吸収されていく

「持ってけ……それは『俺達であって、俺達では無い物』だ。」

「けっ、お人よしが……」

長い時間の蓄積……傭兵としての自分の最終態である『Ｌｉｎｘ（リンクス）』……繋がる者の意である存在になった

そんな彼は、『平行存在同士の強制融合』と言う珍事が原因で分裂し、長らく機械との親和性を失っていた

が、何の因果か知らないがこうして、『首輪付き（リンクス）』と呼ばれていた頃の自分と戦い、打ち勝った自分が居る

「さて、もう時間か……」

「……っぐぷ？！」

突然、盛大に血を吐く疾風……口からは絶えず血が出ており、目の前にいた夜鷹は血まみれになる

「最後は自分の血まみれになって死ぬ……か、悪役には相応しいな。」

「いや、洒落になんｎ……ぐぶぇっ」

まるで、体の中で何かがはいずり回り、破壊して出てこようと必死になっているように見える……
体から生傷が走るように生まれ、血が堪えず吹き出す

「再誕の為には、明確な死が必要なんだ……今はただ、傷付いた体をゆっくり休める程度の認識でいいよ。」

「てめ……だれ……d」

疾風が最後に聞いた声はまるで、夢の中で聞いたあの女のようであった……疾風は意識を失い、先程まで『夜鷹だった者』は、『闇に吠える者』の異名持つ者の懐に、まるで母が子供を抱き留めるように、まるで恋人が愛しい人を抱き留めるように、疾風を受け止めた

「うれしいよ……僕の予想を超えて輝いて見せるなんて……さて、中々仕込みがいがありそうだ。」

その『女性』は、恵まれた四肢で疾風を包み、戦士に休息を与える……例えそれが、邪神の邪まなる抱擁であろうと、力を使い果たした疾風『は』抗う術はなかった

【馴れ馴れしく、私のランナーに触らないで下さい。】

「おや、嫌われてしまったみたいだ……まあいいよ。　僕はただ、疾風君が禁忌に至れば良いだけなんだし……うん、あれ……」

剥き出しのコックピットで抱擁されている疾風をダメージド・アヌビスのＡＩである『ＤＥＬＰＨＩ』が端子を駆使して拾い上げる

【それでは、ご機嫌よう。】

「むう、早くも嫌われてしまったみたいだ……おっと、僕は失礼させていただくかな。　それに、仕込みは終わったしね。」

女は、暗い……ほの暗い闇に消えていった……
ダメージド・アヌビスに支えられていたアーマーン・アヌビスは、ゆっくりと自由落下により警告に落ちていった

―――――――――――――――――――――――――――――――

ｐｉｒｉｒｉｒｉ……

朝、不愉快な目覚まし時計の音で起きる……二回生になった今でも、朝がダメダメな俺は一限目の大学の講義は地獄変だ

「く……むう……」

「おはよう、昨日はお楽しみだったね。」

「え？」

そこには、長い黒髪を無造作に散らし、豊満な肢体を惜し気もなく見せ付ける女性……行きつけの古本屋な女店主の『ナイア』さんがいた

俺が今は探偵をしている先輩から一回生の時に彼女の古本屋を紹介され、彼女に出会い一目惚れ、二回生に上がる手前で土下座同然に告白したらＯＫを貰ったら、その日の内にこうして『喰われた』のだ

「ふふ、君の寝顔はいつ見ても可愛いね……おっと、急がないと一限目に遅れてしまいそうだね。」

「すいません、うし……じゃあ行ってきますっ！」

「いってらっしゃい。」

俺はこうして、憧れの大学……『ミスカトニック大学』を目指して走り出した……

第十一羽　首輪付きと渡り鳥と這い寄る混沌（後書き）

夜の営みが見たい方は、感想の最後にわっふる、わっふると書き込んでください……いや、正直掛かれても別の奴で書きますが

第十二羽　矛盾なんざ知りません（前書き）

何がなんだかさっぱり

第十二羽　矛盾なんざ知りません

なんか、壮大な夢を見ていた気がする……普通の学生だったのにある日、死んだ筈の両親からの手紙でヨーロッパのアナトリアに向かってみたら飛行機事故で左足を失って……それかｒ

《エスカトニック大学前……エスカトニック大学前、お下りな方は急いで下りてください。》

「ああっ？！　下ります、下りまぁ～すっ！！」

ぼんやりと車窓を眺めて考えていた事は、突然のアナウンスでかっ消える……疾風は、急いでバスを降りた

―――――――――――――――――――――――――――――――

緑色の液体で満ちているシリンダーがぽつんとある暗室……シリンダーの中には、黒髪の青年……疾風が浮かんでいた

「不完全な再生治療……いや、不完全な機体であんな化け物を相手にした以上、無事なのがおかしいのかしら。」

「傷自体は元々塞がっていたようだがな……たく、まいったな……微弱な脳波はまだあるがこのままじゃ死んじまう……くそっ！！」

そこにいたのは、ディンゴとその妻であるケン……アーマーン・アヌビスが谷底でバラバラの残骸で見つかったが、交戦したダメージド・アヌビスもただでは済まなかった
フレームは歪まずに済んだが、プログラムの殆どがダメになった……幸いだったのは、独立支援ユニットである『ＤＥＬＰＨＩ』が無事なのと、フレームランナーがギリギリ生きていた事くらいか

「それにしても不思議よね……ラダム・レヴァンス以降成功しなかったメタトロンによる人体補完手術が成功したなんて……」

「ああ、おまけに本人は至って普通に生活していたのによ……奴らはダイモス事件の二の徹踏みたくないばかりに１８のガキを殺すような真似をしたばっかりにノウマンまで化けてでやがったしな。」

ダイモス事件……かつて、初めてオービタルフレームが戦闘した歴史的事件だ
被害者総数７６名……この数字は、数年前に二人増えた……それこそが、犯人にして被害者である『ラダム・レヴァンス』とその婚約者の『ドロレス・ヘイズ』であるが、余談の為に割愛する
話を戻そう、この時はまだラダム・レヴァンスは死んではいなかった
火星解放を訴える過激派により、人体補完手術を受けた……この時、メタトロンで出来ているオービタルフレームとの親和性を高める為に、メタトロンで出来た人口臓器で手術は行われ成功した
しかし、彼はメタトロンの副作用……狂気増幅の悪循環により、過激派が意図した『地球の破壊』を行うが、ある第三勢力により阻止され、体の無理が祟って死去した

「悲しい……事件だったわね。」

「ああ、だがコイツは狂気に飲まれなかった。　だから、奴のようにはならないさ。」

「それは違うと思うなぁ。」

「「っ？！」」

いつの間にか後ろにいた見たことの無い軍の上に白衣を着た妖艶な女性……この部屋には、通気孔と自動ドアしかない為、気が付かないうちに入って来たのはありえない

「そんなに驚かなくてもいいじゃない？　始めから居ただけなんだし。」

「そうかい、じゃあ何故コイツが狂気に飲まれない事に意義を唱えるんだ？」

明らかに不審者だが、慌てる必要は無い……何故なら、こんな閉鎖された空間から逃げるのは『不可能』だからだ

万が一に備え、ケンは銃を構えている

「その前に自己紹介をしよう、僕は大和宇宙軍の兵器開発局のしが

ない技術者の『ナイア』さ……彼は、狂気に飲まれなかったのでは無く、狂気を飲み干したのさ。」

「バフラム軍の一介の部隊長のディンゴ・イーグリットだ。　狂気を飲み干したってのはどういう事だ？」

妖艶な笑み……いや、嘲笑したような笑みを浮かべながら、滑る様にハヤテの入っているシリンダーに近づく
そう、歴戦の猛者であるディンゴを出し抜いて

「例え話をしようか……かつて、百億人の原罪まみれの民を虐殺した男が居た。　その男は、当時最強と謳われていた４人を返り討ちにし、破壊の限りを尽くした『獣』が居た……そいつは今、本来の自分を見失い、混沌をさ迷う自分を取り繕って生きている。」

「百億……殆どの人類を？」

「そうさ、その獣は世界を否定し、生命を否定しある意味『世界の怨敵（マスターテリオン）』に近づいた男……まあ、彼が本領発揮する前に人類滅亡、世界を死滅して彼は死んだんだけどねぇ……その男の名は『夜鷹（ヨタカ）』闇夜に飛ぶ魔獣と呼ばれ、今は『疾風（ハヤテ）』風向きを変える者と呼ばれているよ。」

「「っ？！」」

どちらもアヌビスを駆り、殺しあっていた者達の名前である
二人共、レオのネイキッドジェフティやディンゴのアヌビス・レプ

カの到達し得ない……文字通り『神域』であり、決して人間の到達しえ無い……いや、してはならない領域を二人してスキップで、なおかつリズム刻んで踏み抜いていた
似てこそはいるが、ベクトルが真逆な二人が同一人物であるなんて信じられない

「まあ、そんな事はどうでも良いんだよ。　僕はただ、真っ直ぐに『歪んだ』彼が愛おしくて堪らないね。　初恋は実らないかったけど、今回は是非受けいれて欲しいね。」

「おい、待ってっ！！」

気が付いたらナイアは、部屋の闇に消えていった……部屋に残されたのは、意識の戻らないハヤテ、ディンゴとケンだけであった

――――――――――――――――――――――――

大学での修行を終え、ハヤテは寂れた建物……大十字探偵事務所に居た
小脇にお土産を抱え、ハヤテは緊張した面持ちで中に入る

「（にしても、いくらなんでもコレはひどいっしょ……）」

「おう、来たかハヤテ。　今度はなんと、なんと覇道財閥から依頼が来たんだよっ！！」

「なっ？！　覇道って実質この街の支配者のあの覇道っすか？！」

たまに、大学関連（ここは危険だとか、ここは絶景だとか）の情報を教えてくれていた三年の気の良い先輩だったが、勉強熱心なのが祟って、閲覧禁止の魔道書を読んで入院やら何やかんやで中退したらしい

いまでは、探偵というロマン溢れる職を為さっている

「へへ、まあな。　今度なんか奢ってやるよ。」

「まじっすか、変な甲斐性見せると、死亡フラグ立ちますよ？」

「問題ねぇ、今の俺なら何でも出来るっ！！」

さいですか、そうさっ！　先輩と後輩は、後輩が絶対に『コイツ、今日中に死ぬなコレ』と感じながらも、絶対声には出さない

土産は無駄になったかと、ばれない様に（先輩……大十字九朗は赤貧生活のせいで貧乏性になっている為もらえるもんは奪い取る性質）隠し、事務所を後にしたハヤテは家である古本屋に帰って来ていた

「ただいま、ナイアさん。」

「おかえり、今日はなんだい？」

「ん？　ああ、きのこのシチューだよ。」

居候先のナイアさん……今朝のように全裸で人のベットに入り込んだり、風呂に乗り込んでくる痴女というかもはや豪傑である
ちなみに、彼女の営む古本屋は俺のバイト先の一つである……実家からの仕送りは『修行の一環』という姑息な形で無い……てか、はなからあてにしていない

「君の料理はいつも僕の予想を超えるよ。　いっそ、永久就職する？」

「大学も出て無いヘタレに何いってんすか？　ほら、シチュー冷めちゃいますよ？」

主夫という道も中々魅力的だが、今は俺の体に埋め込まれていた魔道書の解析が先決だ……タイトルも、歴史も無いの無い無い尽くしの癖に力は一級品とかマジ意味不
シチューを啜っていたナイアは、何かに気が付いたのか顔を上げる

「どうしましたk「伏せてっ！！」へぶっ？！」

気が付いたら、頭をひん掴まれて床に叩きつけれらる……何処からこんな怪力が出るんだと疑問を感じる前に、ハヤテは目の前の惨劇を見た
街が巨大なロボット達に破壊されている中、ハヤテはある事に気が

付く

「これ、そっか……夢なのか。」

【そうです、ですが貴方の今この一瞬は確かに現実です。】

「おや、もう覚醒したのかい……破壊の獣（ヴァルナガント）？」

ナイアは心底面白いものを見るような眼でこちらをみている
だが、今はそんな事に構ってられないと言わんばかりに踵を返す
その手には、先ほどまで持っていなかった黒い無地の本が握られていた

「なんつうか、短い間だったけど世話になりました。」

「構わないよ、ただ君は『至りそう』だからちょっかいかけただけだよ。」

「じゃっ！！」

ハヤテは崩れた壁から二階から飛び降りたにも関わらず、暫く蹲ってから走り出す
ナイアは、それを見送ると口角突き上げて満面の笑みを浮かべる

「ああ、素晴らしいよ……混沌さえも破壊しかねない、その力……

初恋は実らなかったけど今回は……く。」

「逃がすかよ、悪いが後輩に変な勧誘は無しだぜ？」

恍惚とした表情でハヤテを見ていたナイアは唐突に前方に跳躍する……その瞬間、床板が爆ぜる

気が付いたら、大十字九朗……いや、その手には紅の銃『クトゥグア』と白銀の銃『イタクァ』が握られている

「別に、彼をどうこうしようって訳じゃないから良いだろう？」

「『ドリームランド』なんざ普通は入れない所に態々連れ込んだ挙句、外道の術を教えてるくせにどうこうする気が無いとか嘘っぱち吐いてんじゃねえよ。」

「ひどいなぁ、あんなに殺(あい)しあったのに。」

「変な言い方すんじゃねぇ、俺は魔を断つ剣でお前は打倒すべき邪神。　後は分かるな？」

「全く、ここじゃハヤテ君の精神体に傷が付きかねないから移すよ？」

二人……否、三人は、闇夜に消えた行った

――――――――――――
――――
――

ハヤテは走っていた……目の前の理不尽は鬱陶しくて、上から目線の支配が鬱陶しくて……『かつての自分』がそうして来た様に支配者を打倒し、大空を駆ける翼となるのを夢見て

「ぶっつけだがしょうがねぇ、行くぞ『デルフィ』っ！！」

【問題ないです。】

魔道書から心に直接語りかけて来る声……相棒の声と一緒に、自分がかつて殺してきた者達の声が聞こえるが、もう呑まれない言霊を魂で感じ、何故か魔道書の中に居る相棒と一緒に紡ぐ

「【契約（アクセス）――我、混沌を旅する者也】」

言霊を紡ぐと同時に、世界が揺らぎ、ハヤテの足元に山吹色の光を放つ五芒星の陣が展開され、力が巡回する

「【秩序を否定し、混沌を纏いて自由を着る者】」

「【幾千の狂気と幾万の覚悟をその身に刻む――】」

手に持っていた魔道書は散り散りになり、ハヤテの体を包み……
それは慈母の様に、恋人の様に……漆黒の服装に白い不自然な肌色

「【術式選択――――魔術衣装(マギウス・スタイル)っ！！】」

その姿は、人を逸脱して更なる領域へと足を踏み入れた……『渡り鳥』から『首輪付き』へ、そして『首輪付き』から『マギウス《魔術師》』へと

「俺が言えた義理じゃねえが……」

【言葉は不要です。　さあ、呼んで下さい。　私を、貴方の翼を。】

「……おう。」

ハヤテは、左手を高らかに掲げて瞳を閉じる……始めはただの我が儘だった
なら、最後まで自分の『エゴ』を貫き通すだけ……ハヤテの姿をマギウスへと変じさせた魔方陣が、否、それより更に大きな魔方陣が展開される

――混沌の空より来たりて

紡ぐは言霊、導くは御伽噺……一山いくらかの神話など、ハヤテには必要ないのだから

――終わり無き旅路を歩み行き

魔方陣の光が強まり、回転も速くなる……魔方陣から溢れているのか、山吹色の羽が宙を舞う

――混沌を纏いて、我が翼と成れ

魔方陣から、一筋の光が舞い、天に昇り、そして地に落ちる

――汝、夜駆ける翼

「【ヘルメスっ！！】」

それは、力の具現……腰から伸びる翼状のジェネレーターに逆関節……アヌビス《死神》を超えた存在……混沌の中でさえ、歪まず進む翼『ヘルメス』が降臨したのであった

第十二羽　矛盾なんざ知りません（後書き）

しかし、デモンベイン一番の人外は西博士だと思う。
アイツ、レムリアインパクト喰らって生きてんだぜ……

第十三羽　混沌のはじまりハジマリ

夢の中とはいえ、街を破壊している巨大なロボットを放置する気にはならなかった……自然と力が漲る
コックピットは見慣れたオービタルフレームの物と一緒だが、何か違う気がする

【ハヤテ、この機体……ヘルメスは貴方の翼であり、機械仕掛けの神『デウス・マキナ』と言います。】

「もはや、オービタルフレームだとか兵器の域を逸脱したか……だが、わかる気がするよ。」

ヘルメスから感じる『想い』……それは、怨みだったり怒り、悲しみ、絶望と言った負の感情だけでは無い
祈りや願い、希望、そして愛を感じる

「早く帰らないとな……いくぞっ！！」

「【我ら、この一瞬は魔を断つ翼となるっ！！】」

山吹色の軌跡を描きながら、常識を逸脱したスピードでヘルメスは巨大なロボット『破壊ロボ』に接近した
先客が居たようで、白い巨人が二体の破壊ロボを相手に悪戦苦闘していた

《くそっ！！　コイツら隙がねぇっ！》

《巨大な魔力反応が接近だと……こんな面倒な時にっ！！》

《ふぅぁ、はっはっはっ！！　この何時もニコニコ貴方の傍に這い寄る皆の大・天・才！！　ドクター・ウェストの作りし破壊ロボが、そこら辺の一山いくらかのヒーロー気取りのヘンチクリンロボに叶うはずないのであｒ》

破壊ロボの上でエレキギターを掻き鳴らしながら緑の髪をしたいかにも○○○○な男の乗る破壊ロボは、突如現れた山吹色の光を纏う黒き影……ヘルメスに蹴飛ばされて吹き飛ぶ

「やかましいっ！！　真夜中に意味不明な単語をばらまくんじゃねぇ！！」

【そういえば、あの手の輩は苦手でしたね。】

《な……わ、我輩の芸術ｔ》

【ハルバート……って、無意識に障壁貫通の兵装を選択する貴方に痺れます。】

喧しい輩に、情け容赦無く大火力の極太レーザー……障壁を破壊する兵装である『ハルバート』を撃ち込む

無意識なのか、はたまた『どういう物』なのかを瞬時に把握して使ったのか……

「何がなんだがさっぱりだが、これだけは言える……人の夢でギャアギャアと喚くじゃねぇっ！！」

【今度はバースト……本当に何処まで兵装を理解してるでしょうか。】

ハヤテの乗るヘルメスの掲げている右手に山吹の光が収束し、ドリル状の光となる

【ディストーション】

「プレッシャーっ！！」

《己ぇっ！！　そんな猥褻物をぶら下げているチンチクリンなロボがドリルを……漢の浪漫の結晶であるドリルをつかうなんてぇっ？！》

『ディストーションプレッシャー』……空間を破砕するその光のドリルは、空間を捩曲げ、対象を捩曲げ破壊し、蹂躙する

ドクター・ウェストの乗っていた破壊ロボは、脆くも崩れ去った……真ん中に大穴を開け、大爆発しそうになっても、その残骸はドンドンと内側に収縮し、跡形も無く消えた

《覚えていろ、〇〇物陳〇ロボっ！！　この大天才、ドクター・ウエストの作り上げた血と涙の結晶を無慈悲に、冷酷に破壊した事を後悔させてやるのであるっ！！》

「一昨日来やがれ、バーカ、バゥァーカっ！！」

【見事なまでのキャラ崩壊です。】

ドクター・ウェストが乗った脱出ポッドに向かって中指立てて詰るハヤテ……キャラ崩壊凄まじいが、それを狙う影が迫る

《貴様らっ！　和んでいるが、まだ敵はいるぞっ！！》

「ぐ、がぁぁぁぁぁ！！！」

【機体損傷率７５％……ドリルで倒したらドリルにやられるなんて、ギャグですね。】

味方？の警告虚しく、流れ弾？のロケットドリルがヘルメスを襲い、地につかせる

痛い……なんというか、馴れない熱血をやったら痛い目を見た……

痛い、ただひたすらに痛過ぎる

「やばい、なんか首吊りたい。」

《あ～……気持ちは解るが我慢しろよ。》

《ふん、そこで我らが力を特と見ておくんだなっ！》

白い巨人は、破壊ロボに向かっていった……街に突っ込み、沈黙しているヘルメスの中で疾風は呟く

【……やっぱり】

「だせぇよな……」

自重気味に笑う魔導士（マギウス）……そこには、ただの……『始まりの彼』が居た
熱血や王道に憧れるけど、何故か乗り切れないから、楽なクールやダークに身を堕とす
思春期真っ盛りの小難しく、そして繊細な『少年』の彼が

【……（拗ねてるハヤテも中々……）】

「……（とりあえず、動力系統だけでも立て直さなければ。）」

本当、中々良いコンビである……ネタ的意味合いで
手元の計器やコンソールを弄りながら慣れない機体を動かそうと頑張るハヤテ
その目には、確かに前までなかった『炎』が渦巻いている

――――――――――――――

ハヤテが眠っているシリンダーの周りの計器が突如、異常な数値を示し始め出す……それは、ちょうどハヤテが魔導書を起動した時と合致していた

その様子を愉快そうに見つめる人物……『ナイア』は、食い入るように見つめる……気泡が上がるだけで恍惚とした笑みを浮かべる

「ああ、素晴らしいぃ……いままで、『悪』や『正義』を纏うモノを見て来たけど『混沌』という不定型なものに力を染めるなんて始めてみたよ。……はぁ、はあ」

正直見た目は絶世の美女だとしても、その言動と仕草で完全に危ない人だ……いや、正直危ない人ですが

目が鋭いアキト……のそっくりさんの自称大和宇宙軍の軍人の『スサノオ』（現在、バフラム軍に保護されている）が後ろから普通に入ってくる

「ナイア博士、そろそろ地球よりリンクス博士が到着するようです。」

「ふぅ～ん、オービタルフレームの産みの親……か。　わかった、エスコートは頼むよ、スサノオ君。」

「御意。」

「全く、大和の軍人は愛想ないなぁ……シリンダーで浮かぶ彼を見習ったらどうだい？」

「彼は友人です。　あまり、虐め無いでください。」

ナイアの無茶振りをやれやれとスルーするスサノオ……いくら、大和宇宙軍のスポンサーである『覇道財閥（はどうざいばつ）』から派遣されている為に無下にも出来ない……軍人は辛いよ

「友人……か、まあいいか……」

艶っぽい視線をハヤテに送り、ナイアは出ていく……面倒そうにナイアをエスコートするスサノオ

ハヤテはただ、シリンダーの中で沈黙していた

―――――――――――――――――――――――――――――――

■火星圏 - 某所

かつて、地球壊滅の危機を救った第三勢力……否、『家族』が居たリンクスと言うファミリーネームで、六人家族だ

父『ジェイムス・リンクス』は元軍人で現在は運び屋をしている。

母『レイチェル・S・リンクス』は、そんな夫を支える為に一緒にいる傍ら、メタトロン技術の発展、代替技術の研究を勤しんでいる。

長男『レオン・リンクス』は、父譲りの熱血ワイルドな性格が災いし、セクハラする上司を殴ってはクビになっていたが、現在は父ジェイムスの運び屋稼業の手伝いの為に運送を請負、統括する会社を立ち上げ、細々と頑張っている。

長女『ノエル・リンクス』は、そんな兄を支える為に兄の会社の会計を担当しているそうだ。

次男『ラダム・リンクス』は、現在小学生であり、その姉に当たる人物……

次女『ドロレス・リンクス』は、元々はオービタルフレーム『イシス』のＡＩだったものが紆余曲折して、ジェイムスの運び屋稼業を支える船『エンダー号』の統括ＡＩとしてリンクス家の一員として頑張っている

そんな家族の大事な船……エンダー号には、父と母、そして次女と次男坊がとある用事で火星に来ていた

ジェイムスとレイチェルは、エンダー号のコクピットでその事に関して語り合っていた

「にしても、なにもレイチェルに頼まなくても良いのによ……」

「大丈夫よ、今回は見つかったアヌビスの残骸の解析と修理って言ってたのだけど不思議よね？」

「何がだよ？」

レイチェルは、ジェイムスにとあるニュース記事を見せる……それには、『メタトロン相次いで発見』というキャッチが書かれている

「これがどうしたんだよ？」

「どうしたも何も、劇的に産出量が下がっていたメタトロンが再び発見され出した日は、そのアヌビスの残骸が見付かった日と全く同じなのよ。」

「なんだって？」

アーマーン事件以来、右肩下がりだったメタトロンの産出量がここ最近急上昇してきているのだ

まるで、壊れたアヌビスの為に集まるように……

「理由はわからないわ……ただ、産出量が急上昇しているのは素直に喜ぶべきね。」

【お父様、そろそろバフラムのバシリア領に着きますわ。】

「お、そうか。　ドロレス、ダイモスステーションまでの誘導と連絡を頼むぞ。」

【わかりましたわ、お父様。】

こうして、バシリアに役者は揃っていく……造る者、護る者、闘

う者、観る者……それぞれの思惑があり、事態は大きく変わっていく
物語は紡がれる……四つの物語が、一つにより集められて

■火星圏 - バシリア領付近

大和宇宙軍……まあ、簡単に言えば宇宙を旅する移民船団を護る事を新年とした軍であり、もはや馴染んでいるスサノオだが、彼もここの所属である

「ド・マリニーの時計、正常終了……術式安定……ボゾンアウト確認。」

「船団にはぐれた艦が居ないか、監視をして下さい。　全艦、警戒態勢っ！！」

彼らは、資源不足の故郷を再生させる為に残った者達と、こうして宇宙をさ迷い、新たなフロンティアを求めて旅をしている

「スサノオ中尉の通信で指定されているポイントにエネルギー反応多数っ！！　これは……ど、土下座してる？」

だが、彼らの旅で歴史に刻まれるだろう珍景『２０を超えるラプターやサイクロプスの大群の土下座待機』を目撃するのであった

異端録一項目（前書き）

ようやく、この作品のもうひとつの側面が書けるよ。
この作品で洗い出せること全部洗い出さないと…

異端録一項目

人生とは短く、一貫性など皆無に等しい……短いようで長い人生で感じた、自身の体験を元に語る格言というか戯言だ

異端録-Ｋｏｕｚｕｋｉ　Ｈａｙａｔｅ-ｓ　Ｌａｓｔ　Ｌｏｏｐ-

ＢＥＴＡ（対人類敵対的地球外起源種）共との戦争に巻き込まれた俺は、気合や勇気、魂などの精神コマンドを出せるＳＰをとっくの昔に吐き尽くし、後に残った残り粕である俺

『香月（こうつき）　疾風（はやて）』は、無気力な人間の代表になるかと思えば、こうして行きあがく醜い自分がいるのに血へどが出そうな思いだ

絶賛１７回目のループを迎えた俺は、一つの転機を迎えた……見たことも無いベットで目が覚めたのだ……

いつも起きる、固めのシングルの男子高校生臭の少しする部屋では無く、やあらかい……うん、そんな風にしか表現しようがない程柔らかいベットでぐうすか寝ていたようだ

今までたまに寝た、士官が寝るようなベットより少し上等かもしれない

そんな記憶が無いと言うか、酒を飲んで酔っ払った勢い～なんて可愛い状況ではない

超スピードだとか、催眠術なんてチャチなもんじゃねぇ……俺が『ループ』している時点から薄々感じていたが『作為的悪意』を感じる

ループをしている以上、顔見知り皆を助けたいし、何よりもいい加減気が狂いそうだ……夕呼姉が作っているという対ハイヴ（ＢＥＴＡ共の巣）攻略戦の切り札『００ユニット』の完成のかの時も見たこと無い

夕呼姉は００ユニットが無いと人類に勝ち目が無いというが、完成しない物に頼るのは、他人に頼るのは懲り懲りだ……前回のループでは、頼られたやつの面倒、まあ部隊をまとめていたが結局一部の腐れ士官に食いつぶしにあうのがオチ……だったら、『自分なりの勝ちへの答え』を探してやる……うん、そろそろいいかな……目を開けよう

「なんで、縮んでんのさ……」

ループしたら起こる、ループの始点になる『１８歳』の時の体に強制ランクダウンしているの筈なのに、これは酷い……酷いなんてもんじゃねぇ

記憶が正しければ父母が死んだ時の年齢……ちょうど『五歳』の頃な感じがする……うん、溢れ出る幼年期臭が半端ない、混乱がちっとも収まりやしない

「はやて、おきているか？」

「……へ？」

なんつうか、自然（ナチュラル）に……それでいて大胆に人様の部屋に入って来た幼女って、俺の肉体年齢的に彼女の方が『お姉さん』……なのか？

何となく歳の割にしっかりしている感じがする

「どうした？　まだねむいのか？」

「だいじょぶ……さき行ってて……」

なんつうか、本当に五歳の頃の舌だ……夢かと思ったが夢ではないだろう

この空気とベットの感覚、それとｙ……彼女の涙目は紛れも無い現実（リアル）……ん？　涙目？

「わ、わかった……たまには、ひとりできがえくらいしたいよな……うん、さきいってるね……」

「……きまず。」

あれだろうか、あの姉貴風吹かせていた少女はマジで姉貴で、かなりのブラコンなのか？

……疾風の思考が、６６６通りの答えを導き出す頃には、疾風はきっちりと着替えて部屋を出る……残された部屋は、五歳児とは思えないくらいにきっちりとキレイにしていた

こうして、彼の奇妙な……『ＬａｓｔＬｏｏｐ（ラストループ）』は始まった……

―――――――――――――――――――――

―とある事件の捜査資料―

とある事件の中心人物『疾風』と当時最も親しい人物の一人『篁(タカムラ)唯依(ユイ)』……父と母をＢＥＴＡとの戦争に失い、日本帝国軍でも父の知人であり、中佐という高い地位のある巌谷　榮二の庇護の下で生活している……彼女は、まじめというかつい最近出来た弟分『疾風』の事が気になるのだ
お姉さんぶりたいというか、幼い疾風の持つ『触れたら折れそうな羽』のような雰囲気についそう振舞いたくなるのだ
こう……護ってあげたくなるとは違う、『どうしても気なってしまう』のだ
　最初の頃は、年相応に無気力というより成すがままだったが、彼の今朝の様子を見たら一片していた
　唯依はその時の彼の様子にゆっくりと翼を広げた『鷹(たか)』を幻視した鋭くも優しい瞳、まだ早朝故に致し方ないとは言え、今まで疾風が自分より早く起きた事で動揺しているだとかの次元の話じゃない
　早朝の鍛錬場に現れた彼の纏う空気は五歳児が纏って良い物ではない……まるで羅刹……いや、狩りをする『鷹』と表現した方が良いのだそれほど、彼の様子はガラリと変わったのだ……心当たりとすれば、老女中が彼の部屋の窓際に『女性のような影』を見たらしいのだが、その証言をした数分後突如発狂し、首を吊って死ぬという悲惨な事件が起きた
　彼女に懐いていた唯依と疾風には知らされていないが、あまりにも悲惨な現場に皆、息を飲んだ……現場には、ただ一言『這い寄る混沌』と書かれていた
　彼の変化と老女中の自殺……関連性が証明出来ない為、この事件は迷宮入りした

第十四羽　時を越える傭兵（前書き）

一部挿絵がありますが、そんなに上手くないと自負しています。
まあ、適当にスルーしてください。

第十四羽　時を越える傭兵

ナデシコ本来の任務は順調に進行していた……スキャパレリプロジェクトは、火星民を助けに行くというお題目で行われているネルガル社の機密データ回収と施設破壊
それを、ルリは命じられている訳でも無いのに淡々とこなしていた……こんな場所、火星に一秒と居たく無かった
兄のような存在が墜ちた場所に……火星民には悪いが忌まわしく感じるこの星に居たくは無かったのだ

「施設０５６のデータサルベージ終了、施設破壊コードを送信……コードの承認確認完了、ふぅ。」

少し前までなら、ここで労いの言葉と共にハヤテが紅茶を持ってくる筈だった
だが、彼はもういない……死んでしまったのだ……少々、疑問に感じる点はあるが、ハヤテが死んだ事には変わり無い

「サルベージしたデータの圧縮開始……暫くは寝れるかな？」

ナデシコの面子は皆、火星民の捜索をしている為、残っているのはルリと整備班と食堂の人達だけ……ハヤテの部屋には、私物が今だ片付けられずに残っており、最近ではルリの部屋と化している

【テンカワ機より入電、コロニー・ユートピアを発見。】

「わかった、すぐに準備をします。」

テンカワさんは今頃メグミさんとデート……いや、テンカワさんに自覚は零だろうなとか考えながら、ルリは淡々と作業をこなしていく

途中、フクベ提督とヤマダさんが過去に行方不明になった戦艦『クロッカス』を発見したと言う報告があったが、あくまでも計画を優先する為にとミスマル艦長は、その場で待機してくれと言う事になった

――――――――――――

――――――

――

ナデシコは、膨大な出力を出す相転移エンジンを大気圏内の為、満足に動かせない状況だが、幸いにもディストーションフィールドには事欠かなかった

コロニーユートピアに着いたナデシコはその付近に着陸せずに待機、現地民との説得……交渉の為に艦長とテンカワさんが行くことになった

現地の女リーダー……『イネス・フレサンジュ』はただ一言、こう言い放った

「わざわざ遠いところから悪いんだけど、貴方達と行って貴方達と

犬死になんて嫌よ。」

「「っな？！」」

イネス・フレサンジュ……ナデシコの建造計画にも関わっていた彼女はこうまで言った

凄まじい物量戦を仕掛けてくる木星バッタ相手に、中途半端な火力と障壁しかないナデシコと行き、一緒になぶりものにされるなんて堪ったものじゃ無いと言ったのだ

なまじ自覚がある二人なだけに二人は一度引き下がることにした……そして、再び『奴ら』が来た

「木星トカゲ確認……数、カトンボ級２５、その他測定不能……っ？！」

「各員、撤退戦に備えてっ！！」

「「「了解っ！！」」」

撤退戦をを即座に切り替えたナデシコ……戦術的にグラビティブラストによる掃射をしたとしても、圧倒的物量と近くに活性化したチューリップにより随時敵は数を増やすだろう

故に撤退戦……どこに引くとはこの際は考えてはいけない

ただ、敵わない相手にあほの様に喧嘩を売って自滅していたら笑い話にも出来ない……

今考えられる最善の方法は、渓谷のように一直線に限定された空間でのグラビティブラストのみだろう

しかし、相手は物量戦でこちらを圧倒してくる……頼みのエステ

バリス隊も現在は火星の生存者を探しに散っている
今を最悪と言わずにいつ言うのか……ディストーションフィールド許容以上の量の敵が取り付き、いくらかが突き抜けて艦体に当たる瞬間

ドゥンっ！！

時を越え、山吹の翼を携えし『守護神』が現れる……

――――――――――――――――――――――――

夢と自覚していていても、苦痛を克服できるほど、人間は器用に出来ていないのが普通であるからして……

「（自分の未熟を呪いてぇ……自分の存在意義すらこんなにたやすく打ち砕かれやがって……）」

【敵、アンノウンと交戦中……跳躍したアンノウンより高エネルギー反応を確認。】

《《アトランティス・ストライクっ！！》》

白い巨人の飛び蹴りが炸裂し、破壊ロボは無惨な鉄屑に成り果てる……勝利を祝すように、巨人は咆哮した

「すげぇな……ちくしょぉ……（情けねえな、）」

【大丈夫です。】

「？」

ハヤテが人知れず涙を流す中、デルフィはそれを慰める……まるで、落ち込んだ少年を慰める少女のように

【貴方だって強くなれますよ、だって……貴方には守りたい物があるじゃないんですか？】

「っ？！」

デルフィは、初めて（彼女からすれば）会った頃からハヤテは何か焦っていた
それは、いきなりよくわからないところに飛ばされたり、早く帰りたいと言った類の焦りであったが
彼は、自己保身の素振りはおろか、『力の示し方』を理解した上で前回の模擬戦（という名の公開処刑）にも望んでいた
そして、こうして眠りについてこそいるが、『生きている』……醜くとも、生き恥晒そうとも生き残ろうとするのは、彼にとって美徳であり『かつて味わったループ』で学んだ数少ない事の一つだ

「ふて腐れてる場合じゃなぇな……待ってるかは知らないが、帰る場所があるんだ、これほどうれしい事は無い。」

【……その】

「ん？」

【その帰るべき場所には、私が居てもいいですか？】

ヘルメスが、再び立ち上がり地を蹴って浮かび上がる……山吹色の光を翼のように閃かせている
そんな中、ハヤテはデルフィの問いに一瞬固まるが、フッと笑いその問いに答える

「当たり前だ。相棒だろう？」

【はい……ヘルメス、機動系統のシステムオールグリーン。出来れば、白いのは戦いたくありません。】

「そうだな、得策じゃないし……味方っぽいし。」

迷わず、手を挙げて降伏の意を相手に示すが、相手はいっこうに動かない……デルフィがあることに気がつく

【アンノウンから、生命反応消失……なんか、逃げたみたいです。】

「うっし、逃げるぞっ！」

よく考えれば、街で散々暴れた自分達って十分お尋ね者じゃねえかと思い返し、音よりも早くヘルメスは飛び去った

――――――――――――

――――――

――

ヘルメスを郊外に隠そうと思ったが、デルフィがヘルメスに搭載されている『ベクタートラップ』を使い、自身をベクタートラップ内に隠してしまう

ただし、ごく一部以外の事象に目を背けたかった……すっごく目を背けたかった

「便利だな……いや、本当に。」

「本当に便利でしょう？」

自身をＡＩだと言っていたデルフィは、何故か女の子の姿をしているのだ……ちょうど十代中頃の女の子の姿だ

ただ、その姿は黒いレザーと偏った趣味で、逆に彼女をミステリアスさを演出している

「貴方の体と一体になっていた魔導書のリソースに意外と余裕があったので、貴方がヘルメスに乗っているうちに魔導書の官制をする精霊のような感じで無理矢理捩込んでみました。」

「そ、そうなんだ……（もう、話についてけねぇ……）」

えっへんと胸を張る少女に冷や汗を諾々と流しながら考えるハヤテ……デルフィが最初にヘルメスを指して言った言葉『機会仕掛けの神（デウス・マキナ）』に聞き覚えがある気がしたのだ

しかし、思い出そうしても何故か靄のような物がかかり、思い出すのを邪魔する

「顔色悪いですが、どこか怪我でも？」

「い、いやっ？！」

相手がなんであろうと、可愛い女の子がいきなり目の前まで近づき、上目使いで見上げられると……こう、『クル物』がある

心なしか、デルフィが抱きしめるように引っ付く……腐っても、死んでも心は１８歳……断じて（２１）のような者じゃ無いだろうと自らに言い聞かせるが、速まる動悸はおさまらない……顔が赤くなるのを抑えられない

「顔が赤いですが。」

「ち、違う……これはなんと言うかをだなっ？！」

突然の事にうろたえたハヤテの意識は、唐突にブラックアウトする……ハヤテは、デルフィを抱きしめるように、縋るような形で倒

れ込む、ハヤテの体は、まるで光に分解されたように消える
後に残ったのは、デルフィと一つの赤い首輪だけだった

【大丈夫、また会えるから……】

そして、デルフィもまた、本のページのようになって消えた……
そして、ただひとつ首輪だけが……ハヤテを『繋いでいた』鎖が残されていた

―――――――――――――――――――――――――――――

次世代型オービタルフレーム開発計画……オービタルフレームの大半を担うメタトロンをあえて多用せず、要所に使用することでエネルギーの拡散を軽減
爆発的推力と火力を獲得するのが目的である

開発の責任者として、オービタルフレームの母と呼ばれる『レイチェル・S・リンクス』博士が担当
技術に新たなアプローチをする為に、大型移民船団『大和』を束ねる『覇道財閥』から派遣された『ナイア・R・ホテップ』博士も参加している

＞i10166―570＜

次世代型オービタルフレームの開発コードは、次世代型オービタ

ルフレームを開発するきっかけになった青年から出た単語『ヘルメス』を採用
旅人の守護神たるこの名前なら、人類を新たなるステージまで守ってくれるだろう言う祈りも込められている

「ナイア博士、貴女との研究はとても面白かったわ。まるで十歳若返ったみたい。」

「それはよかった。僕としてもコイツを……ヘルメスはどうても作っておきたかったんだ。なにせ宇宙を旅する上で、過剰な力なんてないからね。」

二人の前には、つや消しの黒い装甲を纏い、ハンガーにただずむ一機の機体……闘争と盗み、旅人の守護神とされる神の名を冠する機体『ヘルメス』がいた
大破したアヌビスの残骸を元に、同型機のジェフティから得られたデータをフィードバックされた機体は、まさに操れれば現行最強だろう
ただ、『ある共通点を持つ人物』ではない事には起動すら適わなかった……それは、イレギュラーオービタルフレームと比喩されるアヌビスとジェフティのかつての搭乗者達だった
加えて、そんな彼等でもこの機体はピーキー過ぎて扱えこなせないときたものだ……我が儘娘とリンクス家に比喩されるほどのヘルメス
ヘルメスは、覇道財閥の持つ重力制御技術をふんだんに使われている為、コックピットに乗るランナーへの負荷が限界まで抑えられる設計だ

空間反発を利用して亜光速移動を可能にしている技術『ゼロシフト』でランナーにかかる負荷は尋常ではない
ゼロシフトの使用前提で作られたアヌビスのかつてのランナー『リドリー・ハーディマン』は、自身の肉体を徹底的に改造し、アヌビスに合わせる必要があった程だ
だが、ハヤテは既に全身に改造……いや、まるでメタトロンが彼を守るように染み渡り、文字通り『融合』し、人間でありながら強硬な体を獲得している
彼らは知らないが、ハヤテの体は彼が好きなアニメの主人公のようになってしまっているのは酷い皮肉だろうか……それは、這い寄る混沌ですら分からなかった

「そろそろ、大和との会談が済み、今後どうなるか上が決めているでしょう。」

「だろうね、大半の地球の民は大和に組み込まれるだろうね。　最も、そこに君達は居ないんだろう？」

「いえ、本当はごめん被りたいけど、上のお願いでね……ヘルメスの第一機はこの地に残す事になりそうだけど、引き続き貴女との研究よ。」

「旦那さんが怖そうだねぇ……さて、僕はハヤテ君でも見に行くよ。」

そういって、ナイアは席を立った……ハヤテが倒れてから丸二年、ナイアは暇を見つけては彼の様子をを見に行っていた
良からぬ事を考える輩もいたが、ハヤテと彼女の接点は『ゼロ』

である
大和側の戸籍もなく、太陽系側の戸籍も無い……より、ミステリアスになったハヤテだが、これだけは分かる
『彼は、アーマーンアヌビスを倒した』
のだ、以前のように彼を悪く言うものはおらず、彼は火星圏の技術で蘇生の一途を辿っている……いや、蘇生というより再誕が正しいかも知らないが
「どっちにしろ、英雄扱いには変わりないわね。」
自分の夫もそうであるレイチェルは、コーヒーを一口啜り、無駄な思考を殺して寝ることにした……時間は現地時間で深夜である
愛する夫と子達が待つ部屋へと、スキップしそうな雰囲気で歩き出した
――――――――――――
――――――
――
【脳波……安定、各種器官……正常活動、意識レベル上昇、ハヤテ……おはようございます。】
《おはよう、気分は最悪だけどね。》

気が付いたら、緑色の液体に浸されるとかどこのB級ホラーかと突っ込みたくなる
かつて、『ネクスト』に乗り、『リンクス』をやっていた世界、動力から発生する粒子『コジマ』粒子と言う降り注いだ土地に重度の環境汚染を撒き散らす
おまけに質悪い事に高濃度圧縮をするとまるで水のようになるのだ
それを思い出して戦慄していたのだ……もしかしたら、死んでしまいコジマ漬けであの不毛な世界に帰って来てしまったのではないのかと
恨みや憎しみが再びあの世界に自分を引き寄せたのではないのかと恐怖したが、すぐに解決した
先程のようにデルフィの声が聞こえて来て説明したのだ……ハヤテがアーマーン・アヌビスを打倒した後、凄まじく衰弱した体をなんとかする為に一年と少しの間、こうして医療用のポッドに入れられていたのだと

【すぐに排水します。　服は暫く入院服で我慢してください。】

《了解、助かるよ。》

医療用の溶液が排水され、体に残った水分を拭って入院服を被ろうとするハヤテ……仕草はまるで子供のようであるが、寝起き同然の頭なのだろう
頭を振り、眠気を振り払い状況を常に把握するのに努める……今のハヤテは、『もうひとりのハヤテ』と完全一つの固体へとなった存在である
融合の原因、何故もう一人のハヤテがアーマーン・アヌビスに乗って現れたかは正直分からない……ただ、コレだけは分かった

『誰かが俺の人生を故意に弄繰り回している』
最初思った時は、ほかに説明する為の言葉が無いので扱った言葉だが、今回の件……
『分離事件』で核心を持てた
分離した微分と融合したとたん、ある事を思い出したのだ……俺が行き着く世界全てに
『あの女』がいるのだ
ある時は協力者、ある時は死地から救援を飛ばした奴、そしてある時は俺に『依頼』を持ってきた奴……

「おや、目が覚めたかい？　気分はどうだい？」

「最悪だよ……」

だが、気にしていても話は始まらない……ここは、スルーを決め込むハヤテ、鼻から垂れる緑色の溶液を鼻水を噴く要領で拭う
本調子では無いが、今なら腕立て２０回の後に完全装備＋追加装備での１５ｋｍ走が楽勝だろう……本調子なら、５０回逆立ち腕立ての後に２５ｋｍ走が楽勝で出来ると思う
今度やろうかな？

「うん、バイタル異常なし……二三日したら退院みたいだね。」

「助かりました。　ほっとかれたら多分死んでたし。　流石に二回も死にたかないですよ。」

「フフ、君は本当に片手で数える程度しか死んでないのかな？」

「っ？！」

「フフフ、お大事に。」

薄ら寒い空気を感じ取るが、それは一瞬で消えた……だがそれを気の迷いだ、寝起きだから体が警戒しているのだとハヤテは『思わなかった』

野生の勘が効くほど人間やめてないが、明らかに肌で感じ取った『狂気』はかつての自分の比ではない……正直、逃げ出したいくらい怖かった

逃げなかったのは、まだ下を履いてなかったという間抜けな理由だが

――――――――――――

――――――

――

―新型オービタルフレーム開発メモ―

挨拶早々に機体チェックに細部システムの調整、ヘルメスの開発はそれだけ急がれていた

次世代型オービタルフレームの開発は、今後の人類の命運と一人の少年の命が係っている

そもそも、現在の機械工学に多大な影響を与えたロイド博士の設計したとは言え、なんとも穴だらけな設計だった

操作系については一切触れられておらず、全体のフレームバラン

スと新規兵装の簡単なメモしかなく、とてもではないが一年と少しでは機体は完成しなかっただろう……『とある人物のＤＮＡデータ』と照合したらまともなデータ……『ヘルメス』になったのだ
幸いフレーム構造はアヌビスに近く、フレームだけ残して大破同然な機体を改修したのが『ヘルメス零号機』である
型番は『ＮＯＦ－００　Ｔｙｐｅ－Ａ』……ネクスト・オービタル・フレームの略称で、『Ａ』とは『ＡＮＵＢＩＳ（アヌビス）』の略であり、『ヘルメス』とは総合的なプロジェクト名であり、他にもＪ……『ＪＥＨＵＴＹ（エフティ）』というアヌビスの姉妹機のフレームをベースにした物を現在製作中らしい
ヘルメスは量産前提で開発されているオービタルフレームであるが、俺に受領される零号機はそうでは無いらしく、新型のアンチプロトンリアクターを採用し、さらにそれを最適化する特殊機関を追加する事により全体が効率化され、大電力を吐き出すようになったリアクターにより、故ロイド博士の『メモ』の実現に近づいた
　それに加え、ベクタートラップを利用し空間圧縮を応用して運用されるベクターキャノンのように『空間破砕』するのではなく、敵付近の空間に連鎖的相転移現象を擬似的に発生させる『空間崩壊』を可能とする兵装……というかシステムである『アーマメント・ディストーション』を試験的に採用、運用試験は成功したが、機体負荷が大きく、扱いとしてはリミッターをかけて運用
基本的にバースト（リアクターのリミッターを少し開放する事で、普段よりも高い出力で攻撃が可能となるシステム）時に自動で起動するようになっており、打ち出したバーストショットは空間を巻き込みながら敵陣を突き進み、しまいには敵に着弾したらそこを中心に空間圧縮をして破壊するなんとも恐ろしい兵器が生まれてしまった……？
　思い出すのはやめよう、アレは悪い夢だったんだ

――
――――
――――――――
――――――――――
《起動テスト終了……お疲れ様でした。》
「ありがとう、デルフィ……異常は？」
【ありません、機体との同調率に貴方の身体に異常は見られませんでした。】

あまりにも、生身に近いから忘れていたが、体の４割近くがメタトロンで出来ている俺の体は、いつ何が起きても不思議じゃなかったたとえば、いきなりメタトロンの暴走でベクタートラップが暴発やら、最悪は……考えたくも無い
だが、その杞憂も無駄のようだ

「まあ、コレなら何とか戦線復帰は叶いそうだな。」

【……】

「ん、どうした？」

デルフィの様子が少しおかしい……なんというか、最近黙っていることが多い
特に、戦場に復帰する事について話すといつもこんな反応が返ってくる

何故かは知らないが、オペレーターからの通信でも噛み殺したような息が聞こえる
あ、切れた

【ハヤテ……ちょっと、良いですか？】

「ん、なんだよ。　いきなり改まって。」

何かを決意したのか、デルフィのパーソナル画面のパラメータが上昇する
両手のコントローラーから、デルフィの『感情』が感じる
不安のような……悲しみのような

【ハヤテ、貴方はもう戦わない方ｇ「ダメだ。」何故ですかっ？！】

デルフィの言葉を遮る様に言い放つハヤテ……コントローラー越しに感じたハヤテの感情は、深い悲しみと……確かな『怒り』があった
何か、別の対象に対する怒りではなく確かなハヤテがハヤテに対する……『自分自身』への怒りだった
正直、理由は容易に想像出来る……たとえ、傲慢だと彼は罵られてもこの怒りは捨てないだろう……この『仲間を救えなかった怒り』は彼にとって枷であり、一歩踏みとどまる為の『線引き』なのかもしれない

「俺さ……一杯、沢山の人を殺したろう？」

【それは……】

「だからな、そいつらの為に『生きなければいけない』んだとさ……俺はな。」

だから、その話おしまいっ！！　とハヤテは会話を打ち切り、機体を……ヘルメスを機体ハンガーに向けて飛ばした
迷いを振り切るように……機体から伸びた山吹の翼は、完全に彼の翼となっていた

――――――――――――
――――――
――

計画……大規模な移民計画が進行していた
覇道財閥が所有する平たく言えば『時を越える技術』を所有していたその名は『銀の鍵』……時空間を捻じ曲げ、超える術であるようだが、どうもにも解せない部分がある……それは、『何故他者を助けるのか』である
それは、実に簡単な話だった最初、ハヤテは覇道財閥を一種の『企業』として見ていた……ただ、それが誤りだった……彼らは企業ではなく、ひとつの『国』のように発展していたのだ
　これはとても、とても大きな違いだ……企業は、己の利益を追求する
それは雇っている者達を養い、次に繋げる為だ
だが、『国』は違う……国は、経済全体を見回し、民草の経済状況

を把握し、それらを正しく導くものを指す
故に、彼らはこの世界にさえ手を伸ばし、救済しようというのだ……普通なら、ハヤテでさえ『偽善者』と笑い飛ばしていたところだが、財閥のトップ『覇道（ハドウ）　瑠璃（ルリ）』の目を見たらその考えはすぐさま吹き飛んだ
　その女……いや、人間の目は明らかに据わっており、そして輝いていた
だから、地球政府もバフラムも彼らに賛同し、こうして次世代型オービタルフレームの開発に心血注いでいるのだ
孤独な宇宙という海を漂う民を守るための盾『ヘルメス』を彼らの為に打ち鍛えているのだ
　そしてそんな中、世界の救世主は俺にこう言った……『力を貸してほしい』と

　そこまで言われて力を貸さないほど、ハヤテは人間辞めてない……本来、この性格が災いして色々と巻き込まれているのだろう
主に傭兵やら衛士やら……何かしら命を扱う、命を張る職をしているとたまに見る幻覚が……ありきたりな幻覚が見える
両手が『血に塗れている』のだ、それが自分が守りきれなかったのか、奪った命かは知らないが、とにかくこびり付いているのだ
それは拭っても拭っても落ちず、心を巻き込んで、絡みとって離さない……赤黒い、まるで混沌のような血
それを少しでも紛らわせる為に戦って来た……血を血で上塗り、断末魔の狂想曲を鳴らしっぱなしにし、気が既に狂っていたとしても生きる為にその刃を振るい、願われれば助け、頼まれたら滅ぼす……まるで『滑稽な操り人形（デウス・マキナ）』だ
　だが、分かっていても今更止められない、止まるつもりも微塵もない……なぜなら、『気にし無い事が出来なくなった』からだ……
もう、グダグダと考えるのは辞めよう……あるのは唯、混沌の闇だ
　要するに、何が良いたいかというと……

「実験体なんだよなこれがまた……」

どんなに面倒な言葉で取り繕うとも、結局は実験体には変わりない
どのような実験かといったら……ハヤテの時間を『ド・マリニーの時計』で停止、それをヘルメスと共に特殊なコンテナに詰めて埋葬
約一億年後の世界を『銀の鍵』で特定し、後は皆でタイムリープって簡単な作業だ……簡単にいえば、約一億年寝てろって事みたいだ
幸い、時計で時間停止する技術は確立されていて、コールドスリープ程危険は無いとの事

「生きてりゃ御の字かな……（まあ、帰るのに必要だろうし）」

《そうだね……さて、死なずの英雄さん。　なにか言い残すことは？》

「生きてるし、どうせ生き残るだろうから必要無い。　デルフィ、始めてくれ……デルフィ？」

時間凍結による身体保存実験の開始と次元ビーコンの保存は全てハヤテとデルフィにタイミングが一任されている
結局、前者が失敗しても後者は成功するため問題は無いのだが、早くしないとハヤテの決心が揺るぎかねない

【ハヤテ……】

「だからなんだよ……さっさと済ませちまおう。」

【……はぃ、絶対に死なないで下さいね??】

「安心しろ、億の旅団規模の軍勢から逃げおおせたんだ。　だから、また生き残るよ……おやすみ。」

【はい……おやすみなさい。】

目を閉じ、仮眠に入る時の穏やかな気分のように……ハヤテは眠りについた
この実験の前に、ぶっ続けで鈍った体を作り込み、機体の挙動を体に叩き込み、己を一本の刀とする
傭兵時代も、衛士時代も……変わらず続けた事だけに淀み無く行われたものは、バフラム軍の軍人さえ青ざめる程に過酷だった
別に特殊な性癖があった訳では無いが、機体のGに体が対応する為に自然と体を鍛えていたら酷いメニューになっただけの話だ……生身で１２Gを本気で受け止めようとしたが周りに止められ、仕方なく８Gに耐えられる、最大で９Gを耐えられる体を作り込むのに凄まじい血と汗が流れた
そんな疲れた体は、心地良い機体のシートに包まれて安心したのかあっさりと寝た……デルフィは、仕方なく『ド・マリニーの時計』を起動し、ハヤテの身体時間を停止し、保存する……
ビーコンが起動した事により、移民船団はタイムリープを開始……
後に残ったのは、ハヤテとそれを守るデルフィだけだった……
……

約一億年と数千年後……

人が消えた星は、徐々に再生を始めた……ビル郡は荒廃、倒壊して草木が生い茂り
生命が誕生し滅び、再び人の世がやって来ていた……ただ、その世界は戦争が蔓延していた……前の世界よりも戦争があちこちで起き、傭兵が生まれ、秩序が壊れた……そして、世界は巡りハヤテが居た世界が生まれた
地球を追われた民は、地球に復讐を誓い、人心を欺き操り、『統治』された『歪んだ秩序』があった
それは地球にも言えた話だ……政府は民の一部を追いやった事実を隠蔽し、秘匿して無かった事にした
……偽りが蔓延する世界に、ハヤテは目が覚めた

【計画を第二段階に以降……ド・マリニーの時計を停止……停止確認完了】

「ん……く……ふぁあ……おはよう。」

【おはようございます。　早速ですが、戦闘行動を開始します。】

「……は？」

辺りが振動しだす……同時に感じる浮遊感……山吹の光の筋が目の前に走り、この時代に彼の翼……『ヘルメス』の翼が開く
翼を担うスラスターからは山吹の光が翼のように展開され、ヘルメスを囲い保護していたコンテナが吹き飛ぶ
大地に未だに埋没しているメタトロンが反応したのか、山吹の光の筋がヘルメスを歓迎するように瞬く

「つぅ……いきなりなんだっ？！」

【四時の方向、大規模の戦闘を確認……その中にナデシコの反応を探知】

＞ｉ１０１６８―５７０＜

「ナデシコ……やっべ、ルリちゃん達が危ないっ？！」

【急ぎましょう、ゼロシフトによる亜光速移動は現在システムの再起動中の為使用できません。妥協作として、高機動モードに移行します。】

「任せた、いくぞっ！！」

ヘルメスが、ナデシコに向けて飛び立つ……本来の目的と依頼を

果たす為に……そして

「待っていろよ……みんなっ！」

守るものの為に力を使うと決めたから……今まで、助けたくても、
守りたくても守れなかった命の為に……ハヤテは空を飛ぶ
もう、ただ飛ぶだけの自由気ままの渡り鳥では無いのだから

第十五羽　起きたら遅刻確定とかよくあるよね（前書き）

やっと……更新できたぁ……

第十五羽　起きたら遅刻確定とかよくあるよね

突如現れた黒い機体……ある時はレーザーの偏差射撃を放ち、ある時は敵機を掴んで他の敵機に投げ付け、爆破し圧倒していく
その姿、まさに一騎当千、敵は瞬く間にその姿をただの鉄屑に変えられていく
たった一機の悪魔……鋼の死神【ヘルメス】によって

「すごい・・・・・・なんて火力なの・・・・・・」

「敵、全滅……交戦時間、約3分っ？！」

その悪魔は辺りを警戒するような仕草をした後、何かに気が付いたのか明後日の方向を注視していた……無数の蝗の大群のような木星トカゲの無人兵器郡が居た……空を覆い、地球を襲った比ではない数の木星トカゲが

「く、グラビティブラストでけん制を《今は逃げることだけを考えろ》っ？！」

「発信源……どうやら、あの機体からのようですっ！」

艦長……ユリカの質問にメグミが答える、一瞬だがルリの思考は止まっていたのだ
聞いただけで分かった……寝起きの時にたまに聞く不機嫌な声

やる気こそ感じるが、機嫌が物凄く悪そうである……そんな声
死んだはずの、ハヤテの声であった

《物量が違いすぎる……下手な支援砲撃打たれる位なら、尻尾巻いて逃げろっ！》

ふざけた喋り方もあるが、この数ヶ月を無駄扱いされるようで、馬鹿にされたようで少し頭に来る……が、こちらが力不足なのは否めない
艦載機であるエステバリスの殆どは出払い、大気圏内では出力が著しく低下する今の相転移エンジンでは、強固なディストーションフィールドは期待できず、まさに丸腰なのは明白
後退命令をしようとした瞬間、自分達とは別方向から砲撃が放たれる
かつて、チューリップの調査の際に地球から姿を消した戦艦『クロッカス』であった

《こちらクロッカス、フクベだ。今のうちにナデシコを下がらせるんだっ！》

「っ？！　了解っ！　機首反転、このままクロッカスが元居たポイントまで下がりますっ！」

ナデシコはチューリップに急いだ……あくまでも希望的な観測でしか無いが、戦艦クロッカスはチューリップに取り込まれて消息を経ったと生き残りが報告していた

なら、このチューリップとほかの場所のチューリップが繋がっていると考えたのだ
ただ、それでぱっと見ただけで分かるほどに朽ち果てたクロッカスを見て、自分達もああなるのではないのかと震えたが、すぐに振り切るユリカ
どの道、この量の部隊を相手にしていてはまた先程のように貫かれるのがオチだ
そもそも、黒い機体が味方とは限らないのだ

《チューリップの方向を3D表記のマーカーを送りました。　急いでください。》

「この声……ミナトさん、お願いしますっ！」

「りょーかいっ♪　面舵いっぱーいってね♪」

クロッカスが来た方向に進むナデシコ……後退では無く前進、つまり主砲であるグラビティブラスト発振部を向けていない全力の逃避
ナデシコにかせられた任務から考えれば、本音言ってしまえばルリが研究施設から大体のデータをサルベージしてしまった為にほぼ完遂してしまった
元来、火星の民は二の次であり大義名分……ユリカはそれを十分承知していたし、その為のプランを何個も想定していたが、あまりにも戦力差がありすぎる
誰であろうと、この戦力差だったら尻尾巻いて逃げたところで誰も咎めはしない
なにせ、彼が相手にしているのは『木星トカゲ』では『無い』のだから

――――――――――――――

――――――

――

ハヤテの心境としては複雑だった……半場奇襲で眠らされ、気が付いたら元の世界……いや、もう何処が『元の世界』かなんかわからないのだが、自分が受けた依頼がある世界なのだろうと思う

これは果たして、偶然……なのだろうか？

ハヤテには考えれば考えただけ混乱するだけで無駄だと判断し、機体をハンガーらしき……まるで棺桶のようなコンテナに詰まれていた時は戦慄した

実はまた殺されたのではないのだろうかとか、全て寝オチだったら嬉しいなぁ～などと考えていたが数秒で消滅した

理由は乗っていた機体

もはや見馴れ、慣れ親しんだオービタルフレームの『コックピット』であった

そして、明らかに変わった体である……見た目や質感、重さは生身と大差ないが、体の目立たない部分に筋のようなものが通っている機械の体になるなんて……強化人間のように体を弄って神経を光ファイバー化して反応速度をあげたり、脳髄にレーダーを仕込んで機体のレーダーに頼らなくても良くしたり……そういった物では無く70％以上が機械、つまり半分以上人間辞めており、辞表を出している訳でして……本当、どうしてこうなった

【嘆いている暇は一切ありません、敵増援確認……今度は指揮官クラスのマミーヘッドにサイクロプスも確認……どうやら、スタックを組んで戦力を増強しているようです。】

「そうかい、じぁセーフティーシステムを解除しようか？　全力で戦ってみたい……全力でな。」

【了解、システム復旧率もちょうど９８％の為、セーフティーシステムを解除……アンチプロトンリアクター及びサブジェネレーターをリンク……エネルギー安定、いけます。】

両手を広げ、掌を敵に向けるヘルメス……有り得ない角度で屈折するレーザーを放つ姿はその姿はまるで、悪魔のように見えたとチューリップに突入したナデシコクルーは語っていた

――――――――――――――――――――――――――――

チューリップに喰われたナデシコを見送ったヘルメスと戦艦クロッカスは、残敵を掃討する為に動いていた
クロッカスのかろうじて生きていた主砲で敵をまとめ、ヘルメスのホーミングするレーザーで焼き尽くす
旅人の守護神の名に冠する機体は、名前負けしない活躍を見せていた

【残敵の全滅を確認……貴方には所詮、烏合の衆でしたね。】

「いや、ヘルメスが可笑しいだけだから……なんだよティンダロスって、アヌビスの頃も酷かったけど、これって悪化してるじゃないか……」

ＯＦヘルメスに搭載された基本武装の一つ、ホーミングレーザー『ティンダロス』……直線で凄まじい速度で敵を囲い込み、そこから有り得ない角度で屈折して敵を貫く異形の槍である

【乗り始めで約三週間……早いものですね、もうあらかたマスターしたのでは？】

「いや、対有人ＯＦ戦とかしてないしな……それより、あの戦艦ヤバイくないか？」

フラフラと墜落寸前の戦艦に近付くヘルメス……戦闘の補助や救助活動などを補助するサブウェポンの一つ『グラブ』を用いて、戦艦をひん掴む

見た目は１５ｍとエステバリスより大きいのだが、機動力などが頭一つ以上飛び抜けている……その気になれば、戦艦十隻程なら数分で落とすだろう

無論、それは現行技術が数年先の未来……【オービタルフレームが稼動していた時代】を指すのだが、そういった異常とも言える技術が作り出した不沈艦に相応しい戦艦をだが

そんな、どうでもいい事を考えていたハヤテは、いつの間にかデルフィがハッキングしていた戦艦のシステムにアクセスし、内部を確認する

反応は二つ……多分、片方はフクベ提督だろうけど、もう片方は……

【艦より通信……こちらと話がしたいようです。】

「ああ、繋いでくれ……願ったりだ。」

山吹の光の筋が走り、そして帰ってくる……すると、ヘルメスのコックピット内コンソールにフクベ提督と……ヤマダ・ガイ？の姿が現れる

なんとまあ意外な組み合わせだと呟きながら、平静を保って二人を見る

《まずは、ナデシコの脱出を手伝ってくれた事に感謝する……そして、生きていたのだな……ハヤテ君。》

「ええ、もうまともな体ではありませんがまあ……生きているのかな？　なんとも面倒な事情がございまして。」

《いんや、気にするこったねぇっ！！　撃墜された奴が新型機や旧式をパワーアップさせた機体で帰ってくる……正に王道っ！！　それに、面倒な事情だが何だがしらねぇが、とりあえず会って話をしようぜ。》

「はぁ……りょーかい。」

【着地シークエンスに入ります……グラブの維持をしながらは大変です。】

「ありがとう、さて……行こうか？」

防護服を兼ねたスーツのヘルメットを起動し、頭を覆うとコック

ピットから出るハヤテ
すると、降り途端にヘルメスの姿は腰を中心に捻れる様に消え去ってしまった
自身のベクタートラップ（特殊合金メタトロンの持つ、スピンとエネルギーを与えた際に発生する空間圧縮現象の応用）により自身を最小化し、ハヤテの側にくっついていくのだ
　機体の機能が正常に作動しているのを確認すると、戦艦内部に向けてハヤテは歩き出す
悪友と言って差し支えない奴に会いに行くために

――――――――――――――――――――――――――――

　オービタルフレームのパイロット【フレームランナー】には時として、単独行動の任務が課せられる事が多いらしい
本来は、地球と火星の戦争を一変させる為に作られた【質の兵器】である
集団戦闘は無人オービタルフレームの役割であり、有人オービタルフレームは強襲をメインに行動する事が多い
　よって、フレームランナーのパイロットスーツには様々な機能を持たせる
例を挙げるなら
・体温調整
・酸素管理
・生体反応レーダー
・機体同期
などなど……
とにかく、軍人として訓練されたフレームランナーは貴重な為、維持費を惜しまないんだとか

【どうやら、この部屋のようです。】

「みたいだな……さて、薮蛇だけは勘弁願いたいものだが……どれ？」

フシュッと簡素な音を立ててブリッジに続く自動ドアが開く
そこには、疲れた様子のフクベ提督とイラついてる様子のダイゴウジ・ジロウ？が居た

「遅.i「提督、お久しぶりです。」お前なぁ……」

「まあ、二人共……落ち着いて状況を整理しようじゃないか？」

突っ掛かりそうなガイを無視し、フクベ提督に話を振るハヤテ……プッツン行ってるガイをフクベ提督が嗜め、話を始める
ずっと気にしていたが、時間的にどうやらハヤテが行方不明になってから約二週間たっているようだ
その間、生き残りの火星の民と俺をずっと探していたらしい……多分、案の定ステルスが効きまくってるオービタルフレームのコンテナのおかげで見つからなかったみたいだ
何故なら、フクベ提督が指した捜索ポイントの中にいくつか側を通り掛かった部分があったからだ
本当に惜しい……時間の流れとは恐ろしく、コンテナには土が蓄積してその上からナノマシンがテラフォーミングを行った為、全く違和感が無かったようだ

「いかん、無性に悲しくなって来た……」

「そうだな……」

「さ、さて……話を戻そうか。」

仲間に気付いてもらえない主人公って虚しいね……なんて嘲笑が聞こえて来たが無視する

今の問題は、火星の民をどうするかだ

力なら申し分ない、これ以上の力を求めたら本当に【デウス・マキナ（機械仕掛けの神）】のような奴が必要になってくる

所謂過剰戦力という奴なのだ

「にしても、聞いた話じゃ一回救出の件を蹴られたんだろう？」

「ああ、ムカつく程に正論だから何も言えなかったらしい……お前が撃墜されて地に足付いてなかったってのもあるだろうけどよ。」

「……そうか、すまなかったな……」

今、この場に残ったのはハヤテにガイ、そしてフクベ提督……実に詰んでいる

ガイは交渉事は論外、フクベ提督は火星の木星トカゲ襲撃の際の過失がある

ハヤテは……よくわからない

ただ、変な化学反応が起こりそうなのは容易に考えつく

何せ、戦争で飯を食う傭兵だ……レイヴンは自由の翼と言うのが世の中の認知だ
自由気ままの自由業と取る人は多いが、本来は【あらゆる束縛を受けないフリーの立場】が正しいのだ
所謂、自由枠……どの立場からも物を見、語ることを許された存在である
故に、現在の排他的な今の火星の民が話を聞いてくれるか微妙なのだ
ゴシップ記事を分かっていて読むような感覚ならまだマシだ……最悪、話すら聞いてもらえないだろう

「まあ、行ってみれば分かりますかね……はあ、面倒が湯水の如く湧き出るよ……」

「苦労とは、後に生きてくるものだ……まあ、こんな老いぼれには後があるかわからんがね。」

ため息が支配する中、戦艦……クロッカスは旧コロニー・ユートピアに向けて進む……マジと書いて真剣と読むほど疲れた雰囲気を醸し出しながら

――――――――――――――――――――――――――――――――

コロニー・ユートピア……中は壮絶の一言だった
中はバッタなどの小型種に荒らされ、家は潰され、外壁は削られ、白骨となった死体が腐臭を巻き散らしながら野ざらしになっている

「あら、また客人？」

「こんにちは、レイヴンのハヤテです。」

相手は、少し荒れた金髪の女性、身長は俺よりす……少し高く、顔は人形のように整っている
なんつうか、どっかで見たことあるような気がするな……いかん、寝る前の記憶が少し曖昧になっているな……本当に機械の体なのかよコレ……不完全な００ユニットとかの方が説得力を感じるな

内心、自身の神秘に呆れつつ話を進める……
自分達は火星の民を助けに来た事
身柄は完全中立を誓い、今だ不動のレイヴンズ・アークが面倒を見る事
希望するなら、アーク系列や企業連系列の企業に雇用を探す事
そして……

「あんた達は絶対に護ると誓う……狂人紛いの俺を救ってくれた友と我が……コジマの名に誓って。」

「コジマ……か、なら信用せざる得ないわね。」

「（あ、あっさりしてるな……）」

無表情な女性の表情が急に軟化する……ちょうど【コジマ】の名を聞いた辺りから
コジマのネームバリューなのだろうか？

「驚いた顔をしてるわね……まあ、早い話がこの火星をテラフォーミングしたナノマシンの基本骨子を作り上げた人物はコジマの名を持っていただけの話よ。」

「マジか……ハヤテの父ちゃんはスゲェな。　ロボットだけじゃなくてナノマシンも作っちまうなんてよ。」

ハヤテも内心驚きである、何せ両親が幼少期に居なかった理由が火星でテラフォーミングに携わっていたなんて知る機会が無かったのだ

ハヤテの父……ユウイチロウは、自分の趣味全開の研究成果は自慢もとい教えはするが、このような【誰かの為の研究成果】を教えたがらない

理由は単純に恥ずかしいのだろうが

だから、親が褒められていると物凄い違和感に襲われる

「まあ、ガキの頃にろくに家に居なかった二人なら有り得る……か。」

「あら、コジマ博士は家庭を犠牲にするタイプだったの……まあ、あの狂人じみた性格なら有り得そうね……あ。」

「……どうした？」

ハヤテも女性も仲良く談笑ムードの為に、女性の護衛もまったり

としていた
そんな中、忘れていた事を突如思い出したような声を出す
いきなりどうしたんだ？　とやる気なさ気に周りの人も女性の方を見る

「自己紹介してないじゃない私達……失念してたわ。」

「確かに……変に話が弾むせいで忘れていたよ。」

ただし、話が弾むといってもある特定の人物の悪口を言うと言う意味でだが……二人共、それなりに怨み迄行かなくとも不満はいくらでもある

「改めて名乗るわ、私はイネス・フレサンジュ……貴方のご両親の助手の一人だった者よ。」

「俺の名はハヤテ……悪いが、今は腐っても仕事中だから真名を名乗る事は、レイヴンズ・アークのルール上出来ないんだ……すまん。」

「別に、気にしてないわ。」

やったらとドライな人だなぁ……とハヤテは思いながらも握手をする
話は意外にもアッサリと上手く行ってしまった
なんでも、先程のヘルメスの闘いを見て考えを改めたらしい

「それにしてもヘルメスね……エジプトの神話……だったかしら？
アヌビスとよく似た性質を持っているにも関わらず、違う側面を持つ神ね。」

「なんでも、旅人の守護神らしい……まあ、神話とかに詳しくないからなんとも言えないけど。」

「あら、学問の好き嫌いは良くないわ……自身の中に眠る、物事の真理から遠ざかってしまうわよ？」

「まあ、わかってるんだけどよ……」

【ハヤテ、生きているウーレンベックカタパルトの位置を特定しました。】

「ん？　おお！　流石だぞデルフィっ！！」

「あら、良いニュース？」

後ろからベクタートラップで収縮していたヘルメスの中にいるデルフィから連絡が入る……本来、ベクタートラップ内部の機器は動作は出来ないが、ハヤテのＩＦＳの【補助脳】と同期を行うことでそれをクリアした
メタトロンコンピュータのように人間の脳並に動作する訳ではないが、それでも人間の脳をトレースして出来た補助脳なら、デルフィは十分動作出来た
普段使わないものを使うだけだとハヤテも了承している為問題は無

い……強いて言うなら、たまに襲う頭痛だろう……未だに補助脳と本体の脳の同期箇所が過剰動作で痛むのだ
　さて、そんな代償を払いつつ行っていたのは先ほどもデルフィも言っていた

【生きているウーレンベックカタパルトの検索】

である
ウーレンベックカタパルトとは、メタトロンの持つスピン（回転）とエネルギーを与えた際に起こる空間圧縮現象をベクタートラップよりも大規模に、指向性も持たせて圧縮することで物体を一定方向に亜光速で発射できるのだ
ざっくばらんに言うと、圧縮された空間が戻ろうとする作用を利用したパチンコのようなものなのだ

「帰還の目処が立ったんだ。　あんたらを無事に護送できそうだよ。」

「へぇ、気になるわね。」

「それは観てからのお楽しみさ。」

　それは楽しみね……そうイネスは呟き、歩き出す……どうやら、ネルガル重工よりもレイヴンズ・アークならＯＫのようだ
みな、冷凍庫みたいなクロッカスに不平を洩らしながらも、その表情は和らいでいた

第十五羽　起きたら遅刻確定とかよくあるよね（後書き）

どうも、友人にお前前世がアラブ系列の邪神教団の人柱（生贄）じゃねぇの（笑）
とか話したり、デビルメイクライ４したり、Ａｃｅ：Ｒしたり、メダロット４やフェイト／エクストラしたり武装神姫ＢＭをしたりしてました。
はい、単に話のネタを肥やしてました……お陰でかなりの構想を練れましたよ。
だが、だが……学校が始まってしまった
？ｏｒｚ
また、更新できない日々が続きそうです……マジ申し訳ない

第十六羽　兆しと策謀と嘲笑と

戦艦クロッカスは、ユートピアコロニーに着艦した……と言うか、動力系の大半が壊れていた為ほぼ不時着で、ハヤテの駆るＯＦ（オービタルフレーム）【ヘルメス】により無理矢理に牽引されて来たのだが

「か、かなり強引になっちまったな……」
《ガイ、君が言っても何一つ説得力無いのが愉快だね？》

普段から、かなり強引に話を進める癖がナデシコ時代に露見しているダイゴウジ・ガイことヤマダ・ジロウ
勧善懲悪は好きだが、リアルをちゃんと見ているリアリストでもある事も俺は知っている
彼は、理想を語る事はあってもそれに押し潰される事は無い
一度、押し潰された身として彼は素直に凄いと賞賛できる
どうすれば理想に近づけるか、
あわよくば実現できるかを模索し、同時に安全策も張っておく抜目ない性格でもある

《ん～まあ、とにかく降りようか？》
「そうだな、フクベのおやっさんは俺が背負って降りるから、警戒を怠らないでくれよな。」
《ああ、任された。》

ムカつく事この上ないほど明るく、黄昏れた空にヘルメスはツイ

ンアイ式のカメラを走らせる
凄まじい演算力を誇るメタトロン・コンピュータは人間の脳髄と同じような構造になっており、高い認識力と応用が効く回路を逐一作り変え修正、発展して行くコンピュータである
物理演算から、簡単かつ限定的な未来予測も可能なものだ
機体のスペックをフルに使い、警戒を始める

「悪いが、先行くぜ。」
《ああ、大丈夫そうなら行くよ。》

外部へのスピーカーを使い、ガイの言葉に返答する
警戒とか言っているが、この間のドンパチでかなりの数のバッタやカトンポ達が減ったようで、反応は少ない
『それが物である以上、無限とは存在しえない』とは父のいった言葉だろうか……
ハヤテも索敵を済ませ、二人の後を追う為に駆け出す

――――――――――――――――
――――――
――

スラム街……ユートピアコロニー内部を一言で言うならこの言葉がピッタリだろう
バラック（掘っ建て小屋）同士が支え合って立って下り、昔の長屋のようだ

「凄いもんだな……」

レイヴンからリンクスへ……かつて、リンクス戦争があった世界での光景を思い出す
企業が人民を支配、管理している世界でオーメル・サイエンスという企業の管理しているコロニーは貧富の差が激しかった
働けない者は食うべからずを地で行く場所で、働ける者は清潔な日の当たる場所に、そうでない者は日の当たらず不衛生な路地裏で残飯にかじりついて生きていたようだ
そのせいで、人種差別のように働ける者達の一部は働けない者を虐げていた
最も、空中に聳えるように存在していたプラットフォーム『クレイドル』が完成してからは、貧富の差は悪い意味で解決していたな……止そう、気分が悪くなって来た

「あんちゃん、よそ者だな?」
「あ?」

思考に没頭していたら、テンプレートのような柄の悪い三人組に絡まれた
珍しく理性的な思考を中断させられたせいで機嫌が悪くなった俺は、本気で睨み返してしまう
男の一人がナイフを持っているが震えており、残りの二人は鉄パイプを持っている……だが、こちらはパイロットスーツの完全装備
ふとももにあるナイフシースからナイフを抜くか抜かないかで考えていて、ガタガタ震える三人組にどちらが悪いかとか考えることもなく可哀相になって来た

「はぁ……アンタらが恐喝やかつあげするのは勝手だが、そんな生まれたての小鹿みたいに震えていたらどちらが狩人か分からないぞ？」
「う、うるせぇっ！！」

ナイフを持っている男は、一直線の分かりやすい軌道で突っ込んで来た
サイドステップで男の右側に手早く回り込むと、突き出したナイフを奪い、男を仲間らしい二人に向かって投げる
ちょうど、頭を弾頭のように投げたからさながら人間ミサイルというやつだろうか？
どこかで、木連式柔と呼ばれているのによく似た技術だった

「「「くぼっ？！」」」
「いっちょあがりって奴だな。」
「ひ、ひいっ……」

パンパンと手から埃を払い、ボロボロで倒れ伏している三人組の前に仁王立ちをする
怯み、くじけた三人組は、謝りながらさっていった
その様子を、物影で見ている男がいた……その男は、嘲笑を浮かべながら去っていった
燃え盛る三つ目を湛えながら

――――――――――――

――――――
――

「（集合場所を決めるのを忘れていた……マズったなこりゃ）」

初歩的なミスした事に気が付き、やや落ち込むハヤテ……さてはてどうしたものかと思考していると、バラックの屋根にいる少女に目が行く
トタン屋根にいる時点でツッコミをいれたいが、少女の容姿に目が行ってツッコミを忘れた
骨張った体、お伽話のエルフのような耳……何も写してないような暗い瞳
何故か、神経の裏側をガリガリと削られるような不快な……官能的な気分が頭を支配する

「おいアンタ、トタン屋根は危ないぞ？」
「……」
「む、無視ですか……」

明後日の方向を向いたまま、だらし無くトタン屋根にいる少女……何かが可笑しい、まるで世界を■めているような感じがする
不意に少女の視線を感じ、そちらを見たら……何もいなかった
すっぽりと抜け落ちたようではなく、始めから居なかった

「な……なんだった？」

あれは、人では無かった……もっと冒涜的な、名伏しがたき何かだった
茫然自失していたハヤテの耳に、聞き慣れた声が聞こえた

「おいハヤテっ！　どこ行ってたんだよ、心配したぞっ！」
「わ、悪い……今行くよ。」

活気あるガイの声に、自身を取り戻したハヤテはガイについていく……やはり、後ろで誰かが嘲笑していた
くどく、冒涜的で、官能的で、殺意を伴った吐き気をもよおす三つの燃え盛る目をハヤテに向けながら

「フフ……やはり、邪と親和性が高いね……引きこもりのヴルトゥームを引き寄せるなんて、誇っていいよハヤテ君……ああ、早く君と愛（殺）し合いたいよ。」

三つ目は……凛々しい男の姿から、見る者全てを魅了し、虜にするような容姿と笑顔で再び闇に消えていった
その姿は、ある時代で『ナイア・R・ホテップ』博士と呼ばれていた姿だった

――――――――――――――――――――――――

大量の本と散乱とした書類……まるで父の書斎に、始めて迷い込

んだときのような気持ちになった
本ひとつひとつから感じる威圧感は、年期が入っている事を匂わせる
　そんな空間に、不釣り合いな程に美しいと形容させるであろう金髪ブロンドの女性が居た
射殺すような視線には、知性を
値踏みするように動く食指からは野性を
悪くはない、寧ろいい部類に入る人間だった
性格が合えばとことん付き合う仲になるだろうが、逆は激しく殺し合う仲になるだろう
そんな女性が、［イネス・フレサンジュ］だった
仲に関しては悪くはないだろう、父に対する不平不満はあっても何故か強く言えずこき使われ、キチ〇イじみた発想に辟易しつつも納得してしまう難儀な性格が合ったのだろう
だが、部屋の隅……主に背後や後頭部の方向から凄まじい圧力を伴った視線を涼しく流しながら彼女と話すのは、中々骨が折れた

「それにしても、教授の一人息子が貴方とはね……ボソッ（かなり、皮肉な運命ね……）」
「ん？　……何か？」
「いいえ、貴方がただ素直なガキではない事を理解に苦しんでいるだけよ。　ＩＱ１３０もあればなんでも出来る気がするのだけど？」
「それはまあ……環境って奴ですよ。」

　強引な話の路線切り替えだが、これくらいしなければ話の流れは変わらないだろうとイネスは考えた
独り言に対してやたら耳が良い……きっと地獄耳は母親譲りなのだろう

「さて、ナデシコのスペック……いえ、ネルガルは信用ならないけど、貴方は信用出来そうかしら？」
「安全は保証出来るが、乗り心地は保証しかねますけどね。」

何を当然の事を聞いているだと言わんばかりにハヤテは肩を竦める
腹の探り合いまだ慣れていない以上、あまり突っ込まれないように
牽制を打つのもまた、交渉術の一つだ

「なら問題無いけど……どうするわけ？此処から地球までかなりの年月がかかるわよ？」
「それを解決するための秘策……と言うか奇策がありますよ……とびっきりの奴がね。」

微笑を浮かべ、ハヤテはただ手を差し伸べた
それは、単に握手を求めただけなのに
イネスには何処か邪悪窮まりない外なる神との契約のように見えた

―――――――――――――――――――――――――

凍てついたクロッカスに有りったけの毛布を持ち込み対策とは言い難いお粗末な状況だが、ナデシコを蹴った手前、強く言えなかったようだ
姿勢制御以外の事が出来なくなったクロッカスを、ヘルメスが引っつかんで持ち上げる……１５ｍ級の機動兵器が何故戦艦持ち上げられるんだと誰も突っ込まない事にしたが

【間もなく、惑星フォボスです……にしても意外ですね、何も仕掛けてこないなんて。】
「いや、仕掛けてくても仕掛けられないんだろう……ヘルメスのせいで。」
【ヘルメスの広域欺瞞能力は可笑しい事がよくわかりましたよ……何を想定してこれほどの極端な性能の機体を製作したんでしょうねナイア博士は？】
「さあな……もしかしたら、神だったりしたりして……っち、待ち伏せかっ？！」

惑星フォボスから、大量の無人ＯＦが湧いて出て来る
ラプターにマミーヘッド、サイクロプス等々、有りったけのＯＦが湧いて来る
……だが、そのどれもが攻撃の意志を示さず、まるでフォボスの入口まで導くように左右に並んでいる

【思ったよりも歓迎されているみたいですね。】
「さぁて……薮を突いて何が出るか、警戒は怠るなよ？」
【了解、警戒を維持しつつ進みましょう。】

クロッカスを牽引して来たヘルメスが衛星フォボスの前に着くと、突如岩がひび割れ、金属質のゲートが現れる
ゲートのボルトが回転しながらロックを解除し、ゲートを解放する
中は薄暗く、誘導するようにライトが点灯しているだけである
ライトに従い、道を進む……すると、金色の何かの骨組みのような

物がたどり着いた部屋一面にあった

《あら、開けた部屋に出たけどこれが貴方の秘策かしら？》

「そう、これがウーレンベック・カタパルト……あらゆる物体を亜光速で打ち出し運搬するカタパルトだよ。」

ウーレンベック・カタパルト……火星の惑星フォボスに作られたのきっかけに大中小いくつかのカタパルトが建造されていたが、その殆どが機能を停止、使用不可になっていた為、ここに来たのだがなんとも因果な物だ

ハヤテはここで目覚め、ここで死んだ……そして、過去の事件で大破していた此処は再生、生まれ変わったのだ

ハヤテの終わりであり始まりの地、そこは再建された頃のままの姿で残っていた

ヘルメス内部のコンソールを弄り、ウーレンベック・カタパルトを調整する

射角計算や空間圧縮率で打ち出される速度を決めて設定する

「ウーレンベック・カタパルトの空間圧縮中は時空間の歪みの影響で一切の通信が出来ない、そこを注意しておいてくれ。」

《了解、そっちも気をつけろよ。》

クロッカス内部に居ては、万が一の可能性に対応出来ない為、こうしてヘルメスが外部で対応する事になった

空間圧縮での移動の一番の注意は、圧縮空間の通路が生まれ通常

空間から保護されているのだが、この際発生する空間圧縮の歪みの境界に触れた物は外部の物は押し退けられ、内部の物は悪くて外部との抵抗の差で粉々に粉砕される
あえて悪く言ったのは、軽くなった事があまりにも無い為だ

【空間圧縮……スタート、カウント６０……】

空間圧縮が開始された……金色の光の流れがクロッカスとヘルメスを包む
圧縮する時間は約１分だ
これ以上は、クロッカスが減速制動に耐えられず、粉々に砕けるからだ
正直な話、何ヶ月も全くメンテナンスされず、過酷な環境に曝され朽ち果て寸前な戦艦なんぞ鉄の棺桶と対して代わり無いのだ

【……3……2……1！】

「圧縮空間、開放っ！！」

空間圧縮の解放された際に起こる反発で、クロッカスは漆黒の宙（ソラ）に飛び立つ……母なる星に帰る為に
何も無い今よりも、汚泥に塗れた明日を掴む為に……邪神の揺り篭になっているとも知らずに

第十七羽　帰って来た故郷

戦艦クロッカス、ネルガルの実験艦ナデシコがスパキャレリ・プロジェクトの一環で火星に向かった数ヶ月後に帰って来た戦艦だ
ボロボロになり、ひび割れた装甲は痛々しく見えたが、中に火星の民を乗せていると聞かされたら、それは勲章のように見えた等、現金な感想があった
ただ、軍部を震撼させた事があった
それは、火星の民をレイヴンズ・ネストが保護する旨を正式に公開されたからだ
ネルガル側も寝耳に水、抗議も視野に入れたが『出来なかった』のだ

【オービタルフレーム　ヘルメス】

１５ｍとやや大型の部類に入るが、単独での恒星間移動能力に凄まじい火力、これだけでも頭抱えて正気を疑うには十分な内容なのだが、次の機能を聞いたものは一時的発狂をした

【亜光速移動能力　ゼロシフト】

瞬時に亜光速をたたき出すその力は、地球上の何処にでも瞬時に移動できる事を意味していた
圧倒的なまでの武力、過剰を通り越し苛烈戦力である
広域に置ける爆撃、殲滅に加えピンポイントの殲滅もこなせる正に万能機
作った奴は頭が逝かれていたに違いない
レイヴンズ・ネストでは、封印命令が下され、使用が半ば禁じられている
傭兵の寄り合いみたいな組織故に絶対禁止とまでは行かないが、信

用を失い仕事を斡旋して貰えなくなるだろう
そんな愛機を見上げながら、ハヤテはため息をついていた

「どうしたものかねぇ……悩み事と言うか懸念事項と言うか、気持ちが落ちていくばかりだよ全く。」
【ルリさん達にもお別れ言っていませんでしたよね。　ツンデレみたいな死亡フラグ寸前の言葉がお別れとは悲しいものです。】
「ホントだよ、おまけにまだナデシコは帰っていないみたいだし……ままならない世の中だよ。」
「ままならない世の中って割に中々シュールな光景を見せ付けてくれるじゃないか、戦友（トモ）よ。」
「【……っ？！】」

不意に後ろからかけられた声、聞き慣れたその声は、ノブリス・オブリージュ（高貴なる責務）を掲げて戦う戦友『レオハルト』だった
最近、弟子が出来た彼は善戦を退く気らしい……リンクスは、次世代型人型機動兵器アーマード・コア・ネクストを操る為のシステム『ＡＭＳ接続』は、人体の脳にかかる過負荷故に戦士として寿命が短い
『俺』は、適正が皆無に等しかった故に現行の人型機動兵器（アーマード・コア・ノーマルと呼ばれる）の搭乗者の総称であるレイヴンのままだったが
ネクストとノーマルの差は三倍できかないそうだ……が、ハヤテはそれでも一機墜としている
狭い場所に追い込み、爆雷で間接部を痛め付け、コクピット部分にパイルバンカーをズドンと入れる
搭乗者は、中で挽き肉となっただろう

若干気持ちの悪い記憶を思い出しながら、レオハルトとの会話はそれなりに弾んだ
リンクスはたいてい……ほぼと言っていい程にレイヴンを見下す傾向にある
しかし、彼は自戒し、隙を殺し、敵にさえ笑顔を向ける事がある男だ
だが、その気質故に女性リンクスやレイヴンに虎視眈々と（結婚的意味合いで）狙われているのを俺は知っている
実は、ヘルメスを格納ハンガーにかけている格納庫の外側扉に何人か人がいるのがわかる

「火星はどうだった？　こんな機体を見つけたって事はかなり神秘的だったんじゃないか？」
「まぁ、うん……なんつうか、今までの常識が滅多打ちにあった揚句、今まで定まらなかった人生目標が定まって来た感じかな……うん、かなり奇っ怪な星だったよ。」

火星の民が聞いたら泣いて否定しそうだが火星について早々に襲撃、機体も持たず、ベイルアウトも絶望的と判断した為自爆をしたら、気が付いたら別世界？に居て、そこで様々な体験をした……良くも悪くもだが
それを聞いていたレオハルトは、にこやかに微笑むと組んでいた手を解きハヤテの肩に手を置く

「そうか、よしっ！　飯を奢ってやろう……対価は分かるな？」
「たく、相変わらずだな……」

久しぶりにあった戦友達は、その羽と爪を休め、磨ぎ、獲物について語り合う
ぱっと見は穏やかで平和でも、彼等はやはり『傭兵』であり『戦争屋』であった

【全く、微笑ましいと言うのでしょうかね……】

ただ、そんな光景ですら微笑ましく見える……この場所は、それだけ歪んでいるのだろう
平和に見えてもその実は水面下でいつも闘っている……ウォーホリック（戦争中毒者）が集まる場所、それがレイヴンズ・ネストである

謎めいた岩以外、特に何もない見当たらない海底……濃紺を越え漆黒の宙（うみ）と比喩されるその空間に、光の粒が現れる
それは、謎めいた岩から漏れ、岩の片方は華開くようにその口を開く白地に赤がアクセントの奇っ怪な形をした戦艦『ナデシコ』である
重力を捩曲げて作られる障壁は健在であり、それにより浸水を免れている
痛々しいまでに傷付いた装甲を引きずるように浮上を始めるナデシコ
海面に出ると、障壁によりお椀状に歪んだ海面が出来上がる
しばらく、そのまま暫く停泊する……もう限界だと訴えるように

――

ナデシコ内部のスタッフ皆が寝ていた……オペレーターに整備員、コックにパイロットまで寝ている
その中に、艦長のミスマル・ユリカとコック兼臨時パイロットのテンカワ・アキトの二人……そして、足止めの為に所属不明機と火星に残ったヤマダ・ジロウとフクベが居なかった
一足先に起きたホシノ・ルリ……ルリは端末をただひたすらはしらせていた
乗員の皆の安否……全員無事、バイタル安定、表面状は問題無い
ナデシコの各主要機関の簡易点検……核パルスエンジン異常無し、相転移炉出力４５％で安定……オールグリーン
自分がやりそうな大体の事はオモイカネが熟していた……やはり、デルフィの教育は恐ろしい
だが、そのデルフィにはもう会えない……自分の兄のような人と共に火星の空に散ってしまった

「ハヤテさん……デルフィさん……」

火星で聞いた自分達を逃がしてくれた人物の声によく似ていた……だが、破片が殆ど残らない程に消し飛んだ彼が生きているとは思えない
ただの他人の空似で済ませたが……やはり悲しい、苦しい、会いたい
呆然とする頭を冷ます為に額に掌を乗せてのけ反る
ハヤテの行動を観察している内に移ってしまった癖で、ハヤテはイヤホンで音楽を聞いている事が多い……多少の音漏れな一緒に聞かせてもらった曲の大半が英語の歌詞で面倒だったが
彼の遺品という形でルリが現在所持している首かけ式のｍｐ３プレ

イヤー
　大量の音楽が入っていて、ジャンルは不特定多数……気に入ったらどれこれ構わず入れてしまうようだ
流行りのＡ-ＰＯＰまで入っていて、以外だったのは『ゲキガンガー３』がさりげなく入っていた事だろうか
でも、全てはルリだけの秘密……ハヤテが直接取りに来るまで抱き続ける秘密

シュイン

　ネックレス型アクセサリーについたカナル式のイヤホンに耳を預けていたら、誰かが入って来た……艦長のミスマル・ユリカだった
走って来たのか、少し赤見の挿した頬に揺れる肩が印象的だった

「あ、ルリちゃんも起きていたんだね？」
「はい、やる事が最近減って来てしまったのが不満です。　オモイカネがほぼコンディションチェックを済ませてくれてたんですよ。」
【凄い？】
「うん、早起きなルリちゃんやオモイカネも凄い凄い♪」

　事の凄さが分かっているのか分かっていないのか……はしゃぐ艦長に引き気味のオペレーターに制御ＡＩであった

―――――――――――――――――――――――――――――

～ナデシコ出現　８ヶ月前～

ハヤテは暇であった……依頼は来ない、商売道具の機体は万全、両親は研究で相手をしてくれない
交友関係は狭くはないが、いかんせん皆木星トカゲの無人兵器掃討に出払っていた……暇だ
外部組織だが、横の繋がりで関係が深い総治企業連盟……通称『企業連』直属の傭兵管理組織である『カラード』の『リンクス』と呼ばれる者達もそれぞれの企業の商品を売り込む為の広告塔として頑張っている
カラードに所属する傭兵の大半は企業直属の為、少ないながら安定した給料が出てるんだとか
企業連の一つであるGA系列の企業『クレスト』に所属する傭兵『ジノービィー』は同じ傭兵の奥さんも貰い、少ない給料の有り難みを噛み締めているとメールして気がする
大学行くか行かないかのガキに何をいってるだが……ジノービィーには意外と抜けた部分があるから奥さんが頑張らないと駄目になりそうだな

全く関係の無い事を考えて過ごす日々……それは、自身の体が人外になった事を嫌でも知らしめた
混乱していた冷たい殺戮と暖かい日常が心を痛め付け、石のように冷たい体が……布や羽毛よりも石や機械のような鉱物系の方がしっくり来ている体がさらに心を響く
外の空気を吸おうと、部屋の扉を開けたら、そこには父が居た

「少し……良いか？」
「あ、あぁ……」

缶コーヒー片手に喫煙室に誘う父……ヘビィスモーカーの彼は、

誰かを誘って休憩かサボタージュする際は喫煙室に言っている
何故なら、幼い『外見』の母を愛しすぎる故に過保護というか、実はロリ■ドなのでは無いかいう疑惑すらかかっているが関係ないから割愛する
そんな父は、自嘲するような笑みを浮かべて電子タバコをふかしている……禁煙できない部類の人間は大変だね

「……何考えているか知らないが、お前はお前で、ジャックの意図を掴みあぐねているようだな。」
「まあ、うん……暇過ぎて泣きたい。」
「簡単な話、お前が働きすぎるのが原因なのだが。」

……単に、自分が仕事中毒なだけのようだ
おまけに、傭兵……レイヴンとして仕事とは誰かしら殺しているから殺戮中毒と勘違いされかねない……父のいたたまれない表情からして本当にヤバイみたいだ
一人のレイヴンが働きすぎると全体のバランスが崩れる為、こうして規制がかけられるが自分は初めてだった

「休暇……って訳じゃないが、たまには息抜きでもしろ。　どんなに取り繕ってもお前も人の子なのだからな。」
「……うん。」

父に渡された『日本行き』の航空チケットを受け取り、その場を後にする……ちらりと父を振り返ったら、父から何やら哀愁漂う雰囲気になっていた

――――――――――――――――――――――――

レイヴンズ・アーク本部のあるヨーロッパから、レイヴンズ・アーク日本支部まで直通の飛行機に乗りまる二日……良く襲撃されなかったと改めて思った

どんな派閥にも喧嘩を『つい』売ってしまうハヤテは、何処のテロ組織やマフィアから嫌煙されがちな人物だ

ロケット弾の一発や二発は飛んでくると思ったがそれも無かった

「なんもなかった事が逆に怖いなんて知らなかったな……」

羽田空港を出て、キャリーバックを引いてモノレールステーションに移動

そこから、東京駅行きのを探してマネーカードを昔からさほど変わらない自動改札を通って

モノレールを待つ……程無くすると、人をしこたま乗せたモノレールがやって来た

乗っていた人が反対側のホームに下りていくと、ハヤテが居た方のドアが開く

人ごみに辟易しつつもなんとか席を確保すると、荷物を上のラックに置いて

対面型の座席に深く腰をかける

少し変わってしまった故郷に哀愁を思いつつ、直に頭を振るう

自分にこんな思いを浮かべるなんて『らしく』ない

自分らしいなんて、まだよく分からないモラトリアルな年頃だが、コレだけは分かる
故郷や一つの対象に一定以上の感情を、一線を超えた思いを持つなんて許されない……
許される筈が無いのだと思っている
歩けば焦土、話せば血の海……物凄く不名誉というか、いじめのような風評だが、ハヤテの
一部からの扱いはこんなもんである
扱いづらい道具（へいき）に価値は無い、世界の軍事兵器企業なんてこんなもんである
自分勝手に戦い、自分の為にしか闘わなかった男の評価が高い筈が無い
ひと時の平和でも、表面取り繕っただけの平和でも愛おしく感じてしまうのは、多分休暇だからだろう

「すまないが、前をいいだろうか？」
「ん？　ああ、どうぞ。」

紫の艶のある長髪をポニーテールで束ね、ビシリと決めたビジネススーツにコートを着込んだ女性が前に座る
決まりすぎて変装なのか素なのか分からない丸形サングラスがかっこよく見える
俺のかけている丸形サングラスと同じメーカーだが、だらし無い俺と訳が違う
俺がくたびれた旅人なら彼女は粋なビジネスマンだ

「失礼ですが、旅の方ですか？」
「いえ、海外で働いているのですが、最近お暇を頂いたので、故郷

を見ておこうと思いまして。」
「そうなんですか……大変ですね。」
「いえいえ、半場気ままな自由業ですよ……ええ。」

嘘は言っていない……傭兵みたいな因果な職は知られないに限る
何処で狙撃されるかわからないし、何より目の前の初対面？の彼女に無用な詮索されるくらいなら駅の売店で暇つぶしに買った雑誌を読んでいた方がマシだった
雑誌の特集には最近話題のＢＦＦのモデル【メアリー・シェリー】についてだったが、全く頭に入らなかった
何故なら目の前の女性がチラチラとこちらを見るからだ
そんな期待の込められた視線を受けては居心地が悪い……雑誌をしまい、向き直ると確信したような……パァァと言う効果音が聞こえるくらい明るい笑顔を向けられた……意味分からん

「ところで、貴方は何処まで乗るんですか？」
「東京ステーションで降り、故郷の筈の柊町まで電車で一本ですよ。」
「なんと、私と一緒ですかっ？！」

女性が驚いた表情をし、大声にならない程度の声量で驚きを表現する……どこぞの解体屋に見習わせたいぐらいに器用な真似だ
女性の話では、海外に大事な会議があり、それが終われば休暇で二、三日フラフラすらつもりだったらしい
これは話題の逆ナンパと言う奴だろうか？　母に気をつけろと言われているが、悪意を感じない以上最低限付き合おうと思ったのを、後日後悔するのであった

第十七羽　帰って来た故郷（後書き）

暫く、ナデシコが未帰還前の描写を書いていたいと思います。
ダークヒーローは日常に苦悩しないと成長しない気がするんですよね。

異端録第二項（前書き）

大体……4、5話に一本挟むように異端録〇項というのを更新していきます。

異端録第二項

剣を振るい、己を一振りの剣とする――――――決して、高みに昇りつめる考え方では無いが、
戦場という不特定多数の人間の死ぬ場において、己を強く持つのは容易ではない
どんなに木刀を振るい、道場に通いつめ、業を磨き上げた剣士であっても、
本当の血の味を覚えた獣に敵う道理は薄い

なら、人間である事を捨て去ってしまえば良い――――――
そう思い、感情を捨て、思いを捨て、過去を捨て――――――
残るのは唯『斬る』事しか出来ない、それしか知らないボロボロの錆刀である

今、俺こと【孤島　疾風】を蝕むのは捨て去ってきた過去の思い、重い枷のような楽しい思い出と
目の前に広がる戦時中とは思えない、平穏な日々であった
しかし、疾風は平穏に馴染めず、枝を振るい、竹刀を振るい、木刀を振るい、知恵を振るい
怨敵を殲滅させる事しか考えていない機械的な、ルーチン化された日常が【最初の一年】続いた

今は、見に覚えこそ無いが、親戚筋なのかもしれない（記憶が曖昧で一々覚えていないのだが）、
【篁（たかむら）　唯依（ゆい）】と共に、日本帝国軍の……それも
その帝国軍のエリートや伝統的な武家でしか所属【斯衛軍】の技術的な芯に関わる人物である【巌谷（いわや）　榮二（えいじ）】に引き取られていた

何でも、親父に借りがあるとか――――正直、また親父かと辟易したが――――こうした、安定した環境を与えてくれて感謝している
何故なら精神的に辛い事の多く、傷心気味だったのと、知恵を【蓄える】期間を与えてくれた事だ
安心して、知恵を蓄えられる事は、異星人――――ＢＥＴＡが本格的に攻めて来てから滅多にない物だと
思うからだ

正直、いつまでかかるか分かったものではないが、この惑星(ほし)から、この太陽系から、この宇宙から連中の存在を抹消し尽くさねば気が済まないのだ
それが、例え悪魔に魂を売る行為だったとしても、喜んで売り払うだろう

そして、こんな決意を固めた代価だったのだろう――――あの女／男／老婆／老人が俺の前に現れた
俺が欲した力を餌に、俺という【存在】を獲得し、暇つぶしの玩具とする為に

……
……
……
・

異端録第二項（後書き）

異端録は基本、このような断片的な表現で展開していこうと考えています。

それにしてもＳＲＷＯＧ２のヒュッケバインはカッコイイねっ！

第十八羽　帰郷と再会と

やはり、変わっていた……時代錯誤なまでに一昔前の住宅街だった『柊町（ひいらぎちょう）』――――別に下がる事に定評はない――――は、綺麗に整備されたハイテク住宅街にランクアップしていた

俺は、隣を歩いているニコニコ顔が崩れない女性に道連れに『された』のだが、それを差引して役得だろう

想像してもらいたい、いきなり相席になった女性……しかも美人に逆ナン同然に連れていかれ、見るものを魅力する笑みを崩さない女性が、自分の隣を歩いているんだぞ？

自分の周りにいる女性で数少ないまともな部類に入る『フィオナ・イェルネフェルト』は妹のような感じ？であり、『ジナイーダ』は純粋にライバルだ

『普通の美人』が同じ目的で、隣を歩いているなんて超展開に顔が暑い

多分、今鏡を見たら頬が赤見を帯びているだろう

Ｂｕｕ！　Ｂｕｕ！

「（携帯のバイブ？　仕事か？）」

今から見たら、少し古めな折りたたみ式の携帯電話を開き、差出人と件名を確認する

緊急性を帯びた依頼が来たら、目も当てられないが、公では休暇なので違うだろうと辺りを付けて確認する

差出人：ＤＥＬＰＨＩ
件名　：どうですか？
本文
　整備の一環で、メール機能を利用した通信機器の確認をしています。
差し支えなければ、返信をお願いしますね？

　酷く簡素な内容だが、逆に彼女らしいなと苦笑を堪え、返信内容を二～三秒程考えてから返信する

差出先：ＤＥＬＰＨＩ
件名　：確認した
本文
　順調に整備されているみたいで、一安心したよ。　今、日本の柊町……俺の故郷にいるんだが、記憶が何か曖昧なせいか、複雑な気分だよ。
土産買って帰るからお楽しみにな。

まあ、こんな感じで良いだろう……多分
不思議な物で、ＤＥＬＰＨＩ……デルフィは基本的に日本語と英語の両方で情報処理をしている
なんでも、お互いに利点があり、それを生かした結果なんだとか
相棒が、徐々に世界に慣れていく様を見ていると何か……胸が暖かくなっていく、にやけていたのを見たのか、女性がこちらを覗き込んで来た
俺は慌てて飛びのいた

「先程から、私が案内をしているのを無視し、メールに現を抜かすとは……良い度胸ではないか？」
「わ、悪い……調子が悪い奴が良くなって来たって内容だから、つい集中しちまった。」

ジトーっとした、張り付くような視線を極力無視し、彼女の文句に素直に謝罪する……サングラス越しにも分かる睨みって何なんだ
かつて、ＧＡの依頼を受けた時に、顔を合わせた『ローディ』という傭兵並に含蓄ある睨みなモノだから、つい飛び退いてしまったイカンイカン、これでは敏感な若鳥じゃないか
努めて、何事も無かったような雰囲気を醸し出すことで、ごまかす作戦は上手くはいかず、仕方なしに近所のファミレスで奢らされる羽目になってしまった

――――――――――
――――――
――

すかいてんぷる……略して『すかてん』
ツンデレな店長と、踏みにじられる様に居るヘタレだったりする様々な正社員とアルバイト達によって切り盛りしているファミレスなんだとか

「遺伝子情報は、故郷に帰ってくると分かるって言うらしいが、マジだったんだな……」

季節感ゼロな『松茸定食』を食べながら、呟く……生身では無くなったけど、味覚や触覚は生きているようだ
不思議なモノだ……メタトロン合金――――合金鉱石の集合体の体に、自分の意識という電気を落とした（ダウンロード）だけの体なのに、不思議と違和感が無い
そう、全くと言っていい程に『無い』のだ
問い詰める事は出来なかったが、脚の義足をわざわざメタトロン合金製にしたのは、この違和感を少しでも無くす為かもしれないと、考察しながらも味わう

松茸の豊かな香りは、外人には余り理解されなかったりする
この間、友人と食事をした時も微妙な顔をされた

「ふむ、悪くない……流石は大空寺というところか。」
「費用対効果をガン無視していそうで、実はしてないのが凄いな……」

のんびりとした時間……対岸の出来事のような気がしたのだが、

こうして味わうと中々悪くない
自然と笑みが零れ出てきそうだったが噛み締め、味を噛み締める

「なんだ、笑えるんだな。」
「な、人を何だと思っていたんだよ……」
「ふふ、すまぬ、余り笑わない奴だと思っていた。」
「ひでぇ……」

無事（？）に食事を終え、再び街の散策を始める
何故、無事に食事を終えた事に安堵しなくてはいけないか解らない
今は柊町の隣街まで来ていて、全く変わらなかった柊町と違い、かなり開発の進んだ街並になっていた

「すっかり代わってしまったな……私がいた頃とは大違いだ。」
「へぇ……俺は中学の終わり迄しか居なかったからな……ちと、曖昧かな。」

亡くなった『記憶』を、『記録』で補完して行く……こうすると、自分が人間ではなく『モノ』では無いのかと思ってしまう
生物学上、鉱物の塊である自分はモノに分類されるだろうが、周りは人間だと肯定してくれるか……いや、関係ないから働けとか言われそう
モラトリアムのようなものに没頭し過ぎたせいだろうか、女性が心配そうな表情で見てくる……そういえば、彼女のｎ

「顔色悪いが……大丈夫か？」
「あ、あぁ……時差ボケかな。　少し疲れたみたいだ。」

咄嗟の事だとはいえ、以下にも渡航慣れしていないアピールをしておく
傭兵の性質上、時差ボケなんて殆ど起きない
少し眠いかな？　くらいなら起きるが、顔色悪くなる程の時差ボケはもう起きないのだが、平和な国で通っている日本で知られたら、国際テロリストと言う事で捕まってしまう
世知辛い世界なんです、傭兵稼業は

「そうか、私の借りた部屋で少し休んだ方がいいだろう。」
「いえ、此処まで来たとはいえ、名前を知らない人にそこまでして貰うわけにはいk」
「なら、教えよう……私の名前は」

変装越しにも分かる、凛とした、美しい顔を耳元に近づけ、どぎまぎした俺に彼女はこう、囁いた……『御剣（ミツルギ）　冥夜（メイヤ）』と

第十九羽　御剣

戦慄……同時に疑惑が頭に過ぎる
ここで、【御剣財閥】について説明しなくてはいけないだろう
御剣財閥とは、日系企業として稀有なハッキリとした手腕と代々継がれる精神でぶれる事のない世襲性の企業だ
その影響力は、世界の半分にまで及び、日常品から戦車まで……とにかく、節操無しに開拓余地のある分野にはとことん首を突っ込む企業である
　その力は、レイヴンズ・アークの裏の顔――――力を持ちすぎた企業の粛清――――の対象にも成った程だ
が、レイヴンズ・アークを統括するクラウド型コンピュータ【ネスト】は強すぎる表への影響力故に断念する事を推奨
　軍事関係はあくまで弾薬や装甲材などを手掛けているが、あくまでも、補助的な立場にある
しかし、企業的な圧力が強い為、名だたる他の軍事企業……【レイレナード】や【グローバル・アーマメント（GA）グループ】などは、強くは言えない立場にあるのだ
これが、昨今の企業間闘争を押さえ込む結果にあるのは、なんとも恐ろしい事だ
その結果を生み出したのは、この女性……【御剣（ミツルギ）　冥夜（メイヤ）】だと言うのだから驚きだ……そう、この

「体が冷たい……やはり、少し休むべきだ。」
「だから、大丈夫だって。　だぁもうっ、アンタは俺のおかんかっ！」
「あ、アンタ……アンタ……」
「（がぁあああっ！　面倒臭ぇっ！）」

意味のわからなぬお節介が、自分の商売敵なんて……俺は思いたくは無かった
こんな、少し抜けたお節介が、俺の左足の仇なんて
不意に、意識が沈んでいく、まるでまどろむ夢に墜ちるように
彼女の後ろで、燃え盛る三つの目が、俺を嘲笑っているように見えた
俺は、そこまで認識した後、意識が途切れた

――――――――――――
――――――
――

Side－Meiya Miturgi

「ふぅ……落ち着いたみたいだな。」

大丈夫だと言った癖に、突然倒れた彼……幼き頃に愛し、今も心の何処かで求めてしまう彼【孤島（コジマ） 疾風（ハヤテ）】
世間的に今は亡き、災厄を齎すと言われる【コジマの一族】の末裔とされている彼だが、それは違うと声高々に言いたい……立場が許してはくれないが
私がまだ、世間知らずの乙女の頃、彼は、孤独に生きていたと聞かされていた
両親を早くに亡くした（謀殺されたらしい）彼の心は、人を信頼する事を止めてしまったらしい
その証拠に、彼が昔から良く遊んでいると言う【白銀（シロガネ） 武（タケル）】と【

鑑（カガミ）　純夏（スミカ）】以外、殆ど周囲に寄せ付けなかったそうだ
　そこまでは、まだ良い（良くは無いが）のだが、彼は中学生の頃、
突然行方をくらました
古くからコジマと交友のある、世界の殆どを知ることの出来る御剣
財閥の情報網でさえ、二年前まで彼の行方を掴めなかった

　彼は、戦場を駆ける傭兵になっていた
アーマード・コアと言う人型汎用機動兵器に乗り、無慈悲に人を殺
す悪魔に身を堕としていた
それが、今、この瞬間、会ってみたらどうだろうか？
穏やかな笑顔、冷たいが心温まる腕、神の如く包容力に満ち溢れて
いた（冥夜視点であり、その実はヘタレである）

「早く……起きてくれ。」

　私は、姉上に教わった方法を試してみようと思った
冷たくなった人間を、負荷をかけずに温める方法なのだ

しかし、この時気がつかなかった……燃え盛る三つ目の無貌の神が、
腹を抱えて大爆笑しているのを

Ｓｉｄｅ－Ｏｕｔ

――――――――――――――――――――――――

Ｓｃｅｎｅ－？？？

無限に広がる宇宙……虹色のような、否、冒涜的な色の泡が辺りに立ち込めている
触れれば消えてしまいそうで、つい身を縮こんでしまう

「（なんだここ……吐き気を通り越して、呆れてしまうほど、呆れてしまうほど美しいな。）」

普通の人間なら、暗闇と謎めいた光故に心を病んでしまっていただろう……しかし、軽く予防接種程度に病んでいた男なら、少しの間なら耐性があったようだ

「おやおや、中々に早い覚醒じゃないか、疾風君……初めまして、僕の名前はナイア……所謂君のファンだよ。」
「（誰だコイツ……なんか、ムカつくな……意味も無く）」
「あぁ、あまり邪険にしないでくれよ……つい」

【愛おしくて（憎たらしくて）抱きしめて（くびり殺して）しまうだろう？】

「っ？！」

吐き気をもようす程の美しい笑みを浮かべ、美女（醜女）は疾風（ハヤテ）の額にキスをした
あまりの衝撃（拒絶）に、意識は吹き飛んでしまい、疾風（ハヤテ）は白目を

むき、口から泡を吐いて空間から霧散していく

「おや？　まだ早かったみたいだね……ま、焦ることはないか。もっと奏でてくれ……醜悪な迄に彩られた聖歌（呪唄）を、逝く魂をも塗り潰す鎮魂歌を……君自身の為にも、ね。」

そして、美女（醜女）もまた、女性／男性婆／翁／少女／少年のような声で、全てを嘲笑うような声で、空間から霧散して消える……盲目なる、白き魔王を残して

Ｓｃｅｎｅ－Ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ－Ｈａｙａｔｅ

「（何処だ……ここは……？）」

寝起きの為か、頭が働かない……目の焦点はボケ、頭はグラグラする

二日酔いのように、ズキズキと痛まないだけマシだが、此処で額に銃を突き付けられも、反撃のはの字も出来ずに自分は死んでしまうだろう

その時、相手は自分にかけられた多額の賞金を手にしたと憎たらしい笑みを浮かべるだろう

脳内会議がそこまでハッキリと意味の分からぬ方向性を持ち出し

た直後、意識はハッキリとしていく

視界――概ね良好、問題無し

嗅覚――ガスらしき匂いはせず、問題無し

聴覚――右側から寝息が聞こえる、問題無し？

触覚――右半身に、温かく柔らかいものを感知、問題ｎ

……ちょっとまて、何かおかしくないか？　特に聴覚と触覚、右側にモロ問題出てるでは無いか……ちゃんとしろよ俺の頭

そう思い、右に顔を向けると……桃源郷（トウゲンキョウ）がそこにあった

柔らかい二つの感触が腕を支配し、右足を細長いがしっかりと引き締まったナニカがガッチリとホールドしていた

……何故、御剣財閥の現トップの片割れが俺の横で幸せそうに……この世の全ての幸せを集めたような、マジモンのニヤケ面で寝ていらっしゃるのでしょうか？

――ホワイ？

Ｑ１、酒の勢いでヤッてしまった？

↓Ａ、即打ち首もんだよ、それは。

第一、俺は酒を飲んでも酔えない体です。

Ｑ２、右腕を支配（蹂躙）しているモノ（ブツ）は気持ちいいですか？

↓A、ごめんなさい、凄く気持ち良いです。
だから、責任者出て来て。　そして、この腐れ作者をぶん殴ってくれ

なんてメタい思考に囚われ（混乱）していると、女性……御剣冥夜の瞼が開き、寝ぼけながらも、真っ直ぐと凜とした瞳を向ける
そして、女性らしいみずみずしい唇を開いて第一声が……

「おはよう疾風……私は嬉しい、君が帰って来てくれて。」
「へ？　え？　は？」

帰って来てくれて？　意味が分からない……俺には意味がサッパリと分からなかったが、ふとあるビジョンが頭に浮かんだ……忘れていて、頓着しなかった過去の記憶のようなモノが

Ｓｉｄｅ－Ｏｕｔ

――――――――――
――――――
――

Ｓｃｅｎｅ－過去？

俺は、【ダレカ】と一緒に一心不乱に、公園の砂場に穴を掘っていた……デカイでかい大穴を
何となく、【ナニカの底】を見たかったのかもしれないし、幼少期に、たまにはある唐突な思い付きかもしれない

だが、俺は穴を掘っていた
　滴る汗を拭わず、一心不乱に、顔が泥だらけになる事もいとわず、ただただ掘っていた

『いがいとあさいんだな、スナバって。　■■■、水のみにいこうぜ。』
『サンセぇ……たく、ヘンなことにつきあわせるよなオマエ。』
『それがオレだからな（キリッ』
『……なっとくしてしまう。くやしいっ！だけど（以下略』

……とてもではないが、幼少期の児童がする会話の内容では無いだろう
水飲みに行こうと提案した少年は、少々長いくせっ毛であり、砂場に空けた大穴の側面に溝を掘り、器用に圧し固めてしまう
　そして、提案に参考した少年は、短く切りまとめ、サッパリとした焦げ茶色の髪の毛である
二人共、土木作業を終えた後のオッサンのような雰囲気である
二人して、アレはこうしたほうが良いや、放置して帰ろうなど話し合っていると、それは起こった

『『キャァ？！』』
『『っ！！』』

突如、絹を裂くような悲鳴と共に、砂が崩れるような音が聞こえたくせっ毛の強い少年は、有無を言わずに駆け出したが
ペッタリとした髪の少年は、原因を察したのか黄昏れている
　昼を過ぎ、お天道様が軽く傾いた空

日常の中で非日常が始まる……気がした

―――――――――――――

ヒッグ……エッ……

『ヤバイ…かなり気まずい……』

己の好奇心故に、砂場に穿った穴に誰か落ちている……気まずいなんてもんじゃ無い
穴の近くには、何故か竹刀袋と、先端が袋に覆われた長い棒が刺さっている
そこには、【めいや】と【ゆうひ】とひらがなでかわいらしく書かれている
くせっ毛の少年には、ひらがなが読めたが、さらさら頭の少年には分からないようだが
とにかく、ちゃんと謝まらなければと、穴を覗いたら、二人の少女が居た

『おぉい、大丈夫か？』
『は、はい……でも、めいやが』
『足をくじいたか……まってろ、すぐにだしてやるから。』

穴の端を緩やかに削り、階段みたいに固め、足をくじいた女の子

を抱き上げる

『すこし、きをわるくするかもしれないけどゆるしてな。』
『ふぇ？』

背中と足の間接を支えるように抱き上げる……所謂『お姫様だっこ』の要領で抱き上げ、足を悪くしないように慎重に運ぶ
そして、ベンチに寝かせ、公園の水で冷やしたハンカチを患部に当てて少しでも冷やす

『ふぅ……だいじょうぶ……な訳ないか。　ゴメン、あの穴掘ったの俺とあそこでハンカチ冷やしてる奴なんだよ。』
『……』
『ホントにゴメンっ！』
『…いい』
『へ？』

くせっ毛の少女は、下げていた頭を上げて少女を見る
足が痛いのか、少し涙ぐんでいたがこちらをしっかりと見ている

『ゆるす。　だから……』
『へぇ？』

視界が、塞がれ、そのまま……

Ｓｉｄｅ－Ｏｕｔ

――

――――――

――――――――――

Ｓｉｄｅ－Ｈａｙａｔｅ

意味が分からなかった

人から愛されるなんて、親以外から初めてだった……いや、親さえも怪しい

人から無償の愛なんて圧し付けられたなんて初めてだ

「え……えっと、何を……」

「接吻だ。　知らないのか？」

「それは分かる、いや、なんで君が俺にキスを……」

「好きな人にキスをしたらいけないのか？」

「え、えぇぇ……っと、なんで？　え？」

意味が分からない、意志疎通が出来ているかさえ怪しい

もしかしたら、彼女と俺の言葉の認識はズレているのかもしれない

一言で言うならば――【どうしてこうなった……】――である

散々、状況に混乱していると、携帯電話のバイブが聞こえる

藁にも縋る思いで確認すると、メールが来ていた

そのタイトルには、こう書かれていた

件名：依頼が来ました。　至急、帰還してください。
差出人：フィオナ

ハヤテは、盗んだバイクで走り出す勢いで部屋を出て行く
理解できないモノが怖いから
だから、まだ理解できる日常（非日常）に逃避する
しかし、人として、男としてどうなのだろうか
責任から逃げてるだけのようにも見える
御剣冥夜は一人、部屋で妖艶な笑みでハヤテを見送っていた
まるで、狩りをする鷹のような眼であったが

第十九羽　御剣（後書き）

もう、明日テストなのに何してるんだろうに俺。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4330l/

機動戦艦ナデシコ 異端録

2011年3月6日09時38分発行